演劇脚本

嵯峨奥妖猫奇談　下の巻

三世相縁本阿彌　三幕

版權所有
興行權

088561-000-6

特52-577

嵯峨奥妖猫奇談　下の巻・三世相縁本阿弥

竹柴　金作／著

M27

DBJ-0220

嵯峨奥妖猫奇談下之卷

四幕目　大原在浪宅の場　嵯峨山花見の場

一賣卜者眞柳　一茶道竹齋
實ハ伊村市之丞　一小守半之丞
一下部勝平
一茶道純齋
一近習四人
一百姓二人
一小守半左衛門

一市之丞妻お菊
一重藏寺後家お藤
一奥方九重
一愛妾おてる
一こし元　六人

長嶋大守
左右衛門丈郎
同　重吉
若井彌平次
鶴傳六郎

竹本連中

本舞臺三間の間常座の二重上手一間反古張り障子家体いつもの所門ドロ柱へ人相墨色考伊村眞柳と記せし表札を掛此外正面竹の窓蓆葺の下家貳重正面上の方一間の押入正面暖簾口下の方中段の一段に都而大原の里浪宅の体貳重上手に勝平やつし形の上へ黑の羽織を引掛机より向ふ筆本家台を筆へ占ひを仕て居る平舞臺下手に新相中の百姓貳人住居在郷唄にて幕明く（勝平）乾元坤離〳〵當年三十八年の女速やかに有所を占せ玉ひ乾元亨利貞〳〵〇ト筆本を直してイヤモシ御貳人りさん此走り人は年增でござり升な（百姓〇）へイ三十八歳だから年增でござい升（勝）そうで有ふな〇此易の表で見ると東の方へ走つて參つゝ樣子も見得升

るな此易が變換すると西の方へ走りし樣子も見得升るて(百姓△)迚もの事お變換致さない樣に占つて下さい(勝)イヤ兎角易と申ものは裏と表ゞ合ませぬと變換仕たがるは走り人の習ひ是を尋るには壹人りは南壹人りは北と手分を仕て二タ手に探せば速かに有所が知れると申もの玄や(○)ヘエ、夫では西東と言わつしやりましたが(△)南と北でムりましたか(勝)ハテ西東を探すのだが北と南を先へ探ゞし夫れから廻つて尋ねさつしやれ(○)夫れでは東西南北と殘らずさがすのでムり升か(△)四方をさがして見る位ひなら見料を出して見て貰ひけんとくを附るには及ばぬわけ(勝)イヤ〳〵そうでない易は天地を見拔く考へ西へも走れば北へも走る活物あれば猶の事先東から順々に手分を仕て尋ねて御らうじろ多分知れるでムりませう(△)そうして見料は幾程置くのでムり升る(勝)本來なれゞ走り人は三百銅なれど各々方故二百銅にまけて進ぜる(○)夫は有難ふござり升る○ト錢を出て左樣あれゞ貳百銅(△)大きに御世話さまでござりました(勝)氣を付て尋ねさしつやれヤ兩人門ド口へ出て(○)當を付て探がそうと占つて貰つたゞ東西南北探ゞせとは(△)何だか馬鹿にされた樣だト在郷唄に成り兩人向へ這入る勝平件の錢を取りあげ(勝)イヤ旦那の羽織のお陰ドレ〳〵脱で置ませうト羽織をぬぎ疊んで居る合方に成暖簾口より二幕目のお菊若き世話女房の拵へにて出て來り(お菊)ほんにそなたも押の強いわたしや冷ヤ〳〵任たわいなァ(勝)イヤ百文でも貳百文でも是も身すぎあれば取らぬは損でムり升る(菊)あいにくとまた旦那

さまが御他出被成れた其跡へ今の貳人りがれ出故みす〳〵取れる見料を斷り言ふて歸す所(勝)折能く拙者が居合せまして且那樣のお羽織をお借り申てト者の出來合(菊)其見料はそなたゆへそちらへ納めて置くがよい(勝)イエ〳〵是はお羽織の損料代でござり升ればそちらへお納め被成ませ(菊)以前の好しみお段〳〵とそなたの世話に成り升わいのふ(勝)御用があるなら私がお坊さまのお守りを致しませふ(菊)今すやすやと寢て居る故下へ寢かして置きませうト貳重能き所へ寢かして居るやはり在郷唄に成り向ふより二幕目の彌平次蒼流し壹本差にて花道にて(彌平次)御袋樣の御行衛をどうか御尋申うと人を賴んで尋ねても何れへ御出被成しやら手掛りもるく有り所は知れど占ひ抔に見て貰ふは愚智の至りと思へども斯う言ふ時は心の迷ひドレけんとくを附け樣かト舞臺へ來り表札を見て伊村眞柳○ヲヽ爰だ〳〵○御賴み申〳〵(勝)ハイ〳〵何御用でござり升る(彌)イヤ替つた所で逢ふものだ(勝)まァ召仕の勝平どの(勝)そういうこなたは彌平次どの(彌)イヤ替つた所で逢ふものだ(勝)まァ〳〵こつちへ這入らつしやい〳〵ト合方に成りこちらへ這へり(菊)ヲヽ彌平次どの久敷お目に掛りませぬな(彌)わあたは東のお孃さま扨は伊村市之丞さまと都をお立退き被成ましたが此大原の在方に世をお忍び被成ましたか(菊)サァお目に掛るも面目ない見る影もない今の身の上此大原は勝平の產れ故郷でござり升故夫れを便りに此里でかすかに暮らして居り升る(勝)そうしてこなたは只一人此在所へ何故にござつたじや(彌)是には段〳〵譯ある

事まァ一ト通り聞いて下さい〇ト合方きつぱりと成り盛衰榮枯は世の中の習ひといへどわしが御主人重藏寺の御親子程世に不仕合なものはなく四年以前に大旦那い御養子の藤三郎さまの手おれかゝり被成れてあへない御最期被成し上又候去年九月廿日御跡目に立つ又七郎さま圍碁の相手に奥御殿へ召れし儘にてお行衛知れず家督を繼ぐべき若旦那の御行衛知れねば重藏寺のお家は余義なく改易成りと殿さまよりの仰せ出されお仕方なく〳〵主從が去年の暮に屋敷を立退き流涙をするも又七郎さまが御殿へれ上り被成れた儘夫なり御宅へお歸り被成れず行衛知れずと成りし故家をつぶそふ其爲に悴を竊かに御殿にて切害仕たに相違ないと狂氣の如く泣悲しみ果は正氣を取り乱し秘藏の猫を抱し儘夕邊旅宿を驅出し何所へ御出か行衛知れず夫故今朝から所々方々手分をなして尋ね升るが眞柳と言ふ占ひは能く當ると言ふ噂ゆへあなた共知らずして參りましたる此始末誠に當惑致まする(菊)そんなら此身が御城下を立退きました其跡で重藏寺の御名家も退轉しての御困々此身の身貧に引競べ嘸やとお察し申升る(勝)夫では今方爰へ來た三十八の御女中の走り人をば見て呉れと言つた貳人りもこなたから頼まれて來たお人で有つか(彌)如何にも主人のお袋さまい三十八にお成り被成ればさつき頼んだ旅籠屋の近所の衆に違ひはおい(勝)そうとは知らず當ずつぽうを(彌)ェヽ(勝)ィェ何當りを付けて上げ樣ふにも旦那が御留守で斷りました(彌)夫れでは伊村市之丞さまはけふは御留守でござり升か(菊)世を忍ぶ身に編笠にて面を隠し嵯

峨山の御城下邊まで參りました(彌)夫れでいづれ後程又出直して占ひを見ていたゞきに參りませう(菊)まァ澁茶成りとも入れ升から話して御出なされませ(彌)御老母の御行衛が知れぬ内と心掛り一ト廻り探がして後程參つゆつくりと御馳走に成りませう(勝)そんならわしも共〳〵にそこらを探がして進ぜませう(彌)夫れは何より忝ひがこちらの御用が有りませぬか(菊)ィェ〳〵こちらに用事はなし御老母さまの御行衛を探がして上たが能いわいのふ(勝)是に言ふのも二百の帳消し〇ィやサにやくやなしにすつぱりと行衛を尋ねて上げ度いものゞ(彌)左樣なれバお菊さま後程お目にかゝり升(勝)ドレ御同道致さしませうト彌平次先に勝平と連立て向ふへ這入るおきく邊りを見て(菊)水の流れと人の身の末ゞ知れぬと言ひながら名家と言れし重藏寺退轉仕たる御家の成行御老母樣わは發狂被成旅宿を駈出しれ行衛が知れぬとは御氣の毒な事では有る〇ト思入此時赤子泣く故へドレ添乳仕て遣りませうゥト貳枚折りの影へ這入るやはり在郷唄になり向ふより二幕目の市之丞五十日鬘着流し一本差しにて編笠を持出て來り跡より二幕目の彌太郎重吉脚半ぞふり旅形りよて笠を持出て成り(彌太郎)モシ〳〵そこへお出被成るのは伊村さまでとござりませぬか(市之丞)ヲヽそういふこなたは彌太郎どの思ひ掛ないどうしてこちらへ(彌太)ヘイ去年の秋から飯が惡く仕事もろくに出來ませぬゆへぶら〳〵と仕て居りましたが花咲く春の野掛道信心參りに出掛ましてこちらの方へ廻りました(重吉)そうしてあなたは只今では此在方に

御流浪なされてお出被成るのでござり升か(市)お目に掛るも面目ないが直き向ふの茅屋が浮世を忍ぶ仮住居じや(彌)夫れでは丁度幸ひなればお尋ね申し(重)御宅を覺へて置ませう(市)茶でも呑んでお出被成い(彌重)ドレ御供を致しませうト三人舞臺へ來り市之丞門口を明け(市)お菊今戻つたぞやト是にてお菊こちらへ來て(菊)思ひの外にお早ふござりましたさうして何方かお連れさまが(彌)ヘイお孃さま私でござり升るトおきく兩人を見て(菊)こなたハ左官の彌太郎どの(市)歸り道にてお目に掛り無理に連れて參つさのじや(菊)夫れはまアおなつかしい能く立寄つて下さんしたこちらへ御這入り被成はせ(彌)コウ重吉御免を蒙つて這入ると仕樣(重)ウんなら御めん下さりませト内へ這入る御きく捨ぜりふにて茶を汲で出す此時向ふ揚幕にて(子供大勢)猫氣違ひだ〳〵ト わや〳〵いふ是を誂への合方に成り貳幕目のおふじ病ひ鉢巻着流しにて猫を抱き出て來り跡より子供大勢竹切を持て出て來り(子○)猫を人間だと思つて居らァ笑て遣れ〳〵(大勢)ワイ〳〵ト皆〳〵わてはやす(おふじ)エヽモウ子供達と言ふものハはつけもないものではある大事の〳〵わしの息子何の猫で有ふぞいの(子○)アレまだあんな事を言ひて居らァ(△)猫氣違ひだ(大勢)笑つて遣れワァイ〳〵(ふじ)エヽそふ〳〵しいだまらぬかいのふ(大勢)猫氣違ひヤイ〳〵ト わや〳〵言ふおふじ舞臺へ來る此時舞臺の皆〳〵聞耳立(市)大分外がろう〳〵敷い樣じや(重)大方喧嘩でムりませうト門ド口を明け外へ出る子供皆々是を見て(子○)そりや加勢が出さ(皆々)逃ろ〳〵ト わや〳〵言ながら向ふへ逃て這入る重吉おふじを見て(重)ヤあなたは重藏寺の御袋さまじやァムイませんか(ふじ)わたしは又七郎の母でムり升が夫が何と仕ましたかいのふ(重)ヤレ〳〵是は思ひ掛ねヘト内へ向ひコウ〳〵兄貴重藏寺の御袋さんが來さぜ(彌)何んだ御袋さんだ○ト表のおふじを見て成程あなたわ御袋さまだ(ふし)私を知つて居るこなた衆なら忰又七郎も知つてゞ有らふどうぞ有家を敎へて下され爰ゐる居のは又七郎の弟でござるわいのト猫を見せる(重)コリヤ樣子がおかしいわへト思入御菊是を聞こちらへ來て(菊)最前聞し御袋さん且那さま通してあげて宜しふムりませうか(市)ハテ其酔酔には及ばぬ事知つさ方ならこちらへ御入申が能い(菊)御袋さまこちらへ御這入り被成ませトおふじおきくを見て(ふじ)本にそなたは又七郎逢たかつさ〳〵わいのふトおきくにすがる(彌)彌々こいつァおかしいわへト市之丞思入有て(市)眼中ぞよみて音律狂ひ扨は重藏寺の母御には發狂されしと覺へたり(菊)最前是へ御家來の彌平次殿ゞ見得られて委しい咄しを致しましたが去年の秋に御家督の又七郎樣ゞ御殿へ上り夫切り御行衛知れずと御成り被成れし故御袋さまわは發狂して又も行衛が知れぬ故心配を仕て歸りましさわいるァ(重)ハヽァ夫で分ッた去年の秋あの土船から怪しい死骸(市菊)エヽト兩人思入(彌)アコレめつたな事は言わねへものだト口留をするこなしよろしくおふじ是に心付ず猫を抱へトヤ子の樣ゐ仕て(ふじ)コレ忰そなたは何んで又七郎の行衛を敎へて呉れぬのじや

大事の兄を見失ひ夫でそなたは濟ふかいのふト市之丞此体を見て(市)如何成る譯やら知らぬ共子を失ひて發狂なしヶ程に慕ふ母御の心中業体故に易を建て死生の程も判斷致して進ぜんが何を言ふにも逆上してお出では見られぬわけ奥へ連れ行此御人をざまして寢かしてとつくりと氣を落着て遣るが能い(菊)成程左樣致しませう最前見へた御家來の彌平次殿が又後方に此所へ立寄筈でござり升から夫迄寢かして上まはうト彌太郎重吉思入有て(彌)深い樣子の有る事を知つては居れど言ふわ言われず(市)エト思入彌太郎氣を替へ(彌)イエ何〇知つた御方も氣遠ひに嘶しもめつたに出來ませぬ(菊)うんならあなた少しの間奥へ往つてお休成さんせ(ふじ)又七郎にさへ逢われるあら何所へ成りと行升わいの(菊)ハテまア御出被成ませト唄に成り御菊おふじを連て奥へ這入市之丞跡を見て(市)杖柱共頼みにして養育おした御子息の行衛は知れず家に放れ旅中にさまよい母御にい發狂するも無理ではないハラ氣の毒な事ではある(重)ヲイ兄貴搆ふ事はねへぶちまけてあの時の始末を旦那に咄して見ねへな(彌)アコレ夫斗りは言わねへ事だト口留をする思入市之丞こなし有て(市)イヤ何貳人りの衆幼年よりして此わしは人の相を見るのが好きで自然と習ひ覺へ身のすぎわいに賣トの業を營み居り升が今爰へ來た重藏寺の母御の尋る子息の行衛どうやら覺への有る樣子(兩人)エヽ(市)申て惡き義でござれば決而他言は致すまい御存あらば其入り譯を聞せて下さいト是にて彌太郎思入あつて(彌)イヤモウ實は夫故去年から骸が惡るくおこりを

震ひ仕事もろくゝ仕ませぬが決而口外成されぬと言ふ證據を見せて下すつゝら隨分御嘶し申ませう(市)如何にも口外せぬ證據はト刀を取り小拵ゑて金打を仕て(市)浪人致せど武士の魂決而他言は致さぬと言ふ誓ひの金打是が何より證據でござる(重)能く芝居でも侍が誓ひの印とやらかすからよもや證據に間違有るまい(彌)そんならお嘶し申ませう市之丞さまコウでムり升る〇ト跳への合方に成り(彌)成程拙おたのお察し通りあの重藏寺のお袋が尋る息子の其有所知つたと言ふは去年の九月丁度こつちは浪島家の御庭の土藏を塗り替へに急ぐ日限りの請負仕事此重吉と貳人りして日の暮る迄御庭の内に仕事を仕て居る其折拵(重)奥御殿にてばつさりといはせた音の間だかあく闇にまぎれて盲人がよろめく足を踏み て土藏の前迄逃て來たを跡を追駈浪嶋の大守と家來の傳六が無惨に盲目を切り殺しこつちの仕事の土船へ死骸を隠した所迄見止て置て逃樣と(彌)庭の門まで出かけたを跡から追かけ捕らへられとふゝ二人りは引戻されどう成る事かと思つたら(重)他言をするなと口留の金を二人りが十兩宛貰つて命は助つたが根が正直ょ其晩の(彌)むごい料理が目の先へ散らつくせいか煩らひ出して(重)夫からろくゝ仕事が出來す人に咄しも出來ぬゆへ(彌)コレと二人りで靈場や神の社へ參詣して(重)罪亡しを仕て居升ダあれダ全く重藏寺の(彌)又七郎殿に違ひムりませぬト兩人思入にて言ふ此以前能き程に彌平次出て門口に聞て居て悔り思入て小隠れする市之丞思入有て(市)シテゝ夫れは何故に又七郎殿を切害せしか二人

りは舞を知らつしやらぬか(彌)様子を聞ば殿様の碁の御相手に又七郎殿は御殿へ上つて居た所(重)何んでも盲らに殿様が負た意恨でばつさりと遣つたに違ひは仏りませぬ(市)扨は夫故けふゞ日迄行衛知れずとならにしか我も昨年涙嶋の大守がお菊を妾に仕様と無理な御所望被成ずば師匠も殺さず両人も今の辛苦は致すまいに是と言ふも御近習に能くらぬ奴等が附添ふ故ハテにが〳〵しき事ではあるト思入此時七ツの鐘鳴る故(彌)兎コウ言ふ間に最ふ七ツドレ御暇を致しませう(市)何かの事に取り紛れ御愛相迄もござらねば今迄茶なを入れさそふからゆつくり噺してござらつしやい(彌)イエ是で御暇致しませう(市)折りがなあらば又その内ゆつくり咄しに來て下さい(彌)是で御宅を覺へましたから其内お尋給申升る(重)此大原に珍らしいあの美しいおかみさんだから態〳〵來ても損はない(彌)エヽ又差出るかだまつて居ろ(市)併し御茶さへろく〳〵に(彌)又其内にゆつくりと出升(重)御新造さまへどうか宜しく(彌)ドレ御暇申ませうト在郷唄に成り兩人連立て向ふへ這入る市之丞遽りを見て(市)始て聞し浪嶋の御家まかゝわる一大事佞臣多くはびこりて智勇勝れし賢君も是が爲わまどわされ驚きへッたる御行跡是ぞ譬に言ふ如く明瞭たる日月も朦雲是を掩ふの道理ァ心成らざる事共じやなァト在郷唄に成り向ふより竹齋十徳形り茶道にて先に立ち貳幕目の半之丞羽織袴大小の形りゐて出て來り(竹齋)アレ〳〵向ふに見得升るゞ市之丞殿の茅屋に仏る(半之丞)ハテ扨夫は氣の毒千万片時も早く案内仕やれ(竹)委細承知致した○

ト右唄にて舞臺へ來り(竹)お頼み申す〳〵(市)ハイ〳〵どれから御出でござるト門口を明る(竹)市之丞殿御在宅でごつたか(市)是は先日途中にて御出合申た竹齋どの能くぞ御尋ね下された(半)市之丞殿其後は打絶一別以來御壯健にて祝着至極ト市之丞へ半之丞こなし有て(市)ヤ貴殿ハ小守半之丞殿見苦しけれど先〳〵是へ(半)然ちば御免下されいト内へ這入り上手へ住ふ市之丞こなし有て(市)斯く見苦しき茅屋へ如何致して貴殿には遙〳〵御尋ね下さりました(竹)市之丞殿御悦び被成れい先日愚老其許に途中に於て御出合申し此大原の在方お浮世を忍び居らるゝを小守氏御兄弟へ早速申し上し所其有所を内實は御尋ね申て居られし由にて今日花見の御成先より御舍弟一人御暇を願ひ則愚老を案内者にお尋ね申お參てござる(市)扨ハ夫故小守氏には能くぞお尋ね下された(半)御成り先から態〳〵とお尋申は外ならず御身の御流浪おいたわしく我が兄小守半左衛門殿へ御異見申上しに殿おは元より御身といふ夫トある身のお菊殿をも無理お御所望遊ばす抔ど無道なる義は被成れぬ御所存れ傍に附添ふ傳六等ゞ途中に於て斗らひし手違よりして師と頼む東氏まで落命させ殘念なりとの仰せにて責て養子の其許の行衛を尋ねて呼び返し元の如くに御城下にて家中へ御指南下さる樣との内命受ておつたる我〳〵然るに斗らず竹齋より斯る邊土にお忍ぶる事聞て飛立思をなし貴殿へ此由申入れ流浪を御救ひ申さんと夫故手前が罷り越した御都合次第で早速にも歸參の支度を致されよ(市)スリヤ夫故に小守氏には態〳〵御入來下されしか同門

弟のよしみを思ひ師弟の御縁を思召れ御舍弟様まで御心痛口にて謝する詞もなく各々方の思召有難ふ存升る（竹）シテ只今の御返事はよもや否哉はござり升まい（市）此義に付て拙者めが一ッのお願ひがムり升る（半）何一ッの願ひとはト合方さつぱりと成り是にて寢かしてある抱子を抱き來り（市）別義でムらぬ此小兒は昨年此地へ參つて間もなく出產致せし是成る男子我〳〵夫婦は仮染にも不義を働らき師匠までであへなき最期を致させたる不孝不義の罪有る者再び嵯峨へ立歸り何おめ〳〵と御家中へ御指南抔は出來ませぬが彼めが成長致しなば伊村東の兩家の跡目再興させたく存じれば升れば希わくば其所許の御執成にて御家臣の末座に成りと加はり升樣偏ゐ御願ひ申升る（半）スリャそこ許には嵯峨山へ歸參の望はムり升せぬか（市）一且不義を働きし罪有る故に拙者めい矢張り一生在方にて浮世を忍ぶ浮浪人（竹）御尤成る申分余人と違ひ其所許は欲ゐ放れし御心底（半）とはいへおしき御腕前（市）イヤ拙者の武藝は〇ト抱子泣くをいぶり付を道具替りの知らせ（市）すたつでムるト市之丞子をいぶり付る竹齋半之丞は感心のこなし在郷唄にて此道具廻る

本舞臺四間通し中足の貳重藪菅家根藪庇いつも所竹簀戸の枝折口此外正面藪疊貳重正面上の方一間押入戸棚納戸口障子建切り下の方一面鼠の破れ壁都て奥の心の道具宜しく爰に以前のおふじ猫を抱きし儘打伏居る傍にお菊行燈を灯し居る此摸樣時の鐘にて此道具留るト床の淨瑠璃も成り「告渡る花の時節も片里はきのふに消へし白雪の解し而已にて物淋し妻のお菊が介抱に心落付後室が邊見廻し不審顔トおふじ邊りを見廻し（ふじ）モシ御内義爰は何所でムり升るぞ（菊）扨はおなたは此所へお出有りしを只今まで御存じムり升せぬか（ふじ）サァきのふの夕方木屋町の旅宿を出て其所此所と悴の行衛を尋ねました覺はあれど其跡はいづれへ宿を求めしやら一向覺へはムらぬわいのふ「夢に夢見し心地ゐて我身を恥る斗り成りトおふじ宜しくこなし有て（菊）成程さつきの御樣子ではそりや御存はムるまいあなたは大事の御跡目の御子息さまを失のふて御氣の違ひし御樣子は彌平次殿から承り御案事申て居りました（ふじ）エヽ扨は私を重藏寺の後家のおふじといふ事まで（菊）殘らず存て居り升る私事は御城下の東嘉門と申升る劍道指南を致しました者の娘でムり升る（ふじ）ヲヽそういへば覺へある東の御息女おきくさま（菊）替つた所の此お出合（ふじ）テモ面目ないこと事じやなァ「夫と知れては猶更に消も入り度思ひなり傍にお菊はいたわりて（菊）私事もあなた樣と同じ思ひよ故郷を放れ此大原の在方に浮世を忍び居ましたゆへ最前彌平次殿が尋ね來て御子息樣の事よりしてあなたが長の御心勞夫がこうじて逆上被成昨夜旅宿を驅出しお行衛知れねば此邊を尋ねし上よて夕刻は又立寄ると歸りし跡へおまへさまが思ひ掛なく御出被成何は兎もあれ御病氣の御樣子故に落着まで奥へお置申せと夫との詞に取敢ずお寢かし申して置ましたが今は正氣の御樣子に少しは安堵致しました（ふじ）夫で分りそこ此身のしだら能くぞ世に無き私しを斯迄おかばい下さりましたヱヽ有難ふ存升る〇「かたへを見

ればしほ〳〵としほるゝ猫も身のざんげトおふじ猫へこなし有つて(ふじ)モシお菊さま御迷惑でもムりませふが我〳〵達が不幸嘯しれ聞被成れて下さりませトお床のメリヤスに成り(ふじ)まだあの頃おおまへさまも嵯峨の城下へお出ゆへ定めて御存ムりませふが四年以前に夫トに別れ家の世の繼又七郎を杖柱とせし其甲斐もなく去年の秋碁のお相手にお表へ召れし夜より行衛知れずそうした事も有るまいがモシ御殿にて又七郎鹿相がわつて我君の御手討にでも成りむせぬかと其役向へ伺へど昨夜お上のお引の節退出して盲人故重藏寺の門前まで送りし者も是〳〵にて御殿で隱す何ぞとは以ての外の言ひ掛りと却つて殿のお怒り強く跡目なければ重藏寺の家改易を仰付られ力なく〳〵城内を立退きまして二年越しさまよひ歩行く不甲斐なさ日頃信ずる神〳〵も少しは不便と思召さば悴の有り所を夢にでもお知らせ下さる筈成るに是を思へば世の中に神も佛も無ひものかと根もかも拔果て氣迄違ひし身の薄命お察し被成て下さりませ「身の薄命も女氣に果は愚に成るため泪聞も哀れを添にける折り柄一ト間に幼子の泣をお菊は立しほにト此文句能程お奥にて赤子笛に成るお菊こなしあつて(菊)テモ折惡イあの泣聲只今寢かして參り升ればまア御ゆるりと被成ませ(ふじ)サア〳〵どうぞお子さまを寢かしてあげて下さりませ(菊)ドレお湯漬なと上ませふか「詞殘して女房はとつかは一ト間へ立て行く跡には猶も愚智多く手飼の猫に差し向ひトお菊は障子の内へ這入るおふじ猫へこなし有て(ふじ)コリヤ玉よりちもいつぞや菩提所の門前にて助りし命の恩を思ふなら少しは悴又七郎の有所位おは尋ね來て口はきけぬど此のわしに知らせて呉れても能い筈じや只悲しげに泣ヨりわしを慕つて居る而已がそちの役でもあるまいそや「すげなきものとかき口説く樣子とつくり庭口より家來の彌平次が伺ひ寄つて聲ひそめト此内おふじ猫をとらへてよろしくいふ此時下手藪蔭より以前の彌平次出て庭口を明けこちらへ來て(彌)御母公さま夫にれ出でムりましたり(ふじ)ヤアそなたは彌平次(彌)アモシ○「邊り伺ひ〳〵てト思入あつて彌平次おふじの傍へ來り(彌)お悦び被成ませ若且那の御有所と敵が知れてムり升る(ふじ)何敵が知れたとは(彌)拙者もあなたも十ウが九ツ夫と察せし鑑定通り又七郎さまがムつては捨知行でも五百石代〳〵恵むが惜しくなり御殿へ呼び寄せ人知れず切害仕たと言ふ事を唯今此の家の門ド口で斗らず聞さ左官の嘯し幾等お尋ね被成ても知れぬも道理一家中に口留を仕てあるとの事無念な事ではムせぬか聞より母も髮逆立又も狂氣のありさまにてトおふじ思入わつて(ふじ)扨はそれゆへ我悴をむざ〳〵切害致したなチエ、ひきやう赤練な涙島どのそれでなふても我が家は世が世であらば涙嶋の主家に等しき名家の末恨はこつちに有るものを僅な知行を惜しむ爲たつた壹人の悴迄殺して家を改易とは余りといへば無道な仕方叶わぬ迄も女の念力恨を晴らさで置べきか「遙かに遠き嵯峨山の方を白眼んで憤怒の体彌平次傍より押なだめ(彌)サ、其御立腹はお道理ながら唯何事も前キ生の約束事と思召及はぬ事を其樣に恨んで犬死被成ますな

（ふじ）イヤ恨まいで何んとせう曾へ此世で運拙なく目差敵の其爲に切害されなば魔界へ落崇りをなして取殺さんそちも忠義を思ふなら助太刀成して力を添へよ（彌）サアその義は（ふじ）ヤアその方い大身の權威に心れくれたか（彌）アイヤ全くもつて（ふじ）そんなら疾々助太刀しや（彌）サアそれい（ふじ）サア（彌）サア（兩人）サア〳〵〳〵（ふじ）エヽ世に無き主と見限つてそちい忠義を思わぬか○「言詰られて彌平次が何思ひけん我れとわが脇腹ぐさと貫けばト彌平次刀を腹へ突立るおふじ恟りなし（ふじ）ヤヽ切腹して此わしへ忠義を立ぬ心成るゝ「言ふに手負は頭をうち振り（彌）アイヤ全く左に非らず切腹致すと若且那に出仕を進めし申譯（ふじ）何んといやるト竹笛入りの合方に成り（彌）あなさは御存なき事なゞら大旦那さは兼てより浪嶋家を覆さんと深き望の御企夫故にこそ御養子の藤三郎樣が舅を殺し御切腹を被成しも巡り〳〵て浪島の殿の御前へ又七郎さま召れて行たも碁のお相手あなさゞれ止め被成しをお進め申てあげたるは浪島公へ近付かせ親御の恨を請繼でいつかは御本意遂させんと此彌平次ゞ下心それと言わねど御最期を遂させ玉ふも自業自得是等の因果を思召れ及ばぬお方を恨らむのと思ひ留つて下さりませ命を捨て彌平次が屹度御異見申升る「因果を令す金言も女の念の止ミ難く（ふじ）イヤそう聞く上は猶の事夫トの無念を受繼で怨を晴らさで置べきかそちが命を拾さり共此身の望は手飼の猫畜生なれども是迄の恩を思わば浪島へ悴の怨を返すべし運拙くして此わしが一命捨る其時はそちの形を借り升ぞや「猫をとらへて人間に物言ふ如く一念のこりかたまりし惡鬼の姿トよろしく爰へ奥より以前竹齊の出てヤア聞た〳〵我君さまを恨む奴愚老が手取に致してくれん「むんずと組を身をかわし椽より下へずでんどう冥土の連と彌平次が膝へ引敷我が咽を貫く最期と諸共にエイと掛さる一聲にあへなき横死見るよりも猫と何國くか逃失ぬりト此内竹齊おふじへ組付を一寸立廻りおふじ竹齊を貳重より下へ投る是にて竹齊彌平次へ懸るを彌平次引返して膝に引据咽を突て落入る此とたん奥にてエイと聲して手裏劍おふじの咽へ立ッアット若しみ落入る是にて猫は逸散に上手へ這入る「仕すましたりと一間より立出る伊村市之丞跡に續て勝平ゞ小守をいざあい立顯れと奥より市之丞先に半之丞勝平出て來り（市）打捨置ば浪嶋のお家にかゝわる大事故是非なく仕止めて斯くのしぎ左は去りながら重藏寺がむほんの根ざしを企てしを承はるは今が始て（半）それに付ても氣の毒なは舅殺の惡名を受て大事を押隱し切腹なせし藤三郎思へば不便お義でムる（勝）何は搭別浪嶋公を覘ふ惡人一時に亡び是にて御家は萬代不易（市）思へば先刻彌太郎に又七殿ゞ最期の樣子聞ずば人にも聞れまじを（半）同じ仕官の拙者ですら今日迄も知らざる密事（勝）壁に耳ある世の習ひ少しも油斷は相成ませぬ「奇異の思ひに歎息の折りにあなたの一ト間の内わつと魂消る赤子の聲是はと驚く間もなく幼子抱へ女房ゞ泣の泪に轉び出ト赤子笛聞へてばた〳〵になりお菊抱子を抱き出て來り（菊）モシこちの人コリヤまアどうせう〳〵ぞいなア（市）ヤヽ血汐に染し坊主

の有樣(半)シテ〳〵如何(勝)被成升たな「尋ねにお菊は泪聲(菊)サァ添乳の儘にッィすや〳〵眠る此子の咽笛を猫が噛切りあわ能くば私の咽へも噛付ふと覗ふ所へ泣聲に眠りも覺めて氣は轉倒早く猫めを捕り押へ我子の敵と思へども素早ひ飛行に取り逃し私しや悔しい〳〵わいなァ「あへなき骸を抱ゞてわつと斗りに泣沈めば見る人〳〵もあきれ果暫く詞しあかりしが(市)扨は是成る重藏寺の後家ゞ抱きしあの猫めが我が飼主を仕止められ畜生心の無念より寢て居る忰を噛み殺し怨を返せしもの成るか(半)唯殘念ない伊村東の兩家の跡目立る見込の幼子ゞ(勝)まぐれ猫めの其爲に噛殺されて果ない御最期思へば〳〵忌〳〵しい(菊)斯うと知るなら氣違の介抱杯はせまいもの世に落果し涙々の便りない身は相互ひと「情は人の爲ならず我身の爲と介抱も夫が却ッて恩を仇(菊)早ふ此子を成人させ夫トの家と我が家の適跡目を大切に「產落せしよりけふが日迄夜の目も寢ずに守り育て(菊)一日增に智惠も附き晝も添乳の其時に乳房くわへてにこ〳〵と笑ふと顏が此樣に○「まだ死顏にあり〳〵とうなづく樣に思わるゝと遺親子の恩愛に可愛のものやと抱き上わつと斗りゝ泣沈む泪の雨や高根川落て流るゝ汐境へ水嵩增る如く成りトよろしくあつて「斯くても果じと市之丞泣居る妻に力を附ケ(市)歎くは理り去りあゞら子を殺さるゝも涙島の御家の爲に重藏寺の後家を手に掛殺したれば手飼の猫に我が悴喰殺れしは自業自得とあきらめるより外はない(半)伊村東の御兩家の跡目を繼べき御子息を殺して忠義を立られし其功ゝ愛で我が兄より大守へ歸參の願ひを上必らず惡しくは斗らはねば(勝)此趣を村長へ訴へ出しその上わて跡ねんごろに吊ふがお坊さま〳〵の能追善(菊)といいへ我子の仇敵再び猫を見付なば(市)我も無念は百倍なるは「泣かぬ夫トは泣よりも猶彌增る胸の內我れに戻りし竹齊ゞト竹齊心付起上り(竹)ヤァレ〳〵家根に大猫が(皆々)何大猫がト急度成るを(市)ソレト市之丞刀を取りに行く(半)通力自在のあの有樣(市)消失せたるかト刀を突を道具替りの知せ(市)殘念やナァト軒口へ煙りを出し誂らへの大猫頭を出す皆〳〵走を見上る是にて消る市之丞は殘念だといふこなし皆〳〵引張りよろしく道具廻る

本舞臺一面の平舞臺後ろ夜の遠見舞臺の上下モに山吹の盛り所々に櫻の立木裾通り一面に四ッ目垣是へつゝじ山吹の下草をあしらひ朝顏附の雪洞を大分に取附日覆より櫻の釣り枝能所に毛氈を掛たる床几二三脚並べ都而嵯峨山夜櫻遊覽の摸樣宜しく爰に純才茶道の拵へにて目隱しをして中貳階のこし元大勢鬼遊びを仕て居る此見得しやでんにて道具留る(腰元○)モシ純才さんけふは御殿と事替り殿樣の御許しで奥お表の櫻狩(△)此お儘主を樂しみに待に待つた　不禮講魂遊びやら隱れんぼ(□)御殿と違つて花の中斯ういふ時にあきる程(☒)遊びあきを仕樣と思へばおまゝへが鬼に成つてから(●)さつぱりどなたもつかまらずおまへの鬼なら岡なしに(⊕)洗濯事も出來ぬもへ今度は早くつかまへて見やしやんせ(純才)ヨシ〳〵今度はつかまへて鬼を讓つて遣らねばならぬ(大勢)サァ取つて見さいな○

ト追廻す皆々逃る(大勢)イエ〳〵こちらでムんすわいなァ(純)いま〳〵しい今度こそは逃さぬ様に捕らへて遣らねば成らぬ(大勢)イエ〳〵こちらでムんすわいなァト純才皆々を追廻す事宜しく此内向ふより半左衛門上下大小草履にて出て純才腰元と心得半左衛門を捕らへて(純)サア〳〵捕らへましさ〳〵(大勢)ア、コレ夫れは違ふたわいなァ(純)何違ふものか○ト目隠しを取り半左衛門を見て恟りなし(純)ヤあなたは御家老小守様誠に恐れ入ましたト平伏する(半左衛門)御前様には何れに入らせらるゝ鎌倉表よりの御用に付御目見得が致し度と上みへ取次致して下さい(腰元皆)畏りましたトこし元皆な〳〵上手へは入半左衛門邊りへ思入れあつて(純)ドレ足でも洗つて参らふト下手へ這入る(半)今泰平の御代とはいへど治に居て乱を忘れざる諺に言ふ油断大敵御領分とは申ながら夜に入る迄御遊興是れと申も御近臣傳六郎が能からぬ執持ハテ扨て困つた者でハあるとト此の時上手にて(大守)半左衛門が参りしと夫まへ参つて逢ふて得させんトしやでんに成り上手より浪嶋の大守羽織着流し一本ざし庭下駄にて出る是へ關傳六郎上下モ大小にて大守の刀を持附添い其外近習四人袴形りにて附添出る半左衛門下手ゐ下ゐ居て(半)ハヽハッ麗しき御尊顔を拜奉恐悦至極に存升る(大)半左衛門聞てくりやれ今日の櫻狩は此頃になき快晴にて花曇りの愁もなく予も佳興に入りし故暮るゝを惜しみ歸路の義も延引の義を申出し又夜櫻の見直しに今宵は夜と共當所よて酒宴を開き遊ぶ存念そちも私用のさゝわりなくば今宵は相手を致して能からふ(半)ハッ有難き御諚意ながら言わば一國一城の大事の御身にムり升れば余り夜更に至るまで當所の御酒宴よろしからず相成べくは晝の内御歸りあつて然るべしと憚ながら存られ升る(傳六郎)シテそこ許には鎌倉の御用の筋にて此所へ御推參を召れしよし御用の次第を我君へ(諸士○)具に言上致されよ(半)その御用ころ外おらず鎌倉表の御屋舗に御越しありし御愛妾のおさよの方には御姙娠と今日吉事の御注進が御國表へ参りし故御遊興の御成先へお知らせ申に参つてムり升る(大)何スリヤ鎌倉へ殘し置しさよが姙娠致せしとな(傳)夫ぞ先頃我君様鎌倉表を御發駕の折りおさよの方には御病氣ありしが扨ハお胤を身に舍し御懐姙にてありしよな(半)其義に付て半左衛門得と愚意をめぐらし升るに御姙娠とは申ながら御妾腹の義にムり升れば鎌倉表に置まして御出産を斗らいなば双方全ッたき御沙汰かと憚なから存じ升るが一應御賢意伺ひ升る(大)ソリヤ早國には奥はじめ照といへる妾もあれば夫等へ遠慮致せとあるそちの異見で有らふなれど妾腹成りとて我胤を舍せし上は麁畧に成らず古例に習ひ出産の手當をせねむ相成らず早々國へ呼迎へ安〳〵出産致させん(傳)コリヤ我君の諚意の如く御本腹でも御妾腹でも御世繼無き内に御胤を舍すは大手柄早々お國へ御迎へあるが宜敷様に存られ升(半)スリヤ我が君には御手元へ御呼寄遊ばし升るか是と申も御傍より(傳)ヤア(半)アイヤ御傍小姓の腰元より登庸なせしおさよどの君の御胤を舍せしは其身の面目御家の繁榮恐悦申上升る(大)ヲヽ予も何とやら悦ばしい祝ひに

又もや酒宴を開かんうちも今宵は過すが能いぞ(半)君の御流頂戴致すと此上もなき事なから斯る手薄き山中に深更迄の御遊興は願わしからぬ事にこそ何卒御歸館あらせられ御殿ゐ於て御宴酒の程偏に願上奉り升る(傳)小守氏よは我君の御催しを御案事あされ山中よて深夜に及び御酒宴は危き事と仰せあれど他領と違ひ御領分の此嵯峨山は御庭も同前譬へ夜と共此所で御遊興遊ばすとも何の氣遣ふ事あらふや(○)又御傍ゐは身不肖あゞら(□)我々共が伺候致せば(△)凶變の有らふ筈はなし(☒)夫を氣遣ひなさるゝい(傳)去りとい心の(皆々)狹い事だ(半)君子は必ず危きに近寄らざるの本文を各々方には御存なきや(皆々)テワムれ共(半)エヽ無益の舌頭扣へてござれト屹度いふ(大)イヤ予を大切と半左衛門が諫の詞も一理有あれど此嵯峨山ゐ夜櫻を見捨て歸るも本意でない席を改め今一ッ献聞きし上にて歸館致さん(半)左樣ムらば我が君樣(傳)イザ先御越し(皆々)遊バされませう(大)ハテ夜櫻は格別じやなァト唄に成り大守皆々附添上手へ這入る半左衛門殘り思入あつて合方よ成り(半)殿のお胤を身に舍せしおさよの方を鎌倉よりお國へお招ぎ有る時は必らず彼れは威勢強く未だ御世取りましまさねば將軍家より玉わりし御臺樣ゐは權威を奮われ自づと妹春の御間柄も宜しからずと存せし故夫と言はずに御異見と申上れどお傍には能からぬ佞臣はびこる故心盡せしお諫も貫ざるは殘念至極コリヤ城内へ立歸り重役衆と衆議の上再び諫めを入れねば成らぬドリヤ更ね内歸城を致さんト花道の方へ行かける此時上手より奥方九重

襠形り愛妾お照同じく襠形りにて附添是へ以前のてし元附添い出て來り(九重)アイヤ半左衛門暫く是へ歸つてさもト半左衛門見歸り(半)コハ御臺樣始めとしておてるどのにも御一所よ○ト立戻り下に居て(半)何ぞ御用にムり升か(九)委細の樣子は幕影にて逐一承知致したわらわやてるの身を案事て君へ御異見嬉しいわいのふ(半)スリヤ何も彼も御樣子を(九)小影で聞て居たわいのふト九重思内あつて床几へ掛る腰元皆々床几へ掛る琴唄の合方に成り(九)そちが案事てくりやる通り自ら始め此てるも心足らわぬその上に拙き運の産れゆへ君のお情蒙れど今にお胤を身に舍さず鎌倉表のさよとやらに先を越されし羨しさ併し家の世繼をば儲けくれしは此上もなき彼れが手柄わらはの爲にも恩人故大事にこそすれ何んとして恨たみてそち達に心配抔はせぬ故どうぞ其方斗らふてさよを此地へ迎へてたもいのふ(半)スリヤ奥方はじめおてる殿ゐも御野心なく(おてる)御臺樣すらあの樣に仰られてでムり升れば不束者の私に何んの野心がムりませう賤しい身にて殿さまのお寢間のはしを穢し升るは此上もなき身の冥加とお傍に仕へており升れば譬へ如何なる御方樣がお左寄よ成りませう共ねたみそねみを致し升る左樣な心いムりませぬ今も今迎奥樣がそちはどうじやと御相談をお掛被成て下さる程勿体ないやら嬉しいやら冥加の程が恐ろしく心の内で有難くお禮を申ており升る(半)ハッ實に名將のその下に弱卒なしと世の諺上を見習ふ下〳〵まで斯く穩なるお心だて人は斯くこそ有り度きもの君にも嘸かしお悦びでムりませう(九)只此

上は其方が取斗らふて鎌倉よりさよを迎へてたもるのがわらはへ對して一ッの忠義(てる)及ばずなから私がお執持を致し升ればお心置なふ小守様お迎へ申て下さりませ(半)其頼みを聞上は何れ近日人を撰み鎌倉表へ出立させ呼迎るでムりませう(九)とはいへそちが我君へ今も御異見申せし如く重き御身に有るがら此嵯峨山にて深更迄御酒に前後を取乱し御由斷有るがわらはの心配(てる)何卒あたの御諫めにて我君さまへ御歸館をお進め被成て下さりませ(半)其義は再應拙者めが君へ御異見申上れどお傍に佞臣隨ふ故か更にお用ひムりませず歎息の外ムりませぬ(九)コリャお諫めをも申上ず(てる)能き御分別は(皆々)ムりませぬゥ(半)サ外に仕様はムりませねど狼藉抔のムりませぬ様當所の山影樹木の陰〳〵忍び廻りを配り置き君の警固を致しなバ夜中ながらも非常要害(てる)其の御手段を承り私共迄一ッの安堵(腰元〇)何卒御顧ひ(皆々)申上升(半)左様なれば奥方さま(九)影の忠義を頼み升るぞ(てる)イザ先づお越しあられませうト是れより誘らへ下座の琴唄に成り「君は船臣は水なる言の葉や君も豊に我も又豊に住める君が世やト此のうち九重思人おてるもこなし有て皆々付て上手へ這入る守左衛門見送りこなしあつて橋掛りへ這入る「すめる民とて久方の光りのどけき春の日にしづ心なく散る櫻ト此内上手より以前大守酒に酔たるこなしにて出て來り(大)イヤ殊の外酩酊致た〇ゲヽ誰やらの句で有りしか大名に産れぬ徳か門ト涼み大名杯と申ものは一寸庭先へ參るにも腰元共や近習共が跡よりぞろ〳〵附て參り扨きうくつる者ではある今宵は付の邪魔もなく獨歩行きの花の中書と違ふて嵯峨山の此夜櫻の眺望は又格別なものではあるわへ「散ればおそいとゝ櫻は目出たけれ散らぬは待ぬ夕霞ト花を見る事有て(大)イヤ大酔せし面体へ櫻がちら〳〵散ちりかゝるは空に飛かふ雪同様ハテ酔醒には奇妙〳〵「暮て月さへ朧氣に誰れか忍ばん山吹の茂みにひそむ技蛙ト風の音どろ〳〵にて下手山吹の茂をより縫くるみ誂の猫出て大守を覗ふ是を一時にぱんぱりの灯り仕かけにて消る大守ぞつとするこなしにて(大)ヤヽ俄に灯りの消たるは「飛や柳も寫池水ト獨吟の上にて件の猫前へ出て大守へ飛掛る大守身を替はをて件の猫を急度捕へて(大)ヤア誰そあるか出合〳〵ト呼ふばた〳〵お成り橋掛りより以前の半左衛門出て(半)小守半左衛門罷出まして御ざり升(大)ヲヽ半左衛門是を仕止ひ(半)ハット刀を抜件の猫へ切て掛る猫は一刀に頭上を切られいつさんに向ふへ逃て這入る是にてぱんぱりへ灯り元の如くつく大守思入あつて(大)ヲヽ半左衛門成るか(半)君には御怪我もムりませぬか(大)ヲヽ滴足なるぞト上手ばた〳〵に成り以前の傳六郎先に近習大勢手ぱんぱりを持出て來り(傳)こい何事が(皆)々出來せしぞ(半)拙者の御異見〇ト刀を拭ひ鞘へ納るを木の頭(半)御聞下さりませうト下に居てじつと思入大守はあやまつたと思入傳六郎みな〳〵は間の惡るきこなしよろしく琴唄の合方にてひやうし幕

四幕目　小守邸掃除の場

一伊村市之丞　　一小守半之丞
後に伊東左右太　　一中間　丹平
一左官彌太郎　　一同　久内
一同　重吉　　一同　長助
一小守の母おさが　　一同　半藏
實は猫の怪　　一小守半左衛門

本舞臺四間高足の貳重本庇本椽附眞中書院楷子上手壹間塗骨障子家体上手九尺の床の間其下地袋違棚又その下白地へ墨繪の襖いつもの所枝折戸上下柴垣後ろ板塀能所に櫻の立木都て嵯峨山城内小守邸宅庭先の体爰ゐ本疊抔を取散らし下女お榮單物の上ッ張り襷掛ゐて手拭を冠りさいはいを持立掛り左右に中間四人煤掃の拵にて取卷き居る此見得目出たく〳〵の唄にて幕明く

（おゑい）おまへ方も大がいなおすゝ取りとはいふものゝ時候違ひのお掃除に胴上げをされてたまるものかいなァ（中間〇）ハテいつであらふとすゝさきの御目出たの御祝義に胴上を仕て祝ふのゞ此方の内の御嘉例だ（△）夫でなくても御家中で評判のお榮どん折がなあらバ其腰を抱て見たいと思つてゞ（□）武家の法度で不斷では女の手さへ握れぬこちとら（☒）猥らな事は仕ねへから四人の者に其腰を思ふ存分抱りせて呉んねへ夫で了簡（四人）仕て遣るのだ（榮）エヽモウそんな笑談をするとお奥へ告て部屋頭へきつとお崇りゞ行き升ぞへ（〇）所を崇りの行ねへのが（△）年に一度か二度のすゝはき（□）嘉例の事故いわばお許るし（☒）搆ふ事はねへやつ付ろ（榮）コリヤ最ふ爰ゐは居られぬわいるァ（〇）どつこい逃して（四人）成るものかゞ右の唄にて中間四人お榮を胴上げゐして居る所へ奥より半之丞煤掃の拵にて出て來り（半之丞）コリヤ〳〵騒がしい靜に致セト是にて四人恟りして（〇）ヤァ若且那ゞ（四人）逃ろ〳〵トおゑいを置て橋掛りへ逃て這入るお榮骸の芥を拂ひながら（榮）若且那樣お聞下さへましお屋ひの中間衆がト言掛る（半之）イヤ委細は奥にて聞ておつたそちが改め言ふに及ばぬ仔細あつて今日掃除はやめに致す間奥へ參つて母上の御介抱でも仕てくりやれ（榮）まだ刻限もお早のに何故おやめに成り升るか（半之）ハテ仔細は跡にて分る事しやそちは奥へ行つて居やれ（榮）畏りましたト奥へ這入る上手の障子家体の内より前幕の彌太郎重吉矢張り煤掃手傳の拵にて來り（彌太郎）モシ若且那樣承ればお掃除は是でお止めに成升との事（重吉）是には何かお障りの事でも出來致ましたかト合方に成り（半之）左れバ二人も聞てくりやれ此程よりして家中の風説誰いふとなく小守が家にハ猫の妖怪住居いると能からぬ噂を致す故我兄上にも不審に思われ時候違ひの花の頃大掃除を被成し所御病人の母上が以ての外なる御立腹にて誰に斷り時ならぬ掃除を致す心得成るか親の病氣に逆らふとは不孝の至り兄と上を枕元へ呼付られ唯今嚴しくお談示なかば掃除は是にてやめる積りじや

(彌)實は世間の噂を聞私共もいま〳〵しく若し又こちらのお宅樣に猫でも住んでおりましたから退治て遣らふと差ッ子迄着込んで掃除に參りました(重)是と申も其以前御作事方を被成た此方樣故此兄貴が御恩が有るから一所に行き手傳をして上るが能いと頼まれました助鐵炮(彌)夫では成る丈音のせぬやう(重)元の通りに片付ませふ(半之)先兄上がお出迄いつぷく呑んで待て下さい(彌)ドレ夫では一ト休(兩人)致しませうト兩人煙草を呑居る稽古唄に成り向ふよりお勝おせん左官の女房の拵へにて出て來り花道よて(かつ)モシおせんさん十の物なら九分九厘小守さまにお掃除の手傳ひを仕ては居まいそへ(おせん)姉さんのお言ひの通り誰が櫻の咲く時分に掃除をするものがムんせうト舞臺へ來り枝折戸の外より覗ひて(せん)モシ〳〵姉さん居るわいなァ(かつ)夫じやァやつぱり本統であつたか(せん)極りが惡ひから歸らふじやないか(かつ)折角是迄來たのだからてまかして這入り込ふ(せん)何と言つて這入りませう(かつ)まァ私に任せ被成んせトうろ〳〵仕て居る(半之)誰か庭口へ參つた樣じャ(彌)何だか女聲ゞ仕升(重)大方何所ぞのお三どんだらふ○枝折の所へ來て(重)ヤおめへは姉御に嬶アじやアねへか(かつ)アイお掃除のお手傳ひに貳人り連立て出掛て來ました(彌)何だ嬶アゞ手傳ひに來た頼みも仕ねへに余慶な事だ(重)手傳に來ても最ふいけねへ掃除は最ふお仕舞だ(かつ)夫でも大分方〳〵が取散らかつて居る御樣子(せん)雜巾掛でも仕てあげやう(彌)イヤおめへ達が手傳つてべちやくちやしやべると騷〳〵しい內へ這入らずに歸てくれ(半之)コリャ〳〵彌太郎承れば內義達が掃除の手傳ひお來たではないか(彌)ヘイ參つた事は參りましたが(重)お目に掛る程の品でもムいません(半之)ハテ見る見ないは兎も角もこちらへ這入て茶でも呑休息致して歸るやうどうぞこちへ入れてくりやれ(彌)イエお取込のも中故お氣の毒樣でムり升(かつ)まァ兎も角もおせんさん一ぷく頂て行升ふ(せん)左やうなら御免下さいましト兩人枝折の內へ這入る(彌)イヤをしの強い奴らだなァ(かつ)是は〳〵若旦那樣每度彌太郎や重吉が(せん)御贔負樣よ成り升との事有難事で(兩人)ムり升る(半之)能くぞ掃除の手傳に態々と來て下されゝゆつくり休んで歸るが能い(かつ)御見受申せば御掃除も未だ片付ぬ御樣子故(せん)御邪魔で無くばお疊でも拭ひて歸ると致しませう(重)ハテその掃除はやめだといふに(半之)夫に付ても兄上はお談じを聞かれてござるゥト案事るにあし合方きつぱりと成り與より半左衛門着流しにて來たり(半左衛門)彌太郎も重吉もけふと終日太義で有た(彌)若旦那から承り升れば御我樣が御不機嫌にて(重)御掃除ハ御見合とやらとんだ間違ひでムりました(半之)シテ毋上の御機嫌は直られましてムり升るか(半左)昨夜御殿で我が宅に猫が住むとの噂を聞き遲く退出致してより急に掃除を思ひ立今朝よりの混雜に別間にござる毋上に御何ひ申さぬがこちの不念とひゝながら殊の外なる御立腹漸く唯今御詫を申是で掃除はやめる積りで引下つて參つたわ(かつ)左やうな事とも存ませず此おせんさんと二人して(せん)亭主の迎ひをかこつけて

御手傳ひに參りました(かつ)アヽモシト袖を引く(せん)イエ何迎ではムりませぬ(半左)夫は能くこそ來て呉れた唯今勝手へ申付け酒の支度が任てあれば一杯呑で夫婦連れ機嫌よく歸つてくりやれ(彌)イエ御馳走に預りましては(重)却つて夫れでは濟みません(半之)ハテ折角の志し遠慮をせずと呑んで行やれ(せん)夫では姉さんわたし共は一ト足先へ歸りませう(かつ)イエお酒を呑とけんのん故やつぱり一所に歸ると仕様(彌)エヽ手めへ達迄はお氣の毒だ(半左)ハテ女房達が來たこそ幸ひ一所に呑んで歸つてくりやれ(かつ)左やうなればお辞義おしに(せん)御馳走様に成りませう(重)イヤうまい所へ來ヤアがつた(彌)ドレ御馳走に成りませうかト四人連立奥へ這入る跡見送つて(半左)弟近ふ(半之)ハッ○傍へ寄る半左衛門一寸呟く(半之)スリヤ御病間の床下を(半左)悟られぬ様申付い(半之)委細承知致しましたト奥へ這入る跡に半左衛門思入あつて合方に成り(半左)先頃嵯峨山御遊覽の節殿を目がけて飛びかゝりし彼の妖怪の眼の光り闇夜よ夫れと見止めぬど正しく年經る怪猫と極めを付ておつたるに誰れ言となく我が家に怪しき猫ゞ居るとの風説又先頃より母人には御病氣付て是迄の御仁心とは打て替り難題のみを仰らるゝは是も變化の所爲なるか心成らざる事共じやおヲト矢張り稽古唄に成り向ふより伊村市之丞羽織着流し大小にて女房おきく附添跡より勝平着流し百姓の形りにて風呂敷包を脊負出て來り花道にて(市之丞)ヶ様お形りて御玄關より這入るは却つて面ぶせ向がお庭の口あればあれゝら案内を申入れやう(おきく)御家中なゞら小守様は御内福との御噂丈立派な御住居でムんすなァ(勝平)是が所謂立寄らば大樹の蔭と申まして諸候の内でも浪嶋家は大々名の御大身御家中様も又格別立派な事でムり升る(市)何は然れわれへ參つて案内を申入様(きく)夫が宜しうムり升るト三人舞臺へ來り(市)御頼み申〳〵(半左)どうれ○ト答へて奥へ向ひ(半左)コリヤ誰れゞ居らぬゝ御案内ゞ有るゞト奥にて(お榮)ハット出て來り直ゐ下へ下りてこちらへ來て(榮)何方さまでムり升るト技折を明る(市)大原在より參りましさる伊村市之丞と申もの御取次を宜しム願ひまするト半左衛門是を聞て(半左)何市之丞殿でござるとな案内に及ばぬす、是へ〳〵(榮)先〳〵御通り遊しませ(市)然らばそちも御免を蒙り(きく)左様あれば御免下さりませト市之丞おきく向へ這入り貳重下手へ住ふ勝平い件の風呂敷包を縁鼻へ置た平舞臺下手へ扣へるお榮手をつかへ(榮)何ぞ御用はムりませぬか(半左)茶煙草盆を持て參れ(榮)ハットト奥へ這入合方きつぱりと成り(市)其後い御舍弟半之丞様に伺ひ升る斗りにて御無音に而已打過しがいつに替らぬ御壯健の体を拜し升るも身の大慶恐悦至極にムり升る(半左)市之丞殿にも御替りなく拙者身に取り大慶至極シテ先達而半之丞お申送りし事ありしが御承引下されしやその節壹人りの御愛子を不慮成る義にて失われ御混雜故御返事も承らずに歸りし弟御郡合次第御遠慮おく仰せ聞られ下さるい(市)其義お付て我々夫婦御懇情成る御詞にあまへ罷り出まして厶り升る(半左)スリヤ御承引下されしか(市)有難を承知致升るト思入あ

つて(市)先頃御舍弟半之丞様御入來下されそこ許さま御懇切成る思召承つて身の面目其節申上たる如く伊村東の兩家の跡目立テべき一子を失ふ上は拙者ゞ再び世に出て兩家の跡を立ませねば此世に殘る甲斐も無く何卒致してそこ許様のお草履成りと摑みまして侍分に行々は相成升やう願度佛の忌日を濟せし上早速世帶を取り片付ケ今日よりして御家來に夫婦諸共こなたさまへ奉公住を致さんと罷り出まして斯の仕儀此末共に御取立偏に願ひ上升る(きく)私迄がこちらの様の御厄介に成りましては相濟ませぬと存じ升故若且那様へ先達而御遠慮申上まえたも御懇切成る御詞にあまへましさゝ夫婦のもの御仕ひ憎くも厶りませうゞ以前と替り田舍にて下素の業なら何んぞりと仕盡しました不作法もの御心置あふ御勝手の御用を仰ふせ付られまして御遣い被成て下さりませ(半左)イヤ其遠慮には及はぬ事余人にあらぬ東氏の御息女といゝ伊村の御子息望む所の御兩人手前が引受御夫婦共御世話致して行々は主君の臣の列お加へ御登庸をおさせ申弟が御指南受ましたる嘉門殿への師の御恩報する所存に厶り升れば御心置なく拙者方に御窮屈でも當分は身を落付て厶る様此方より御頼み申能くぞ早速御夫婦にい此家へ御便り下されしぞ(勝)イヤモウ御送り申て參りして御詞は却つて痛み入り升る(半左)實にものゝふの家にては持べきものは家來とて忠義を忘年も世帶一式賣拂ひ思ひ切つたる被成方に若し先様にて御承引を下さりませぬ其時いと心配致しておりましたがこちら様にて夫程迄に御引受下さり升れば此勝平も大安心是で在所へ歸りましても世間の者へ大びらに自慢咄ゑが出來升わへ(市)以前の好しみと勝平の一ト方成らぬ厚き世話(きく)いづれ夫婦が世に出て花咲時節が來りなば(市)きつと報ひを(兩人)仕升るぞ(勝)イエ長の年月親且那の御恩を受し此勝平わづかな御世話を夫程よ思召の御詞は却つて痛み入り升る(半左)實にものゝふの家にては持べきものは家來とて忠義を忘れぬ志し傍で聞さへ頼しく誠に感心致して升る(市)最早こゝさで御承引下さる上は用事はおい(きく)そゝさは御免を蒙りて早く在所へ歸りませうぞ(勝)仰に隨ひ私は是にてお暇致し升る(半左)時分時故夕飯を食せし上にて歸村なすか次第に依ては一泊なし明朝歸つて若しからねば先づゆる〳〵咄してくりやれ(市)イエ遠方なれども都の内三里に足らぬ在方故(きく)今より急いで立歸らば五ツ時には大原へ(勝)立歸れ升れば是おてお暇致し升る(半左)然らばそちの隨意お仕やれ(勝)左やうなれればいづれもさま(市)何卒近所の衆達へ(きく)よしなよいふて下さりませ(勝)其義は承知致しましさ(半左)隨分道を取り急ぎ(勝)ドレお暇を致しませうかト稽古唄に成り勝平件の風呂敷包を提き向ふへ這入る跡見送りて(市)譜代の家來といゝながら下賤の者に珍らしきあの勝平ゞ厚意の段〳〵(きく)實に今度の深切い一ト方あらぬ厚い世話見上さものでム厶り升る(半左)下女の業には如何せしかハテ等閑なやつではあるト此時上手障子家体の内にて母おさが病ひ鉢巻せし老母好みの拵へにて出て來り宜しく住ふ皆〳〵此体を見て(市)扨いあるさが(きく)御當家さまの(おさが)いかにも私は母で厶るが誰れに斷りコリヤ倅二人の衆を内へ置くのじや(半左)サアうの儀は

（さが）あれといゝハテ行屆かぬ事じやのふ〇ト合方きつぱり成り（さが）そりやもふ夫ト半左衛門との此世を去られし其後は亡父の名前を其儘に小守の家の相續人そちが万事を引受れば母とはいへどわしは厄介年老くちて病ひに伏し邪摩なもの故何事もわしの心に逆らふて出て行けがしにするであらふけふもけふとて此中から母が病氣で居るものを唯一言乃こたへなくほこりと一所に此家を追拂ふ氣か大掃除夫而已ならず貳人までおのが勝手に厄介を内へ引取りしさいらしい世話をするとい何事ぞ夫トが此世にぐつてすらしつそを旨と被成し故余慶な人はお置き被れず無人で事を濟せしに母に一隱相談なく夫婦のものをば引入れて世話をするのは此わしを邪魔にする氣に違いない夫程母を嫌やるなら追出されぬ内こちらから何れへ成りと出て行けば小守の母が非人となり野末に伏して居るを見て榮曜榮花をするが能いドリヤ信濃路にありと聞く姥捨山へでも行ませうト立掛るを留て（半左）アイヤ母人何故まあたを邪摩に致しませうぞ先〳〵お待下さりませ〇ト無理に下に居させ（半左）あなたに孝が致したさ三十路は越せど今もつて妻さへ向へぬ半左衛門そりや早一應御相談なく此衆達を宅へ引取り世話を致すいすいきやうもの驕奢の至りと母人の御立腹もムりませうが緣なきものを宅へ引取りあながち世話を致すに非らず是成る女中は我〳〵が軍學の師と頼みたる東先生の忘れ筐み今一人は劔術の師を頼みたる伊村の子息兩人共に師の恩ある伊村東の血統故零落をして居らるゝを引上世話を致しなば世に無き師匠へ我〳〵が能き恩報じと存じまして御病氣故に母人へ伺ひませねど我が宅へ引取りましたも遠からず君命に依り鎌倉なるおさよの方を迎ひの爲め出立致す拙者故是成る夫婦が留守をなし弟と共に母人の御介抱を致し呉れなば是に上越す安心なしと心に悦びおりましさる夫と是とはうらうゑにて其御立腹に預り升るは行屆かざる拙者の不念御差圖次第に致さ升れば何卒御心あだめられ端居の風に當りましては御身の御毒に相ならん先々奥の御病床へ御出ある樣願ひ升る（さが）イヤ氣心も知れもせぬ他人の手にて介抱を受るは却つてわしの迷惑又そなさには自慢らしく師匠の子息や娘御ゆへ恩を返すと申せども月謝を取つて劔術や武藝を弟子に教るは其身を立る暮らしの爲いわばこちらが御得意樣さのみ恩義といふでもない須彌蒼海にも增りさる親の恩義を余所になし夫程大事に思ふならそちの勝手にするが能い母の介抱氣にいらぬいづれへなりと出て行けば留だてせずと遣つて下さいト又立腹るを留めて（半左）ヤレ〳〵夫程迄に母人の御氣にさからふ次第なら二人りの衆を斷りまして此家へ置かぬ迄の事母の心にたがい升ては不孝の罪の此上なし先々御待下さりませ（さが）イヤ〳〵夫では世帶まで仕舞ふて來られし二人りへ濟まぬ夫故やつぱり此儘に（市）アイヤ其義は御母公さま御氣遣ひ及ませぬ（きく）御邪魔とあればわれ〳〵は元の在所へ立歸り（市）又の時節を待升れば（きく）其御立腹は幾重にも（市）御用捨被成て（兩人）下さりませト詫る（さが）こなさ衆迄が夫程よいわるゝものをさへぎつて此家を跡にするでもなひ邪魔な

婆とはいふものゝ二人りの倅を産だ母死ぬ迄邪魔にされませう(半左)スリヤ御勘辨下さり升とな(さが)其替りにい此母の思ひ通りにするがよい(半左)ハヽハヲ如何樣成り共御調次第(さが)アヽ又も圓痛の此惱みドレ奥へ往つて休ませうかト唄になりおさが上手障子家体の内へ這入る床の淨瑠璃に成り「入りまけるる跡に手持も内證の苦情に惱む半左衛門伊村夫婦はすの間も居つらさ譯と手をつかへ(市)イヤ半左衛門さま我々夫婦の事よりして御老母樣の御立腹誠にもつてわなさ樣へ申譯無き此始末(きく)私共は如何樣とも身の振方を附升れば御跡でどうか御老母さまへよろなに御詫を(兩人)願ひ升る(半左)イヤ其詫は此方より申さにやあらぬけふのしぎ斯る不仁な母にては無かりしものを何としてあの御心になられしか誠にもつて御二人りへ面目次第もござらぬわへ(市)イエ仰せではムり升れど世俗にいへる人增せば水增習らひに御老母のあの御故障も無理ならず(きく)私共も二年越し流浪致して所々方々さまよいまして厶り升れば身に覺へある暮し向き少も無理はムりませぬ「口氣の毒さ(半左)御案事有るお伊村氏此家で御世話が出來ませぬば線者の方へ御二人りを密に頼み置く所存母の機嫌の直るまで當分宅へ落付れよ(市)其御厚意は忝けれど獨身あれば兎も角も妻を引連れ御縁者の御世話に成るも何とやら(きく)矢張夫より住馴し大原在へ立歸り又の時節を樂しみに暮し升るでムりませう(半左)スリヤどうわつても御貳人りには

(市)御宅樣の其外は(きく)便る心はムりませぬ「最初にこうて入相のかねて言付け庭先へ骨はおしまぬ三人がさし足なして進み寄りト時の鐘ばた〳〵お成り上手より半之丞先に彌太郎重吉小振りの盥へ魚の骨を大分お入れて持出て來り(半之)ハヲ仰付られました別間の床下詮索致してござり升る(半左)シテ床下に別段お變りし事は無かりしか(彌)別段變りはムりませねど(重)ヶ樣な物がござりました「差出す盥見苦しき火屋お等しき骨の山ト件盥を椽鼻へ出す(市)ヤヽ盥に山なす魚骨(きく)どうして是が床下お「問へと答へもあらわるは夫れと言れぬ胸の内(半左)シテ母人に知れさる樣取ヲらふて參りしか(半之)唯今是へ母人がお越し被成し其跡故(彌)床下掃除を致しましたれば(重)少しも御存ムりませぬ(半)ヲヽ夫で能々然らば猶も心を付け今宵母への御膳部は思ひ付たる事こそあり(半之)シテ御膳部の(三人)拵へは(半左)弟近ふ(半之)ハッ〇ト傍へ來る半左衛門呟く(半之)スリヤあの魚類を(半左)コリヤ密に致せ(彌)又御馳走が(彌重)出來るそうだト三人は平舞臺上手へは入る「跡に夫婦は不審顔(市)何かと存ぜず床下より夕樣な骨が出しといヽ今又病氣でお出て成さるヽ御老母樣へ魚類にて今宵の御膳部を御差圖有るは(きく)病に依つては御喰事も替るものとはいヽながら御年を召した御病人へ魚類はどうやら御差合かと憚りながら存じられ升「尋ねに小守は泪を浮かめ(半左)サ其御不審は御尤無慈悲な母と御夫婦の其御恨を解かん爲御暇申一大事邊りへ心を御つけ下され(市)委細承知致し升る「奥口伺ひ兩人が元の

席へ座を定めト市之丞は上手ゐきくは下手双方伺ひ元の所へ立歸り住ひ(市)シテ一大事と(兩人)仰せあるは(半左)十に八九は我母は最早此世にはおられ升まひ(兩人)ユヽ何をおつしやるト笙の入りし床の合方に成り(半左)子として親の非を擧るは不孝の罪の此上なく心苦しき事故に此程よりの無理難題我慢を致しおれど倩々思意を巡らすは柳も綠り子の頃よりして斯く成長を致すまで凡三十有余年手前も母ゑ背かねバ母も我々子をいつくしみ一ト方成らぬ御養育ろの仁愛に打て替り此程我君當國の嵯峨山御遊覽の折柄ゐ闇夜にまぎれ妖怪の君へ仇あす樣子を見届け拙者其場へ走せさんと彼の怪物を仕止んと一刀をもつて切掛けしゞ慥に手答へ致せしかど何所へ行しゅ行衛知れず然るに其夜歸宅なし母の機嫌を伺ふ所俄に大熱發せしとて一ト間に籠り御腦み夫より致して兄弟を兎角お體み遊ばすは心得難しと思ふ折誰れ言ふとなく我が家に怪き猫が隱れ居ると家中風説紛々たり左すれば正しく怪物は年經る猫の變化にて拙者ゐ手疵を受たるを無念に思ひ家に祟り母の五躰へ乘り移り我々共を腦ます義と思ひ當りし夫故に弟に言附母人の病間の床下探ぐらせしに果して斯る魚骨の出しは慥に夫と察せし故今宵喰事の膳部には猫の好める魚類をもつて猶も樣子を探る心底伊村氏にも我〳〵へ何卒力をお添へ下され「秘する大事も信友の交り深く物語れば(市)ムヽ夫にて拙者も思ひ當るは只今是へお出あり御老母さまの御眼中自然と光りのするどきは猫の變化に疑ひあし(さく)私共の身に取りては猫は我ゞ子の仇敵及ばずながら力を添へ夫と極らは一ト太力なりと恨みを返すゞ身の本望(半左)是と申も先達て弟の嘯に聞及ぶ彼の重藏寺の後家の怨念(市)拙者も實家と師匠の家兩家を立る掛り子を失ふ上は浪人の眞柳にては居り難く伊村東の苗字を取り伊東左右太と名を改め當家へ仕へ身輕より立身登庸なす志願(さく)何卒あなたの御執成にて夫トの志願を貫く樣偏に御願ひ申升る(半左)何は格別御夫婦には疾に此家を歸られしと母を欺く一ト手段(市)今々思へば我々ハ猫を歇と覘ふ故(さく)此家に居つて何と無く邪魔に成る故嬉ひしか(半左)いかに時節と言ながら武門の家に有りながら(市)高の知れたる妖猫に斯くまでお惱み遊ばすとは(半左)思へば無念な(三人)事共じやあア「武門の耻と三人が無念を忍ぶ折柄ト奥より半之丞出て來り(半之)伊村氏には能ふこそ御入來失禮御免下さりませ(市)あなた樣にも御心配(さく)左こうと御察し申升る(半左)シテ申附し品々は最早整へ參りしゅ(半之)ハッ料理萬端取揃へ支度致してムり升る(市)左樣ムれば我々は(さく)歸りし体にて御樣子を(半左)探ぐるは庭の外圍ひ(市)然らば是より(さく)御庭の外へ(半左)必ず見張を御頼申す「今之あわせて ト皆々張り宜しく床の送り時の鐘にて此道具廻る

本舞臺眞中二間中足の二重本庇本樣附き貳重の上下モ風雅成る板塀所々に植木石燈籠井筒四ッ目垣に山吹の盛りを見せ貳重の上手壹間縣張りの中塗壁内三尺の茶壹口都而小守宅放座敷の体家体にて障子建切ありて時の鐘床の送りにて道具留る

「廊の掃へも物好に主じが心汲みて知る井筒は深き底至り詫た園ひの奥床かしゝ能程に障子を引抜く内に以前のおさか結布團の上に住居お桑肩を揉んで居る下座の合方に成り「さゞ）年老て花咲春に逢ながら病に惱み永の日を面白からず暮らす身はハテわじきおきものじやなア（桑）御氣弱い事を仰しりませ御藥でも召上り御早く御全快を被成升るやう御氣を丈夫お御持遊ばしませ（さが）イヤ〳〵藥りは呑たうない日が暮たれば行燈の支度を早く仕て下さい病人の身は暮方がいちばい淋しう覺へ升る（桑）左樣なれば又後程御肩を揉と致しましてドレ御灯りの支度を致しませう「下女はとつかは立て行く跡に老母ハ獨り言トお桑ハ茶立口へ入る（さが）恩を受たる其人の恨を返す手始に唯一噛にかみ殺せし小兒の夫婦達此家へ尋ぬ來りし故追返す樣に言ひ附ればよもやあれでハ置れも仕まい何お付ても肝心の目差歟を覗ひしも妨られて事ならず此家へ來てから最ふ半月何い仕出せし事も無くハテ退屈な事ではある○折り柄知らぬ女房が運ぶ膳部や行燈の灯りも魚の油とは探る手術と白髮の婆合点行かずと見返りてト茶立口よりおせん燈を持出て來り能所へ直す跡よりおかつ跳への膳部を持出て來りおさがの前へお直し下手に居るおさゞ思入あつて竟に見顯れぬ二人の女中何所から爰へ ござつたのじや「目お角立て咎むれどそれ者の果の臆面なく（かつ）ハイ私共はお掃除のお手傳ひに參りました彌太郎重吉と申升る左官の女房で厶り升る（せん）お臺所で先刻から御馳走樣に成りまして頂き立に致し升のも勿体ないと存升故（かつ）實て御膳のお給仕でも致した上で歸りませうと（せん）お禮旁〳〵御老母樣のお傍へ出まして厶り升る「取り廻し能き挨拶も氣輕に見へてさからわず（さゞ）ヲヽそうで厶るか夫は近頃御太義〳〵そうして今宵の膳拵へは何を悴が附けましたな（かつ）ハイ御老母さまかれ好と若且那樣のお思付にてさんまの塩燒鰯の摘入れ御飯は却つて焚立よりお冷やが能いと申事でおかこをかけて參りました（せん）又行燈のお油は水油はお眼の毒魚油よ仕ようと仰せ付魚の油をなみ〳〵と一杯ついで參りましたれば定めて今宵ハいつもより明るい事で厶りませう（かつ）サア〳〵最早御時分時（せん）お箸をお取り（兩人）下さりませ「好む品々突付られて胸の内扨は樣子をけどりしかと驚く樣子押隱し（さが）イヤ其樣な惡どいものは病ひの骸に障り故喰べたくないと言ふて下され達者なもでは有まいし秋刀魚や鰯の惡喰が何で此身に出來ませうぞ夫を知りつゝ其樣な毒魚を母に喰はせんとは返〳〵も不孝お奴とつとゝ膳部を下げさつしやれ「飛付く程に喰みたさを堪らへて態と怒りの聲此方も態とそらとぼけ（うつ）左やうな事共も存じませずお好きと聞て出かし頻に（せん）若且郡樣にかつがれて腹の立升私共（かつ）唯今是へ若且郡をおよおし申してお小言を聞かせて上げねはなりまぬ（せん）どうぞ夫迄お邪摩でも此儘お置き下さりませ（さゞ）イヤ〳〵見るも穢らわしい早く持て往んで下さい（かつ）イエ〳〵どうぞ少しの内（せん）お置き被成て下さりませ「無理に膳部をそこ〳〵に置て二人は立て行くとなたは跡を見送りて鼻を貫く賞翫の看も並ぶ夜食

膳見まじとするれど眼の先きへちらつく影や行燈の油も好む魚肉の露トおかつおせんは茶立口へ這入る是より木琴をあしひおさが件の膳の肴を喰ひ度こなし宜しくトゞ堪らへ兼て行燈の中へ首を入れる仕掛にて行燈へ猫の顔寫り油をなめる事此時上下の山吹の茂みより彌太郎重吉半身出して是を伺ふ事宜くおさが行燈より首を出して邊りを伺ふ彌太郎重吉小隱れするおさが又行燈へ首を入れ油をなめ居る能程に茶立により半左衛門出る此物音に驚ろきおさゞ悔りなし元の所へ住ひしやんと成り（さが）悴何にしに參つた（半左）母人今晩は御目出たふムり升（さが）何目出度とハト替つた合方（半左）家の嘉例の煤取りも毎年暮に致しましたゞ當年はずつと取越し花の三月末に至り大掃除を致し升れば是で當年の惡魔拂ひあなたの不時の御煩ひも多分は是にて御全快誠に以て此樣な目出度事はムりませぬ（さが）スリヤ夫故に其方にハ母お一言答へもなく時候違ひに掃除を仕て常ま好まぬ酒を呑わしの病氣も搏わずして面白ろうゐ其機嫌ハテ孝行なものじやのふ（半左）イヤコリヤ母人の御譽の御詞恐入ましてムり升る成程あなたの仰せの通り孝行者の拙者故心を盡した今宵の膳部何と御意に叶ひましたか（さが）イヤ叶ふたかと聞やるのはヶ樣なものを病人に進めてそちは此母が死ぬのを待て居やるのか（半左）何で死ぬのを待ませうや片時も早く御全快がさせたいゆへに心を碎き御好な品々取揃ゑ今宵の膳部に差上ましたイザ〳〵御上り下さりませ「醉たる体にて配膳を差出す喰の無理強いに（さが）ヤア母を侮り惡食を進めんとなす不孝者見るし中々穩らわしひ「膳部をはたと蹴返して立んとするを引止め（半左）母の五躰を仮りの宿病びと見せて今日迄喰事を斷しといふは偽り魚肉を喰ひ床下へ骨を隱せしまぐれ猫今宵の馳走ハおのれには過ぎ珍味の献立なゞら此世の食の喰ひ納め三拜なをて頂戴居らふ「敬ふ母を樣鼻より庭へ蹴落し憤怒の体妖魔は飽まで白化にト貳重より蹴落しきつと成る（さが）ヤア大それゞ半左衛門母をとらへて猫抔とは何を證據に慮外を申すと怨さぬぞ（半左）證據といふハ行燈へ寫りし影の自づゝら人は知らぬと存じおるかヤアー〳〵弟早參れ「ハット答へて半之丞魚骨携へ顯れ出ト橋掛りより半之丞件の盆を持出て來り（半之）先刻おのれが兄上へ無理難題を言かけふる油斷を見濟し床下より探り出たる此魚骨よもや覺へが有らふがな（さが）サア夫は（半左）何故わつて行燈の魚の油を喰ひおつゞ（さが）サアそれは（半左半之）サア（さが）サア（三人）サア〳〵〳〵（半左）イデ本躰を顯わしくれん「すはといゝなば一刀に切つて捨んず身の構へ妖魔はひるむ景色なくト兩人詰かけるおさが思入あつて（さが）ヲヽ打ならば打て見よ魚の油に我ゞ本躰見られしからは包んで益なしいかにも先頃嵯峨山にておのれに大事を妨げられ手負と成りしむやくしさおのれの家へ紛れ込み老母の五躰へ乘り移り孝行振りなす兄弟の介抱受て療治をなし再び望を達せんと今の今迄化おふせ恨を返せしゆれなれバ無念に思はば討て見よ仮にも母の此骸へ刃向ふ事は出來まいがあ「サア〳〵殺せと妖猫ゞ弱身へ附入る惡口に無念と思ふ兄弟も母の姿に氣おくれ

も討に計たれすためらへば小影に忍ぶ兩人ゞ爰そと思ひ踊り出トと下の山吹影よりゆ彌太郎重吉出てきつと成り(彌)ヲヽ御兄弟には母御故譬へ心は化猫でも骸に御遠慮被成ふが(重)家來にあらぬ出入のこちとら何んで遠慮がいるものか(彌)手取りにするから(兩人)覺斯仕ろ(さが)ャアこしやくありすさりおらふ(彌重)ちよこせへな「身支度なして兩人ゞ組付く力に妖怪も敵し難くや思ひけん煙りを成つて立去たりト彌太郎重吉おさがへ組付き三人よろしく立廻りトいどろ〳〵に成りおさがの骸より煙り立つてばつたり倒れる半左衛門半之丞此体を見て(半左)ヤヽ扨は妖魔は(兩人)立去りしか(彌)此儘にして置きましたち(重)ゆに俗性顯わしませう(半左)イヤ母人の御死骸此家の内に見へされば(半之丞)妖魔が退散する上はそれが則御亡骸(重)扨は猫めは(彌)逃ましたかエヽ忌〳〵しい(兩ゞ)事だなア「追行く事もならざれば手に汗握る二人りより泪に暮れる兄第が母の死骸に取縋りト皆者〳〵よろしくあつて(半左)ヱヽお痛わしや母人樣いかなる前世の宿業ゆや武門の家に產れながら書生の爲めにお命をお縮め被成れて今日迄御身を穢せし勿体おさ(半之)神なちぬ身の左樣とい存ぜぬ故に御最期の際さへ知らぬ兄弟の無念はいか斗り(半左)狐につかれし其人は再び活る例しもあり(半之)お命あらば母人さま御蘇生成被て下さりませ「呼べどさけべど其甲斐もあらしに連れて大雨のいつか降り出す庭の面モト兩車に成り花道へすつぽんにて縋ぐるみの猫顯れる彌太郎重吉是を見すかして(彌重)ヤあれに何やら(半左)ドレト入

手巻おつて向ふを見込み是を道具替りの知らせ半之丞はおさがの亡骸へ縋り泣く彌太郎重吉同じく悔ふを見込む猫は其儘すつぱん〳〵消へ煙りばつと立ツ「雨は次第にト床の送り風の音に成る此道具廻る

本舞臺一面の平舞臺後ろ板塀眞中能所に切を破り乃仕掛あり塀の内より見越の松上下植込の張物あて見切大都て小守の宅塀際の体雨の音床の送りにて道具廻る

「降りしきる雨も烈しく宵番の廻りの者は提灯を雨に消さぬと吹送る吹雨を厭ひ歩行み來てト上手にて四ツの拍子木音して上手より暮明の中間二人赤合羽饅頭笠にて火の番と配せし提灯を持一人は拍子木を持出て來り(○)コレ〳〵久内花の頃とは云乍降もそうな空でもなかつたに夕立の樣な雨じやアねへか(△)是といふのも小守さまで時ならぬへ掃除を仕たり女の腰を抱たせへでこんなに雨が降るのだらふこんな晩にやア庭から猫が出樣ふも知れね(△)成程爰は小守樣の丁度お庭の外だ暇を止めて早く行ふ(○)爰を通るのが一番思ひだ(△)火の廻り〳〵ト兩人邊りを見廻す此内塀の内の見越の松を登り縋やるみの猫出て下を伺ふ兩人是を見て(兩人)そち出た大變逃ろ〳〵ト橋ゝりへ逃て這入る「樣子伺ひ怪猫がひらりと飛んで遠近の人跡絶て横吹雨雨に紛れて邸中を立去らんとなすうしろよりゆふ人やあらし吹く風いものゝ強力の左右太ゞ手並に怪猫も遁れ兼てゞ見にけるト塀の上よりいぜんの猫飛下り花道の方へ行にかゝる此時上手の植込の影より市之丞赤合羽饅頭

笠大小屁ねしぶりにて伺ひ出で猫を引付けきつと成る是と一時に下手植込の影よりいぜんのゆきく禿婦折一本さしにて赤合羽を羽織饅頭笠をかざし出て猫をさし殺そふといふ立廻り猫いあちこちと逃廻りとゞめどろ〳〵と成り兩人たち〳〵と成る此内猫は退れて向ふへ退入る是にて兩の音止みばた〳〵にて正面の塀を内よりこわし半左衛門手鎗を持出て來り三人顔見合せ(市きく)半左衛門さまか(半左)ヽテ怪猫めを御存無きや(市)唯今是にて逃られましさ(半左)ヽテ殘念なゝ鎗りの石突を突くを木のかしら(半左)事を致したト三人引ばり宣し〳〵本釣り鐘よき合方よてひやらし幕

五幕目　三島驛捧鼻の場　同本陣宿屋の場

一本陣三島屋多右衛門　一雲助朝鮮虎　一愛妾おさよの方
一涙島の老女長尾　一同野呂間丑　一三島瑞女房おとめ
一同奥女中　玉笹　一同じやがたら半次　一同　下女おまつ
一同家臣關傳六郎　一同信州熊　一同　おたみ
一雲助高年龜　一宿役人文助
一石部金之丞　一雲助正直三次
一中間權平　一小守半左衛門

清元連中

本舞臺一面の平舞臺眞中丸太造りの大鳥居後ろ明神の社を見たる境内の遠見上手九尺の掛茶屋東海道三嶋驛といふ傍示抗都て三嶋明神前之体爰に宿役人文助下手に雲介四人扣へ居る此もよふ馬士唄にて幕明く

(雲助)來ね〳〵奴らは言つぐとして此四人で役人樣の御用を聞外一同へ申升からどふぞおつしやつて下さいまし(文)兼て噂に知る如く此度鎌倉表ゟ御出立ゟ相成た涙島家の御部屋樣東海道をお登りよて今日時當宿へ御止りなるが夫ゟ付不思議なるは鎌倉ゟ發駕の其夜より何んとなく傍傍近く怪猫出て妨げなすよし其防をゞ申渡すのじや(雲一)初て聞た其ゟ咄し私共の聞ましさは大涙島のお妾がすこぶる器量のよい所から(二)泊りの晩よ化猫ゞ色々なものゟ姿をか〳〵御附のものをたぶらかすと(三)海道筋はいふゟ及ばず雲介仲間の噂で有たがそうして見ると猫ではなくつて(四)うかばれぬ佛の念ゞ殘て居て戒名にのりうつるのでムり升かナ(文)イヤ是はこつちがわるかつた怪猫と申すのは戒名の事ではない矢張化猫の事を申のだ(一)ヘエそうでムり升かそれじやァ噂に違なく猫が冠を致し升とか(二)先づこちらの目を附るゝもふタ方に泊りにつく(三)屋敷の荷物の其内に有るかないかはこつちの腕前(四)心を附て見出したら多くの人の助けやら(一)又一ッには此宿の名前も高くある事故きつと張番致し升ふ(文)其了間なら大丈夫暮ぬ内に一廻り言渡させねばならぬト宿役人ハ下手へは入るト向ふより雲助長持唄を謡ひ向ふより高年龜雲助の拵らへ跡より正直三次同じ拵へにて蔬包みの荷物を担ぎ跡より關傳六郎旅形にて出て來り花道にて(三次)万年

寸待てくれ(龜)ヲイ杖か(三次)イヤ一寸下してくれト荷物を下ろす(傳)コレ〳〵モウタ刻になるに左樣お手間取ては相成らぬ此荷物が着せぬと御化粧の間に合わぬ只今休む事は相成ぬぞ(三次)御間が欠てと相濟升せぬがちつと此荷物に不思議な事が厶り升ので下し升て厶り升(傳)ナニ此荷物に不思議があるとは(三次)中の樣子は存じ升せぬが此荷物の其中に若や生物がは入は居り升ぜぬか(傳)何と申す(三次)雲助風情の私ゞ高慢な事をいふ樣だがさつき函根の關所から此荷物を替事して峠を越した三嶋口調度時刻も七ッ下りおつかぶさつた木の下で小ざしのものに斷つて一ぷくやつた其時にハテ變だなと思つたわ化粧道具と札の打と荷物の中で動くのは是りやてつきり活物と心を付てくる道も來れば來るほど怪しい此中もしや噂の古猫が(傳)ヤ(三次)イヤそふ確かにい言われ升せぬが此荷物には金ゥあるとか此客人ゝ種々いことが貫目を引のゞ商賣柄モシ宰領さま是は活物で厶り升ふヰ(傳)コリャ何を申す鎌倉表出立より此の荷物ふば傳六郎放れし事ゝなき宰領役活もの抔を入て置ふや怪しからぬ事を申奴じや(中間)そう言ム内も時刻かたける少しも早く本陣へ此荷物をかついで行やれ(龜)コウ捧組夫ヤァおめへがそう思ふにしろよしんば中に活物が有るおも其所が上と下別に斯うといふいもくを付けて丸印にする譯にも行かすこいつァ我慢をして本陣まで早くやると仕樣じやァねへか(三次)イヽヤ遣られねへ夫ヤァ旅人に雲介がいもくを付てゆするのゝ僅お金がほしいのだゞ夫とは違つて此頃では街道筋に噂の高ひ大浪島乃お泊に急度其晩變化が出て人をかどすといふ事を聞て心の關所前峠の破風屋で一杯やり一番こいつを退治よふと思つた矢先へ當つた荷物化粧か魔性か知らねへが人も三嶋の往來で明にくからふがお宰領此荷を解ひて見せなせへト傳六郎は當惑の思入れ以前の雲助は是を聞き(一)正直よくいつた今も今とて問屋場から雲助仲間へ嚴い御達し(二)何でも今夜此宿に怪い事でも有時は一生三嶋の名おれ故(三)夜の目も寢ずに氣を附ろと言渡された其矢先へ(四)手めへが見拔て活物と目串を附たら外れねへ(一)何んでも此荷は怪しい品共々爰で加勢をするから(二)心を丈夫に掛合へ〳〵(龜)コウ〳〵手前達も一所になつてかんな屑へ火を附るよふなそんな事があるものか已ァ年のせへか箆捧とけんのん性で心配でならねへこいつァ飛んた奴と捧組になつてコレ正直そんな事をいわねへでマァ本陣へやると仕よふ(三次)エヽ何をいふのだこふ言出したら跡へ引ねへそこが名題の正直三次曲ゝ事をいふものかゑ(龜)サァそうでも有ふが相人はお武家だ(三次)エヽしみつされな事をいやァがるナ(一)そふだ〳〵爰は一番ふん切所だしつかりやれ〳〵(三次)サァお宰領爰で中を見せなさるとも又雲助達には見せられねへと言なさるか二ッ一ッの返事を仕なせへ(傳)上の荷物を往來中で下賤匹夫の其方等に見すると申ゝ法よあらねど常節噂の高かりし怪猫抔の居らんかと申さぬ斗りのそちが詞此言かけを否む時ゝ當驛中に疑惑を生じ多人數恐怖致す時は返つて爲にらぬ故いかにも中を問き見せんが此方迚も侍故もし此内に生物の居らぬ時

は匹夫とて其分には致さぬぞ(三次)夫は仰る迄もなく若此中に居ない時は下賤匹夫と言ふすつた南爪に等い此首でも取つて御上みへ言譯に御持あすつて下さい升しゝ是を聞き万年龜恂りして(龜)コレ〳〵正直何を言ふのだ口でい南爪と手輕くいふが大事な首を取られた日ゑはおぬしの命のねへのを承知か(三次)又しても意氣地のねへぢく〳〵せずと引込で居ろ(傳)それ權平荷物を是にて解て見やれ(中間)ハッ畏り升たゝ件の荷を解て見せる此時荷の中より白き烟出て日覆へ引てとる三次ハ是に氣がつかず此内傳六郎は一々道具を出して見せて(傳)是でも汝は疑ひ居るか(三次)コリャどうだゝ呆れしこあし(傳)權平そやつを是へ引摺出せゝ前へ三次を引出させヤイ能も武士さるものへ惡口雜言致したナ時刻もてう度暮六ッに我ケ命も入相の鐘諸共に地獄の旅志かし匹夫の其方が今際に至り過報るは大涙島の寄領にて其名も關の傳六郎此一刀の元に果なばたゝへ閻魔の廳前でもよも麁略には致すまい我名をあの世の土産にあして觀念なして往生いたせ(龜)モシ〳〵且那樣其御立腹は御尤重々あいつが惡いから起た事でムり升ゲまだ生先の長ひやつこいつの代に年寄た此親仁のしなび首を差上升からこいつの命は御助けなされて下さり升せ(一)手めへ一人の詫言では所詮聞てはくれめへから(二)共々口では威張つたか今となつちやァ濟ねへから(三)此四人も共々に三次に代り御詫言(四)可愛惣だと思召首を御取りなさる事ハ御勘辨なされて下さに升せ(傳)コリャ人足そちに代り是なるものが命乞を致し居るが我は命が惜くはないか(三次)夫ヤァ仰有るまでもなく生あるものが殺されるを喜ぶものはムり升せぬゲ一旦命を上升と男が齒から外へ出したらどこゲぞこまで死ぬ丁簡サァすつぱりとやつて下せへ(傳)ヲヽ能覺悟だゝ刀を振上るを(龜)初め五人止て龜ヤァ〳〵御待下さり升せ何を申も愛は往來どふにか御詫を致升から(一)とるに足らねへ人足共が詫言を致升のは(二)御不承知でムり升ふが(三)茲の所は御免しあさつて(四)命をおとりなさる事ヨ(龜)御免被成て下さり升せ(傳)夫程までに其方達ゲ彼れに代つて詫る故此場で一命斷つ事はいかにもゆるさて遣わそう(龜)夫では御免し被下れ升ゥ(五人)難有ふムり升(傳)併し是切には濟ざるぞこやつ本陣へ連參り上役へ問合せ其上宥免致し遣わす(龜)そんなら是切濟升せぬかゝ此内三次はじつと思入有て(三次)なる程友達は持べきものだよつてたかつて詫言して已れの命を助けよふとは賴母しい了簡だがどうで是から引れて行たら再び此世へ歸られぬへと遠から覺悟して居るから若しそうなつたら手前達も線香の一本も上てくれろ(龜)ウれでは手前はどふしても助からねへと覺悟をきたのか(三次)向ふも武士だ言出しさら何で了簡するものゝ(傳)權平そやつを引くゝれ(中間)サ脇をまてやゝ三次を縛る(傳)コリャ人足共荷物はこのまゝ本陣迄持參いさせ(龜)ヘイ〳〵畏り升さ(傳)我は是より木陣にてきつと詮議をいさしさ上(龜)そんならどふも命をば(三次)ヲヽびく〳〵せずゝ三次立上るを道具代りの知せ此摸樣よろしく道具まわる

本舞臺常足の貳重都て本陣奥座敷の体爰におさよの方妾の拵らへ下手に長尾老女の拵へ玉
笹輿女中の拵らへ何れも旅形にて住居此見得宜敷道具止る
(長尾)今日は殊の外刻限も御早ひ御附まづ御ゆるりと庭前にて御休息遊し升う(さよ)鎌倉
表を出たより今日まで日和の續きしいわまは兎も有れ供の者はさぞ仕合せな事で有ふと悦
ばしう思ひ升(玉笹)御察しの通今日まで丸て箱根の峠故御天氣でムり升せぬと足の踏度も
丸石に辷つて歩行は致し升せぬ(長)夫に又景色のよいは御關所へかゝり升と湖水へ寫の雪
の富士あれゞ賊の水鏡と御供をしながら保養を致し實に壽命が延升たわいナァ(さよ)夫に
引かへ私が身い御國へ近くあるに付け一日〳〵と此命が縮ゞ樣な心地して實に心氣でなら
ぬわいナァ(長)スリヤどふ言ふ譯にて(玉)あなた樣には(さよ)サア外でもない私が身の上
去年殿樣お國より都御在番にお下りの折お情け受けしが初めて竟にはお胤を腰胎なし日出
度お國へ出立と仰せを受て此樣に身に余りたる人數を伴ひ行くは嬉しき事なれどよく〳〵
思ひまわして見ればお國表は奥樣初めお照樣といふお發明なお方の有に仮令お胤を含しな
とて此身風情の行時は妬み嫉みでどの樣な憂目を見ようも知れぬと思へば夫が今ら苦勞
じやわいナァ(長)コリヤいらぬ御苦勞と申もの及ばずながら私共もお伴をいたして參る上
何よりあなたの御安心は左り孕と仰あをばコリヤ申さずとも御男子の印し仮令お部屋でお
出にしろ少しも御念釋はムり升せぬ(玉)あなた樣万事お内端で物事扣目に遊ばす故氣兼な
さるは御尤お國表の奥樣や又お部屋樣とて今以てお胤を含さぬ其所へ御腰胎にてお着あら
ばコリヤ奥樣も同じ事誰が点の打人ゞムり升ふ(長)其御心配よりお骸を大事にお持遊すの
がお上へ何より御忠功(玉)必らずお案じ遊し升ナ(さよ)そういふて見れば左樣なものじや
ゞわたしやどふも心細ふて夜るもろく〳〵寢られぬ程案事られてならぬ故おまへ方も此末
ども力を添て下され升せ(長)夫があなたの入らぬ御念おつしやらずとも私し共は(玉)お力
添へいでなんと致し升ふト爰へ宿屋の女房高附へ菓子をのせ下女二人茶なぞ持出て來り
(女房)私は當本陣の家内にムり升御目通お伺の上是へ出升てムり升が御泊を仰せ付られ家
の冥加に相成升て有難ひ事でムり升ト挨拶して菓子を出す下女は茶を出して直に奥へはへ
る(長)いろ〳〵お世話にあり升て(玉)お手數でムんすナァ(女)もそつと先へ寄り升と花擅
の菊が開き升て少しはおなぐさみにもなり升ふが折惡ふ楓もまだ紅葉前でムり升(さよ)鎌
倉を出立してまだ程もおき三島驛見る物事も珍しく殊に保養に成升わいナァ(女)當宿なぞ
も斯うと申して御覽遊すものなく箱根と伊豆に押され升てとんと不意氣な土地でムり升が
明日はお通り筋に原七ッ原一間ざへ參ると左り富士ゞ見得升るが是が一ッのおなぐさみで
ムり升(長)道中双六で御存の左り富士ばかりおあぐさみ其左りこそ幸先よき富士より高き
御高運(玉)雪の肌への若樣ゞ其御出産を三保の松空晴渡る海原に風帆も追風にいつぱいに
(さよ)曇りおき身の白帆さへ空にさわりのうき雲に逆立浪を穩かにいのる神の御惠み(女)

頓て目出度ふ御成長海道筋をお下りに下もの豊さを三島驛(長)日わらず御無事に御歸國を(玉)まつは互ひの心の内(さよ)樂みにして居り升わいナァト茲へ以前の下女二人出て來り(下女○)お風呂かよふムり升れば(同□)お上へおふせ下さり升せ(女)別にお風呂を立て升たればれ心置なふ御ゆるりとおめしおされて下さり升せ(長)夫に付てもお化粧道具へ宰領なさる傳六郎さま何故いまだお出ゞなき(玉)お風呂へお出遊ばすと直ぐ御入用のあの品々案事られた事でムり升ト茲へ下手より以前の傳六郎出て來り(傳)ハッ遽に着致すべきを途中において一義起り大きに遲刻仕り嘸御差支にムり升ふと漸く持參致してムり升(長)傳一義出來いたせしとゝどの樣な事でムり升(傳)イヤ別にお上みに當升てゝ御案じの義ではムらぬが海道筋にてれ化粧の荷物を開き升てムる(玉)スリヤどの樣なる事有て(傳)されば當お荷物を箱根の關所で人足次ぎ三島へ掛りし其折に明神前の立場にて彼の人足の中には此荷物には活物の慥に入しと申せし故無法を申人足を打捨んと存ぜしゞ無益の殺生致すのも武士の本意にあらざるゆへ言譯なさんと思し所よく〳〵思ひ廻らせば當節世間の妄說に當浪嶋家に祟りなす怪しき猫が民家へ入込老人子供をおやますと街道筋ハ噂とり〳〵夫故中を見せぬ時はもし噂さの怪猫にても這人居らんと疑わるゝも賊ふ殘念至極故余義なく中を開き見せしに全く居らぬといふことわかり其場の明りは相立しが御着の跡にて御用の間をうき申譯もムり升せぬ(さよ)スリヤ化粧道具の品々を道にて御聞きなされたるかゞテ別條はムり升せぬか(傳)夫は拙者が宰領に何事もムり升せぬゞ不禮致せし申譯にうやつを直樣引くゝり只今是にて詮議なさんと召連升てムり升(長)是と申も先頃よりよしなき說の起りたる此お登りのお泊り場所へ夜な〳〵怪しき猫の出民家をおどすと人の口(玉)只心に掛るのは御國表に重藏寺とやらいふ家の飼猫當お家敷へ祟をあすとて御本國では穩かならず(さよ)夫といふのも奥樣がわたしをお妬み遊すより左樣お噂を言ふらし道中筋を妨げなす廻もの〻仕業もしれず(長)コリヤ一詮議遊したら(玉)必ずわかるでムり升ふ(傳)拙者も其義的中致せバ一層嚴ふ詮議致しきつと白狀させて見せん(長)何は兎もあれ怪しき人足是へ引出す其所へ御姙娠の御身にて御覽おさるはお毒故(玉)お化粧道具も參り升れば此間にお湯を召升のがよろしからふと存じ升(さよ)能に斗ふて下されいのふ(長)サア案內を頼み升(女)畏り升たト唄になりおさよ長尾玉笹女房先に立ては入る傳六郎は二重へ上り下手に向ひ(傳)そやつを其所へ引摺出せ(中間)畏てムり升ト下手より以前の三次繩にろゝり是を中間引出て來り平舞臺に住ふ跡より三島屋多右衛門本陣の主人以前の宿役人万年龜附添出て來り宜敷住ふ(傳)コリヤ宿役人當家の主人是へト呼出して斗らざる珍事出來致し掛りのものに手數を掛るゞ身共宰領仰せ付りし荷物に斯る振舞有ては役目の落度に相成事故是にてとくと取り糺し其上成敗致す間此段申渡すぞよ(多右)私は當本陣を預り升る三島屋多右衛門と申もの是なる人足の不調法より既にお荷物へ對しまして惡口致せしと申事取に足らぬ

人足共御立腹は御尤なゞら此者になりかわり宿役人諸共に私しよりお詫を致し此後麁忽致さぬ樣申付るでムり升れば此場は此まゝお見遁しを偏にれ願ひ申升ト詫る(傳)アイヤ亭主ざまらつせへ其取に足らぬ人足共故見のゞしやらんと存ぜしが上みより預る錠前の箱を開きし上からは取に足らぬと申されぬぞ(多)スリヤお道具の箱の内まで(傳)改め見せろと再度の惡口止を得ずして往來に聞いて見せれば何事なく言譯あさに是非なくも一命斷てと自身の訴へトいふを冠せて(三次)イヽヤ獸が荷の内に確に居たに違へねへおめへい居ねへと言なさるが肩に覺への商貿拵まして活物動く斗か確に目方も一〆目こいつァてつきり贋の高ひ人をなやます猫まゝと心ゞ付た明神前箱を明た其時に姿をかくして逃たのを目に懸らねへのゞこつちの不運言譯あさに此繩目已れは命は惜くいねへが居ねへといふのゞ癪にさわらァ何でも居さに違へねへのだトいふを多右衛門止て(多)コレ〳〵三次何をいふのだ今命乞をして居るのに何をづか〳〵威張のだ仮令中に其獸が居たにせよ十分の弱身人足共の身分にて荷物を明ては濟めへがサそこら爰らへ考へを附ぬといふゞ有ものか(三次)夫でもあんまり(多)ハテマァ已れに任して置けト傳六郎に向ひ御覽の通りの無法の人物尤も街道抔の人足は皆理非辨へぬもの斗り所詮御了簡はなり升まいが彼が骸は私に御預けあされて下さりませ(傳)仮令再應願つてもこう言出したら跡へ引ぬ是が浪島家の國風だ(多)スリヤ是程お願升ても(傳)エヽくどいわ〈斯樣な奴い上役へ問合せにも及ばぬ故此場でそつ首落してくをんト立掛る此時奥にて(半左)イヤ關氏暫く御待ちやれト奥ゞ小守半左衛門石部金之丞旅形にて出て來り宜敷住ふ(傳)是は小守氏最早御着にムり升たか(半)始終と次にて承わりしが存よらざる彼ゞ振舞役目の表二ッには貴殿へ惡口致せしゆへコリヤ打果すは當然なれど御部屋樣には宿あらぬ御身の上の御道中仮令下賤の者迚も旅中に人をあやめなば却て御爲に惡かるべしト有て是を助けなば貴殿の落度と相成ゆへこやつを拙者へ御預けあらば得と意見を加へし上本陣並に宿役人へ渡し遣わす所存ゆへ何卒身共へ御渡し被下れ(傳)流石は小守氏御仁惠厚き其御詞實に感心致したが併し罪有其者を刑に行わぬ其時は益々惡人はびる道理(半)其仰せ一理あれどいわば人馬の繼立人足コリヤ助け遣たとても聊か障りもムるまい(傳)人足故に搆わぬと仰せあれども譬に申す蟻の穴より堤の崩れ況んや今般御於行中諸所の止りに不思議なる事のみ多き時節なるに人足共とて油斷はあらず夫を承知で御助けあるは何か御所存ムるよナ(半)外に所存はムらねど寛仁大度の我斗らひ夫とも達てそこともとは人命たゝん御所存なるゞ(傳)強て左樣な事なけれど(半)助け升ても宜しうムるか(傳)ムヽ(半)關氏コリヤ助けておやりなされト傳六郎是非なく(傳)命冥加な匹夫めじや(半)彼がいましめゆるせと多左衛門繩を解く事有て(三次)すんでに命を取られ升のも強情張つたが此身の誤り故こを無難お助り升たは且那樣の偏へに御影(多)是ゞる三次は申に及ば寸一同御禮を申上升ト皆々一禮する(半)イヤ關氏助け遣わす上からは少しも早く御渡な

と召し御休息有て然るべく存る(傳)左樣ならば小守氏(半)傳六郎殿(傳)復刻御目にかゝるでムらふト傳六郎中間付て奥へは入る(半)コリヤ多右衛門斯事濟と相成上は此所に搆ひなく今宵御泊りの其中は万端心を用ひられ無禮なき樣致してくりやれ(多)左樣なれば小守樣御ゆるりとあされ升せト皆々下手へ行ふトする(半)コリヤ〳〵三次とやらは殘つてくりやれ(多)左樣なれば私も(半)イヤ其方は次へ參れ(多)デモ此者一人では(半)ハテよいと申すにト是にて余義なく多右衛門初め三人は下手へは入る(半)ヒリヤ三次とやら是へ來やれ(三次)ヘイ(半)遠慮はないもそつと進め只今そちを殘し置たは余の義にもあらざるが先刻關傳六郎に申せし詞の其内に荷物に活物ある由申せしが何等の見止有ての事か其義に付て某も篤と密談致し度し是にて包まず申聞かせよ(三次)雲助風情の私へ恐れ多ふムり升ゞ商賣道によつて賢しとやらで且那方が御武家の事を御辨へなさるも又我々が荷物の貫目又此荷が金が有とか又は死人が隱してあるとか年來渡世に致す御影是と取止た事はなけれど自然天然備わるものと見得升てけふ御化粧の道具入と木札を打た御荷物を請取時に聞た貫目と道まで出掛た其時に目方の附たが一ッの不思議てつきり夫と氣の附たは大浪鳴の御部屋樣が東海道の御登りに御家に仇あす猫またが泊り〳〵で妨げすると人足中間の噂とり〳〵昔よりして荷物や駕に魔ものゝ居たためしもあれば一番こいつを見出したらお家の爲め人の爲と綽名に取と正直の一徹心に思ひ込み宰領方へ押て乃願ひ命をかけてお荷物を開ひて見れば何の氣もなく確に夫と見止た事に違つた事のない三次が魔物の影を見失ひ誠に口惜ふムり升た(半)御家の爲め人の爲めとは賴母しき一言なるゞ其猫またが荷物の内にまゞ居ると見なす時は如何致して捕へるぞ(三次)そこは覺への柔術にて(半)ヤ(三次)ナニ柔術なぞは知らずともそこが下賤の生立故へめつと矢さらは組付升て(半)もそ其時は魔物めを取り逃したら如何致す(三次)私ゞ目にかゝらば急度捕へてお目にかけ升(半)しゃと左樣かト金之丞へ目くばせする金之丞は不意に三次へ組付く是より兩人柔術の立廻り宜敷半左衛門は始終是へ目を付るトゞ兩人はぐれると同時に半左衛門持さる扇を振上げヤット聲をりける三次は金之丞の落したる扇を捨ひ身搆へる是より位取りのこなしよろしく有て双方一時に扇を引き(半)ムゝ手の内感心致したコリヤ三次とやらシテお手前の本性は(三次)ハット言兼る思入れ(半)何といわるゝナ(三次)他聞を厭ひ升事故(半)ムゝコリヤ暫く次へ(金)畏り升たト奥へは入る(半)心置なく此所へト三次是より侍のこなしにて(三次)然らば御免被下れト二重へ上り下手へ住ふ事有て先刻よりの不禮數々平に御用捨被下れい(半)不禮は是まで互ひの事先刻是へ參りし時より只者ならぬと目を付しに案に違わぬその御手練何等の義にて其許にハ斯く下賤の業なし御身を落し居らるゝナ(三次)此身の恥になる事故是まで包み居り升したれど不意の御試めし余義なくも拙なき手練を御覽に入れど本性お明し申事は(半)スリヤならぬと仰せらるゝかコリヤ御尤もト金打する事有て他言致さぬ此金打何卒

本性お明し被下れ(三次)斯くまで仰せ被下るを否むは武士の本意ならず然らはお咄し申すでムる拙者は元但馬國丹浪家の藩中にて高木鄉太夫の一子同苗三平と申もの幼年よりして姓質荒く殊に大酒を好みし故御邸内ゑて口論なし朋友共をあやめしが竟には親の勘氣を請兎やせん角と思ひし所當家の主人三島屋多右衛門豊岡よりの戻り道慰ひし茶屋に面會なし同道なして當宿迄參りしなれど勘當の詫の濟ざる其内は元の武士にもなり難く且ッ性來隨弱にてついには下賤の交りなし染り易きは匹夫の業斯耻かしき姿となれど心に錦を飾り居れば我名を正直〳〵と呼なすほどの今の身の上誠に面目次第もムらぬ(半)事詳かに御明し下され拙者に於ても滿足致すシテ御勘氣御免に相成上は御家督おさるゝ御身分なるや(三次)長男にハムれども右の次第に次男に讓り今は便なきこの身の上只此上は勘氣ゆりなば何れへなりと仕官なさんと夫のみ當家多右衛門殿に密々頼み居り升(半)然らば拙者が其許へ折入て頼みがムるがおんと聞て下さらぬか(三次)既に危ふき一命を御助け被下さる其許樣身に叶ひし事なれば(半)御聞屆下さるとナ(三次)身命かけて承わる(半)夫は千萬忝けなし(三次)シテ某へ御頼とハ(半)余の義にはムらぬが先頃本國嵯峨山領にて一人の母を妖猫にとられ殘念ながら其折は年經る獸に見失ひ武門の耻辱ニッには母の敵と存ずる折柄今般旅行の先々にて夜な〳〵怪しき獸出人を惱ます事あるハ是正しく國表の年經る猫の業あらんと心を配る其幸先御身の詞も的中なし且は御心見拔しゆへ今日よりして某へ御心添被下らば末々主家へ其許を推擧致す我心底何と御承知被下るまいか(三次)忝き其御詞嬉ふてもおき事なれば御頼みなくとも心を盡し共に詮議仕らんが斯る時にハ其盧に附入り惡人原のはびこる事ハかの唐土ハ九尾傳我日の本にもまゝある習ひ故に御家の御家來とて中々油斷ハ相成升せぬ(半)流石は其許感心致しゑ其心底を聞上ハ今晩よりは共々に何卒御心御附下され(三次)併し先刻宰領の關氏とやらに拙者めが不禮致せし事あれば味方致すも何とやら(半)夫で万事を見得隱れにやはり其まゝ人足体(三次)軍さで申さゞ間者の武士(半)敵に三分の計略あらば(三次)味方に七分の手立をなし(半)表は隔つ武家と人足(三次)其擱手は以心傳心(半)是も御國と家ハ爲め(三次)左樣ムらば小守氏(半)コレ休息致せト立上るを道具がわりのしらせ三次人足乃こゝしにて三次も有難ふムり升ト此もよふ道具まわる本舞臺一面の平舞臺鼠壁上下一間の附家臺いつもの所二階の上り口都て本陣二階座敷の体茲に以前の傳六郎湯上りの拵へにて膳に向ひ夕飯を仕舞し体下女二人住居米山のさわぎにて道具止る

(下○)さぞおやゝましうムり升ふゞ揚屋が近所でムり升のに當宿は皆外まわしでムり升から(□)夜更までも賑かで誠にお氣の毒樣でムり升(傳)イヤ其心配には及ばぬ先刻も當家の主人ゞ兩隣は今晩丈け質素にせいと申附しを夫では却て氣の毒故其まゝお致し置けと申し遣わす位ひ故却つて賑かなのゞお慰みでよいわへ(○)西隣は糀屋て堅ひ宿屋の事故に女郎

衆杯は參り升せぬが熱海ゝら下つて參つた清元の太夫衆が今晩泊つて居り升ので淨琉璃が初まると申して手前へ手紙をよこゝ升た(□)何も旅の御慰と奥へ參つた其手紙を是へ持て參り升た一寸御覽遊し升せト手紙を出す傳六郎受取て(傳)ドレ〳〵御登りの御客樣にて御繁多とは存じ候得共今晩私方へ淨琉璃御座候間御用御片附次第是非御出御待申上候イヤ是れは存じ掛なき催しなるか一段と聞事で有ふ(○)今晩のお屋敷樣の外別お泊りがムり升せぬば夫を樂しミにして居り升(□)直ぐにお床を延ミ升ふか(傳)イヤ〳〵未ダ御上の御用もあれバ又其時は手を打故まづ膳を引てくれやれ(○)左樣なれば御紐の節は(□)お手をお打被下り升せト下女は膳を持二階の口へは入る(傳)まだ〳〵中々寢られぬは反間苦肉の計策に示し合せし下郎の權平首尾よく一品卷上しか早く樣子が聞きさいものじやと爰へ二階の口より中間出て來り(中間)傳六郎樣(傳)靜かに致せシテ一義はいかゝなりしぞ(中)首尾よくやつて參り升たおさよの方が風呂場へ行く透を伺ひ短刀の中身首を尾能く入替さ細工て流々仕上は此品篤と御覽下さり升せト懷より正宗の短刀の中刃斗りを出す(傳)紛ふ方なき五郎政宗之をこつちへ卷上れば半左衛門めは役目の落度是を後日に某しが詮議仕出した樣になし上へ差上立身出世權平出かし居つたぞ(中間)シテ其品を始末至すは(傳)某所持なす其時は露顯の程も斗られず是を隱すに屈强なは御國表の梵字ヶ嶽瀧の根方よ安置おす不動の下へ埋め置歸國の上にて堀出さん(中間)なる程是は能い御手段シテ持參なす其のものは

(傳)謀事は密なるを以てよしとすれば其方是より參つてくりやれ(中間)併し夫では下郎惡事が(傳)夫は拙者が胸にあり心置なく直樣是より(中間)畏つてムり升ト傳六郎は金を出して(傳)當座の路用じや首尾よく國へ戻つてくりやれ(中間)有難ふムり升(傳)ちつとも早ふ(中間)何分跡をお頼ミ申升ト中間は元の口へは入る此以前より上手の屋体の障子を明け玉笹是を見て居て此時双方顔見合せ悔りおし一寸氣味合有て(玉)傳六郎さま嘸お淋そうムり升ふナ(傳)玉笹どの能ぞ是へ參られさのサ遠慮なく是へ〳〵(玉)奥平御免下被升せトよろしく住ふ(傳)コレ玉笹どの仮令旅中と申せ共居間隔りし此座敷へ女子一人でいつの間お(玉)人目を忍び參り升さもあなさのお胸よムり升ふト傳六郎思入有て(傳)身共が胸を打明さば實はこなさに惚れ升さ(玉)ソリヤ啌でムり升ふ亘實惚れたとおつしやるのは今の一義を見升さ故ろれで私し(色仕掛(傳)ムゝ(玉)何と啌ではムり升まい(傳)夫れ知られさらト切てかゝる此時以前の長尾此の中へ割て入り(長)イヤ傳六郎樣其御心配には及び升せぬ(傳)デモ一大事を(長)まづ〳〵お心をお鎭め遊しお下にお出下さり升せト是にて傳六郎是非なく刀を納め下に住ふ(傳)スリヤ長尾殿にも今の一義を(長尾)共々御荷担致度人目を忍ふ此二階言合せねど玉笹殿心は一ッ身は二ッ同じ思の企をお聞なされて下さり升せ(傳)シテ企といわるゝは(長)此長尾を始めとして心配致すは外ならず御國表の奥樣には未だお嵐もなき所へれ部屋樣がお出の時はどの樣おつゝゞ遊すともうこは女子の一念にて必ず事

の起るは必定(玉)高ひ壁では申され升せぬがおさよ様が御心配を遊すのかおいたわしくい
つその事に奥様を亡き者にして御部家様を世に出さんと企つれど女子斗りの智慧にては所
詮此事成就せずお見かけ申てお頼み申すは傳六郎様あなさ斗り(長)お上役の小守様は忠臣
無二のお待中々御承知おらぬのい申さぬ前から知れる事(玉)どふぞ御荷担被下る様(長)と
ふぞ御思案下さり升せ(傳)望む所の能き企賀は先頃殿様へおさよ様御腰胎の義申上しに不
取敢呼よせさいと仰せられしを小守一人是を遮り故障を申すを達てと申し今般お國へお出
と定まり則御出立の守護役は半左衛門と極まり居るど其内實い奥方附中々心のもるせぬ
奴(長)シテ此上の御手段は能御工風がムり升か(傳)されば只今見る如く守刀の正宗を我眼
心の櫂平に盗ミ取らせば此落度で半左衛門めい日わらず退役跡い身共が胸中に(長)其お詞
がまことなら(傳)立身出世はまたゝく内(玉)ほん嬉しうムり升(傳)うんならそちい眞實に
(玉)ハイト恥かしゐこおし長尾い中を隔てゝ(長)旅の勞れをト燭臺を吹消を道具かわりの
知らせ御休めなされ升ぜト此摸様よろしく道具まわる

本舞臺一面の平舞臺上手塗ゲまちの上段の間平舞臺具中お六枚折の屏風を圍ひあり下手隣
家の二階を見たる淨琉璃臺都て本陣上段の間の体時の鐘にて道具止る

ト知らせお付淨琉璃臺の伊豫簾を巻上清元の淨琉璃よおる「秋の夜の最と物うき旅枕寢覺
の床の淋しさも外は梢をもる月よさつと一吹ふき下ろす風お落葉は紅ひの色づくまゝお散

る紅葉ト風の音よなり上手上段の障子仕掛おて明く内おおさよの方闇衣形りよて寢て居る
をさし金の三毛猫上お跨り胸へ喰付諸所のり紅おあり猫は枕元へ下り足おて障子を建る是
おて障子ゑる「更て千草に啼虫の寢耳に遠く菊の名を誰が言初て翁とは便る戸ぼその枝折
門ト文句の切にて屏風を明るト中に半左衛門蒲團の上おて旅日記を付て居る(半)最早今宵
も何時なるか抑國元を出立せしより長の旅路お心を腦まし漸く東へ着せし所又候今般御出
立お御部屋様を守護なして登る旅中も穩かならず夜もろくゝにまどろまぬ心の勞れか先
刻よと一方おらず催す睡眠併し怪しき猫魔なぞのはびこる時節に油斷はならず三平殿と示
し置けば本國嵯峨へ着するまでもコリヤ迂濶には寢られぬわへ「隔の垣の關越へて濡れ
て寄る身の白菊は浮名いとわぬ百夜草ト能程に上手の障子又明く内におさよの方布圍の上
に立身薄き風の音にてツカゝと半左衛門の傍へ來り(さよ)半左衛門殿まだ御休ではムり
升せぬかト是よて半左衛門振り返り見て(半)ヲヽ御部屋様でムり升さか少しもお出を存
じ升せずいつの間にやら此所へ(さよ)サァ只ならぬ身のせへか今宵は心浮ゝと枕につけ
ど眠られず夫で來升たわいナァ(半)左様でムり升か扨て人はさまゝおるもので又某は今宵
に限り持物さへ落す位眠たふてならぬのに如何致してあなた様には左様にお目が冴ないか
(さよ)所詮枕に付升ても伏られ升せぬ事故調度幸ひ此所で浮世噺しをお聞かせなされ
さりませ(半)ソリヤ相成升せぬ是が只の女中と違ひ御腰胎の御身の上且は容貌美麗おる其

許樣が斯く深夜に拙者が傍に御座ある時は直に人目の關越ていかなる事を申されんとも斗り難く存じ升れば此義は平に御容赦被下れ（さよ）今宵に限り付のものもあなたの外に誰一人あたりに人目あらざればはどふぞ置て下さり升せ（半）是而已は半左衛門甚困却致し升れば偖づお枕にお附き下され（さよ）イエ〳〵何と仰しやつても爰は動きは致ませぬ（半）スリヤ又何故（さよ）お國元から鎌倉へお附遊バす其折より思ひ焦れて居ますた（半）エヽスリヤ御本心で仰せあるよナ（さよ）何いつわりを申升ふ「ほんに嬉しきあふせかと思ひます穂の糸薄ト口説の文句よろしくトヤ半左衛門に寄り添ふを拂のけて（半）お部屋樣あなた樣とナア勿体ぢくも殿樣乃御胤を腰胎遊バせしは此上もなき事なるに臣たる身なる某へ又もや戀慕なさるとは人の皮着た人に非ずとサ不禮の詞申上るもあなたの御身を思ふが故何卒お心取直され今宵の事は此まゝに人目なきこそ是幸ひ拙者も口外致さねば思ひ止りて下さり升せ「操の中の常磐木も直ぐにはあらぬものぞうし曲る中にも面白き風情は爰と敘ゆれどすぬた氣性に幾千代をかけ玄思ひの色かへず（さよ）心の底を打明て是程頼むに聞入れぬばわたしやあきらめ升るわいナ（半）スリヤ御合点參り升したかハヽ流石は大國を領さるゝ殿の御胤を舍しある程實に感心致し升たサ少しも早く御寢所へ（さよ）アイナア「幾十かへりの末までも頼むは浮世の盡ぬ緣あわや覺悟と見へければトおさよ上手の家体へ行守刀を取出し自害し樣とする半左衛門手早く止め（半）コリヤ何故に此有さま（さよ）イエ〳〵放して下さんせ（半）イヤ夫ヤ相成升せぬ「縋る小技のたよわくもろき枯葉を取拂ひト無理に短刀を取て思わず見やりヤ短刀わ（さよ）サア殿樣より給わつたる五郎正宗夫で死なして下さり升せ此内半左衛門いよ〳〵見て（半）其仰せある正宗あらず是や眞赤な偽ものでムり升（さよ）何其短刀がエ——ト兩人倘り思入「軍の露にぬれ衣の浮名斗りやト清元を消す此時奥方以前長尾雪洞を持玉笹傳六郎出て來り（長）ナニ正宗の短刀が紛失せしと仰やり升かの（さよ）出立の其日より肌身放さぬ此短刀いつの間にやら贋ものと成りしも不思議の是一ツ（半）拙者守護役仰せ付かり夜な〳〵怪異有る事を御案事申さて短刀を御傍に置しが今宵なり却て害と相成しは察する所某へ遺恨を含む者有て斯樣な事をなしたるかコリヤ一詮議致さにやならぬ（傳）イヤ其詮議は余人よりまづ其許から致さにやならぬ自れの口から申せし通り守護の役目にありながらおろそかならぬ正宗の守刀を紛失なしさは是役目の落度なり又二ツには斯る夜陰に御部屋樣と只二人とち狂つて居たのも是も一ツの詮議もの（長）斯る乱らな事有つては老女を勸めるわしの落度又二ツには御殿と違ひ御旅行中の事なればこのゝには猶濟まぬ（玉）今に思ひ當り升のは今宵に限り御近所に御番なさるはあなた御一人り是もぞふやら變なもの（長）よもや御腰胎のお部屋樣が柔らな事ば遊ばすまいコリヤ大方男の方ゝら手出しをしたに違ひなし（玉）うつかり油斷はゐり升せぬ（傳）サア小守氏不義の掟を乱りしのみか摺かへられし短刀の詮議は貴殿如何めさる（半）サ夫は（傳）よもや答へは

出來まいが(半)不義の汚名は晴るゝ共御家に傳わる短刀の詮議の手蔓は今ゞ今取りつく嶋のあらざればしばし御猶豫願ひたし(さよ)イヤ半左衛門殿斗りでなく紛失せしは此身も落度共故此場で言譯にト又死ふとするを長尾短刀を取上げ(長)あなたは大事なお身の上早まつた事遊し升ナ(さよ)夫じやといふて(玉)ハテマア御寢所へお出なされ升セト兩人は無理におさよを引立上手へは入る(傳)シテ其許の刻延と(半)鶏鳴迄にハ必ず白地を(傳)夫で身共の思ふ坪(半)ニ(傳)未明の返答相待申すぞト奥へハ入る半左衛門は思入有て(半)獵夫罪なし銃を抱いて罪ありとは古人の金言國鎌倉とも御殿の内へ夜あ〳〵出でる怪しき猫恐怖せしもの多人數なる故右等の妨げ防がん爲御守刀の正宗をお側に置て晝夜とあく某し守護なし居さるゞ返つて今い仇とあり詮議なさんに手掛りなく未明の刻延致せどもおさよの方と只二人夜中に居りしが此身の不慧所詮言譯立ざれば不義の汚名と短刀の詮議の趣き書殘し弟が許へ屆けし上切腹なして相果んそうじや〳〵ト四方を伺ひ元の座に住ひ持紙へ矢立にて書置きをしながら(半)無常を告る鐘の音も余命且暮お迫り行く旅ハ冥土の西の空晴れぬ思ひの雨雲に走られぬ筆のにじみゞち思へば果敵ない身の上じやナ〻ト書置を認めながら矢立の墨のかわきし思入にてヲヽ矢立の墨を遣ひ切りコリヤ困つた事を致しさト能き時分下手の襖をそつと明け以前の多右衛門樣子を伺ひ居て此時双方頓見合せ氣味合の思入有て(半)ソチヤ當家の主じで有さナ(多)貴平御免被下り升せ(半)シテ今頃何用わつて(多)矢立の墨の乾き升さ御用を達しに參り升た(半)ヤトぎつくり思入(多)其お認物も只ならぬお書置なら此多右衛門墨を持參ハ出來升せぬ(半)スリヤ始終の樣子をば(多)襖越にて御樣子を承わつては濟升ぬゞ實は只今物影であなたの御胸を御察し申し御詞添を致そうかと胸に浮べど高が町人手に汗握つて居り升内矢立の墨の乾き升さを御用達氣で是へ出及ばずおがら御力を添る心でムり升(半)夫程そちは深切に思ひくさるハ添ひが所詮言譯立ざれば切腹なして果る所存只此上の頼みと申すは一封弟へ届けてくれるが今際のそちへ頼みなるぞ(多)夫がれ武家に似合ざる御短慮ゝと存じ升(半)ナニ短慮とは(多)コリヤ申さずともの事なれど仮令烟管一本でも紛失ものゝ有時ハ旅籠屋渡世の衰微の基分て三嶋の驛内でも及ばずながら本陣の役目を勤て居り升る是もやつぱり御屠敷樣や又泊りの御客樣が御ひわき下さる皆おかげ僅の品でも有事か御家重代正宗の御守刀が紛失と承わつてのめ〳〵と詮議をせずゝ置升ては此多右衛門ゞ家の名汚れ此家はおろか宿中の旅人の立を止升ても草を分ても詮議致せば其御短慮はまづ暫く御待なされて下さり升せ(半)町人なゞら其方は適れ義强き志し然らばそちの詞に隨ひ切腹の期を延さんシテ短刀紛失の何か返答あらざるか(多)手掛りとてもムり升せぬが只今思ひ當り升は宵に御供の中間が急ひで御膳を御上りなされ是から宿をひやかすから屐物をかせと仰やり升故當宿内でも私方と又隣家の糀家方でハ御客樣の御遊びをれ止申すが愛敬にて是さで堅ひと名代の旅籠屋夫も聞ずに直歸ると表へ出る

まゝ戻りませぬに夫に幸ひ御恩を請と三次に先程跡を追わせ升とが未だに戻つて來ぬのも氣掛り併し程おく歸り升れば是も詮議の一ッの手がゝり(半)扨い夫なる中間は工を致す侫人の手先を働くやつゐらん(多)どふぞ首尾よく三次めがそいつを捕へてくれゝばいひガト爰へ下手より以前の女房雪洞を附け先へ立ち跡より三次汗を拭おがら出て來り舞臺を見やりて(三次)ヲヽ小守氏(半)コレト制す是にて心附き(三次)御二人樣是に御出でムり升したか(多)ヲヽ待兼た三次シテ先刻の樣子いどふじや(三次)且那口惜しい事を致し升た(半)ナニ口やしい事を致せしとは(三次)さつきあれから揚屋を殘らず尋ね升所か手掛りなくこいつァ外へ出掛さかと宿外れから沼津の方へ韋駄天走りゐ行道に一里塚の庚申堂松の根方に枝道を横に切たは奴の姿てつきりこいつ曲者と畔道傳ひに先へまわり待あみ掛さ其處へまんまと懸つた中間をねぢ伏せよふと思ひの外一寸先も見へ分かぬ黑煙立て五体すくみ立つ事ならぬ其内にいづれへ逃しか行衞知れず殘念ながら悄々と立歸り升てムり升ト是を聞皆々思入有て(半)スリヤ曲者を手に入れながら(多)五体のひゞれに取逃ぜしは(女)もしや此頃噂の有るト四人顔見合せ(半)ハテナト思入れ此時風の音になり上手障子の内へ猫の影寫る(女)アレート下手へ飛のく(半)ヤヽあの影は(三次)正しく怪猫トッカ〳〵と行き上段へふみ掛よふとする此時障子を明る中に以前のおさよの方の形にて立身(さよ)不禮ものめがト言捨てぴつしやりゞる是にて三次タヂ〳〵となり又行ゥけるを(半)コレト制すを木の頭皆々上手の障子の内へ目を附る此もよふよろしく幕

大詰　梵字嶽大瀧の場　小字邸駈附の場　奥御殿猫退治の場

一伊東左右太　一石部金之丞　一愛妾おさよの方
一老女長尾　一高木三平　實は猫の妖魔
一中老玉笹　一杣　六人　一御臺九重
一關傳六郎　一捕人　一愛妾おてるの方
一田上刑部　一小守半左衞門　一腰元　四人
一小守半之丞　一左右太女房おきく　竹本連中

本舞臺一面の平舞臺後ろ山幕上下岩組の張物日覆より松の釣り枝舞臺前に杉の梢を見せ都而梵字が嶽半覆の体爰に前幕の傳六郎野袴ふつさき羽織大小草履にて立掛り左右に杣四人手斧を持筒袖かるさん形りにて立掛り居る此見得山颪にて幕明く

(○)御侍さまをうしてわしらに御頼みとは(△)どんな御用で(四人)ムり升るト衙の入し合方に成り(傳六郎)頼のといふは余の義でない身共い當國嵯峨山の老臣涙嶋作左衞門といへる者じやゞ先頃よりして我が御主君怪しき病に腦を給ひ毎夜々半の丑滿時に發熱なしての御腦み合点行かずと存する故陰陽の博士を招ぎ占わせしに果して御城の乾に當る梵字ヶ嶽の大瀧にて邪法の行をなすものありとわらたな歌へゝ人知れず忍び參つて伺ひしに誠に不

思議の占方にて今宵も彼所で荒行あす怪しき奴ゞ罷り居れば直と其場へ立顯れ切つて捨んと存れど斯る叛反を企奴如何成手術あらんも知れずとあつて屋敷へ立歸り組子を引連れ參る内取逃すやも斗らねば其方共の手を借りて彼れめを討取り我主君の御病氣平愈が致させさし首尾よく致さゞ領主の御爲恩賞褒美を遣わす間一骨折つては呉まいか(○)成程浪嶋家よて御老臣の作左衛門樣は名代の御家老(△)忠義な御方といふ事は御領地に住む私共噂に聞て知つており升(□)其御方さまが御主人の御爲を思つてこつとらへ御煩み被成る御用故(又)命を的に働らいても御領主さまの御病氣を治して上げにやァ成りませぬ(傳)ヤヽ早速の承知忝ひ然らば早く手分をなし取逃さぬやう致してくりやれ(○)そこは木こりの私共△山の中では猪猿同前(□)樣子を知つており升から(又)ぬかつた事は致しませぬ(傳)先へ參つて取卷てきくりやれ(○)そんならみんな(四人)サァ出かけやうト山颪風にて四人ハ上手へ這入る跡見送つて傳六郎につこり思入あつて(傳)人望得さる重役の作左衛門の名前をかたりうま〳〵彼等を欺ひたれば是でこつちの目算通りドリャ左右太めを宏やくめつさそふかト上手へ行かける此時下手岩組の影より前幕の權平出て(權平)傳六郎さま烏渡お待下さりませトト前へ出る(傳)誰かと思へばそちや權平扨は夫にて忍んでおつさか(權)あなたに頼まれ三嶋から寶の短刀引ッ浚ひれ國へ逃て御約束の刀は當所の瀧の元へ埋てのめ〳〵又元の舗屋へ歸へつて居ませうと薄々樣子を探つて見れば此權平ゞ三嶋から居なく成つたを半左衛門が早くもけどつて國元迄有所を探す最中と聞てうつかり屋敷へも歸られぬ故半月程あるたの他出を樂ししみに影を隱してをりました首尾よくやつた御褒美を約束通り百兩金どうぞお渡し下さりませ(傳)ムウいかゐも百兩遣すから是へ參つて請取りやれ(權)何んざかあんまり御器用だゞ又のべ金じやァでぜへませんか(傳)察の通りのべ金だ(權)夫じやァこつちも仕樣があるのだ(傳)うぬ逃るとて逃そふかト切つてかゝる事よろしく立廻り權平上手へ逃て這入る傳六郎さつと成て(傳)彼れを逃さば露顯の大事跡追かけてそふだト上手へ這入る是にて山颪打あげ大薩摩に成り唄「夫一心梵聲の功力に依て惡念の五塵六欲切拂ふ清淨觀のある瀧に峯の紅葉の錦して空は時雨の神無月凍る肌重に白妙の行衣も薄く體霜を伊東左右太が荒行は勇〳〵敷も又殊勝成るト此留り瀧の音鈴の音お成り一面の山幕を切つて落す

本舞臺正面大瀧左右岩組の張物裾遠り中足の程の岩組の貳重上下杉林下手能所に梵字の瀧と記せし建石此脇に注連の張つてある杉の大樹都て梵字ヶ嶽大瀧の摸樣よろしく爰に四幕目の左右太髪を捌き白の鉢卷白地へ梵字を染さる浴衣にて腹へ荒繩を卷き手に鈴を持ち正面の瀧に掛り居る此見得瀧の音跳への鳴物にて道具納るト床の浮瑠璃に成り「咒文を唱へ鳴瀧の巖に趨り聲張上げ(左右太)忠臣無二乃小守氏無實の罪にて蟄居となり浪島大守妖猫の怪異によつて腦み玉ふを我神國に產れながらナド安閑と捨置ん嵯峨山鎭護の守り神瀧尾

明王の利驗に依り主君の御病氣平愈なさしめ恩人小守半左衛門の無實の汚名を雪ぎ玉へ奇妙頂來〳〵「寒さに聲も震われて果い命もあら行の樣子見すまし山樵共右と左りに顯れ出ト能き程に左右の杉林の影より以前の柳四人手斧を持出て來り(○)ヤア邪法の行にて御領主の(△)一家を騷がす謀反人(□)天下の爲めにこちとらが(☒)命を貰つさ(四人)覬念仕ろ「斧折振りて立懸るを不富ながらも剛氣の左右太扳つ潛りつ見をかわし大手を廣げきつとおしとめト此内左右太瀧を放れ四人を相手に一寸立廻りきつと成つて(左右)ヤア誠忠無二の此左右太を謀反人とは穢らわしい左言ふわいらが狼藉成り(四人)何を已れが「理非も情もあらひこ共又も無法に打掛るを左右太は漸く追散らし勞るゝ五躰にぱつと一ト息ト此内左右太勞れさるこなしにて立廻り皆々を上下へ追込でどふとなつて(左)何やつなれば斯まで我荒行を妨げなすか是も御家を覆さん惡人原の差圖ならん「折しも岩のあなたにてト此時上手の岩影にて(傳)其譯身共が申し聞さん「仕濟し顏ゐ惡々と立出る姿見返つてト上手の影より傳六郎出て來るを左右太は見て(左)思ひ掛ない傳六郎扨は汝が指圖よナ(傳)イヤ身共といふ譯でもない主家の世嗣を設けられしおさよ殿を棟梁に加担なしさる傳六郎奥方附の奴原は一人殘らず自滅させ浪島一家は手の内に握る望みの幸先に忠義立する已れから殺してやるかふ覺悟なせ「聞より左右太は聲あらゝげ(左)ヤア人外なり傳六郎先頃小守氏の推擧によつて浪島家へ仕官なしたる新參なれど已れは譜代の家來なるに何ある天魔が

魅入しか仮令御胤を舍すとも筋目賤しきおさよなぞよ加担なすとは見下さ奴此程々の荒行に身体勞れ弱くとも汝ゑ如きなまくら刄金やわか左右太の身に立ふや(傳)エヽ細言ぬかざずくさばつて仕まる「唯一打と切付るを鈴にてがつきと請留れどあわれ五躰も荒行の勞れに弱る武士が無念の不覺たち〳〵〳〵もろく命も消なんと風に燈火振り照らし昇る檢屋も厭ひなく近寄る女房は見て恟りトよろしく立廻りトゝ左右太よろめき倒ふと成る是を傳六郎足下に踏まへきつとなる此内能程橋掛りより四幕目のおきく褄からげ一本差洗ひ髮にて燈火を照らし出て來り(きく)ヤヽコリヤ何故に左右太どのを「こなたは見るよりあつぼに入り(傳)ヲヽ能所へ參りしよな劔道自慢の左右太ですら足下に踏まへ斯くの通り今某が切て捨るは安けれど抑も我君の御供にて鷹野の歸るさ其方の家へ參つた砌りより思を掛た傳六郎身共の心ゐ隨へば命を助し此上に榮曜榮花は心の儘何と隨ふ氣はないかお兄く返事はどうだ〳〵「猫撫聲の面ら憎くさ(きく)エヽ穢らわしい何故に已れの心ゑ隨ふぞ女ながらも軍學の家に產れし上からは夫の助太刀覺期しや「鯉口くつろげ立掛れば(傳)手向ひろけバ目の前にて左右太の命はたつた一突きト左右太を突にかゝる(きく)アヽコレめつたな事を(傳)然らば心に隨ふか(きく)サアそれは(傳)突き殺ろふか(きく)サア(傳)サア(兩人)サヤ〳〵〳〵(傳)返事はドヽどうだ「はつと斗りに當惑を聞居る左右太は聲振り立(左右)コヤ女房此程よりの荒行ゐ我れは身体勝れしゆへ人非人なるこやつめに不覺を取つて粗暴

かれ無惨の最期を遂るとも武運の末とあきらめれば必ず心を引れるお(きく)其お詞を聞く上は先トの敵を討たいで置ふか(傳)こしやくお事を「切てかゝるを身をかわしあしらふ透も荒手の女かゞふ夫トは甲斐なくもよろめく足の止度なく瀧の深見へ落入たりト立廻りトゞ左右太うしろの瀧壺へ落入る是れにて水の花立つ(きく)ヤヽコリヤ左右太どのが「心引かるゝうしろより切込む肩口紅ひの流るゝ血汐水勢も忽ち天地鳴動なし光りを放つ大樹の幹ト傳六郎おきくの肩口を一刀切るどろ〳〵に成り下手の杉の元へ光明を放す仕かけ兩人きつとなり(傳)ヤヽ血汐の穢に鳴動なし(きく)あれなる杉の大樹の元(傳)光を放すは刀の有所(きく)扨は尋ぬる短刀か(傳)邪魔な女めくたばりおらふ「爭ふ際に小影より伺ひ出櫂平が手早く刀掘出し逃んとなすを引戻し奪合ふはづみかたへある深みへ打込む時こそあれ山野に響く鐘の聲ト下手の杉の影よりいぜんの權平出て杉の元より誂への短刀を堀出し持て逃にかゝるを遣るまいといふ立廻りよろしくトゞ件の刀をうしろの瀧壺へ打込む此止り本釣鐘を打込ム(きく)あれぞ子の刻今宵の滿願(傳)何を○「二人を左右へ切倒し立寄るうしろの瀧壺より左右太は驪龍の勢ひにて昇るありさま見て恟りト此内傳六郎權平おきく切下げうしろへこなし此時いぜんの左右太件の短刀を口にくわへうしろの瀧壺より這上り傳六郎と立廻りきゝと見得傳六郎恟りなし(傳)ヤヽ死だと思つた伊東左右太又もしぶとく助つたな(左右)チヽ不動の利驗に滿願の時刻來つて蘇生なし不思議に手お入る此短刀最早

五躰は磐石なるは(傳)所を身共が切下くれんト兩人よろしく立廻り愛へ上下ゟ以前の山樵出て來り兩人を取卷ききつと見得(傳)能所へ四人のものこやつを討て手柄にせよ(○)イヽヤこなたにたまされて(△)すんでに馬鹿を見る所(□)樣子が知ればこなたが惡人(X)忠義な人へ加勢をするのだ(左)チヽ今ぞ邪正の分りし時節(傳)モウ此上ハト又立廻り柳四人は左右太に加勢して傳六郎を打倒す是にて傳六郎落入る左右太は傍へに倒れ居るおきくを抱起し(左)コリヤ女房御家の寶が手に入て是より妖魔を退治なし日頃の望みを叶へる時節そちも手疵を療治致せ(きく)スリヤ瀧壺へ打込しアノ短刀があなたのお手に(左)テヽまつ此如く手に入しぞ(きく)チエヽ忝ひ是といふのも明王の皆御利益に違ひあし深手と思ひし此疵も思ひの外なる淺手故日あらず本腹致し升(○)内義の手疵はこちどらが(△)内へ連れ行き手當をして(□)跡から御送り申升(X)必ず心配さつしやるナ(左)何分共にお願ひ申すわれは是より邸へ歸り事の次第を重役の田上氏へ迄屆けし上大恩受し小守氏の讒の罪を雪ぎ申さん(きく)跡うまわずと少しも早く(左)柳人よしなに頼み升るぞ「勇ミ進んでト床の送り山風よて左右太刀を持ちいつさんに向ふへ は入る柳とれきくを介抱する此摸樣道具廻る

本舞臺四幕目小守屋敷の道具に戻り床の送りにて道具止る

「急ぎ行く道の木茅も子の刻のうねて合闘はありながら成就の知らせあらざれば高木は一

人寝もやらず心離せく立出てゝ奥より高木三平出て來り(三平)今方打しあの鐘は伊東左右太が荒行の時刻も切れる九ッ時紛失なせし短刀の今に有所の知れざれば小守様には我君へ日延の願ひも是にて切れあすは無念の御切腹夫れに付けても嵯峨山の梵字ケ嶽へ立越し伊東夫婦は如何せしか明方迄はまだ二ヶ時コリヤこうしては居られぬわへ「身支度おして三平が立出る後に主人の聲ト三平枝折の方へ行此時上手の障子家臺の内にて(半左)三平殿何れへムる最早覺悟い致してムる(三)ナニ れ覺悟とナ「障子引明静つ〳〵と立出る半左衛門直ぐに弟が介錯の支度整ひしほ〳〵と衣服改め座に付けばト上手より前幕の半左衛門長髪のかつら無紋の上下九寸五分を三寶へ載せ持て出る跡より半之丞下緒襷にて刀を提げ附添て出て住ふ三平此体を見て(三)扨は上さり見分のお使者來らぬ其内に小守氏にはお覺悟よ(半)如何にも先頃三島にて刀紛失の其砌り切腹なさんと存ぜしも貴殿の異見に死を延わり一ト先國へ立歸り君の御所置を伺ひしに五十日の日延の御沙汰伊東左右太を初めとして其許までが心を碎き種々御詮索下されど今日の只今迄更に有所も知れざれば心静に切腹なし未練に數日を送りたる耻辱を雪がん我心休只此上の願ひには弟に力お添へ被下され我亡き跡にて詮議の義と又二ッには三島にて見届置きしおさよの方萬一變化の所爲なればお家の乱れ目の當り心を附て詮議の義をくれ〳〵お頼み申でムる「流石惜まぬ櫻木の散際清き覺悟なり(三)スリヤ夫故に其許には早お覺悟をなされしとか申も愚痴の至りながら抑三島

おて其許に死する命を助けられ未熟の武藝も長の年捨て居たをお目鏡にて見出しよ預るのみならず仕官の望み之有らば主家へ推擧致さんと御懇切あるお詞に望む所と御當家へお供致して行く〳〵は御家來分にも相成らんと頼む木蔭のそこもとが思ひよらざる事よりしてお身の落度の御大難是ぞ恩義の報じ時殿へ忠義の手初めにト心碎きし甲斐もなく紛失なせし短刀の行衛も知れず無惨にも今宵に迫るお覺悟とは誠に殘念至極でムる「今は我慢も荒くれし武士の泪ぞ誠なる半左衛門も目をしばたゝき(半)其御述懐去る事ねがら又某が身の薄命女々しき事じやがれ聞下れいかなればこそ我家は浪島譜代の忠臣とて父の代よりお覺目出度今年まで勤仕なしさる甲斐もなくお傍に侍人退々はびこりてより何となく殿の御前を遠ざけられ剩へさいつ頃お家に仇なす怪猫に一人の母を喰殺され又候夫等の祟りなるか君より預り奉るお家の寶を紛失させ無念の切腹仕るは弓矢を守る神々にも見放されたる武運の末死ぬとも先祖の靈前へ言わけ立たぬ半左衛門むざんに死ぬる殘念さ「怒る無念のはら〳〵泪傍に弟もかきくれて(半之)其御無念を請ついで日あらず致して紛失の刀を詮議仕り又さいつ頃母人のお命縮めし妖猫も頓て退治て兄上の亡き靈魂を慰め升れば冥府に於て拙者めの手柄をお待被下さり升せ「跡は泪に詞さへなく目を拂ふ三平が余る無念に死を止め(三)左は去りながら小守氏曉までは今二ヶ時仮令御身が死を延わり未期のお耻辱あるにもせよもし左右太より吉兆のお知らせあらんも計られず先づ〳〵切腹お待有て(半)イヤ

〳〵夫は未練の至り貴殿や弟へ我遺言殘せし上からは此世に長らへて益なき一命(三)ダハムらふが其所を何卒(半)最早覺悟は決してムる「三寶取て押頂き既にあわやと見へたる折しも(左)御最期暫らくお待下され(半)ヤヽあの聲は「見やるあなたの庭口より入來る左右太は荒行の姿改め樣先へ眞一文字に走せ附さりト向ふより以前左右太短刀を持出て來る皆々此体を見て(半)左ふいふ御身は伊東左右太(三)待てとお止なされしは(半之)よき手掛でもムつてか(左)いかゝも不動の冥助ゝより紛失なせし御家の寶斗らず手に入り眞ッこの通り(半)ナニ短刀が手に入たとか(左)とくお改め下さり升ふ「さし出す短刀手早くも鞘を拂ひて打あらため(半)紛ふ方なきお家の重寶(三)如何致して此品が(半之)はからずお手に入升たナ(左)されば今宵の滿願に仮令一命捨るともお家の寶二ッには主君の御病氣平愈なさしめ我大願を貫ぬかんと梵字ケ嶽の大瀧にて荒行致す其折から山樵共を語合ひてお家の佞臣關傳六郎我等夫婦を討んと謀り彼所へ忍び登り來て此程よりの荒行にて身体勞れし拙者と悔りおさよの方を棟梁に舍せしお胤を御世に立てお家を乘取る謀反の企て自が口から白狀なし既ゝ夫婦の一命も實に風前の燈火と覺悟極めし兩人が蘇生の思ひも滿願の時刻來つて斗らずも彼が隱せし短刀まで安々手ゝ入れ彼れめを仕止め大願成就の護摩札を田上氏より我君へ捧げる手續願わん爲めお宅へ立ゝより遲刻ながら當家へ申付參つてムる「有し次第を殘りなく語るを聞て人々も悅び合ぞ道理なりト此止り向ふより田上刑部石部金之丞出て來り直ぐに舞臺へ來て(田)小守氏にも悅ばれよ伊東左右太の効あらわれ君の御病氣平愈なしお家の寶戻りし上は御勘氣御免の御沙汰ゝて(石)伊東高木の兩士を連れ直ぐに登城を召さるゝ樣我君よりの火急の嚴命(半)夜中のお使者御苦勞千萬まづ〳〵お通り下さり升ゝ田)アイヤ猶豫成兼るい今宵の内ゝ妖猫を退治の手筈のお手配り(石)其俗生はおさよの方との御見込櫻御殿の八方ゝ(田)最早手當を致して厶る(半)整居の身となり今日まで差扣へたる詮議おがら夫で我々兼てより見込を附しおさよの方いつぞや三島本陣にて障子へ寫る變化の影確かに見屆け知る上は(半之)母が最期のためしといひ(左)扨ゝ又もや妖猫が乘移りしと覺へたり(田)早々御殿へはせ付られ(石)妖猫退治を致されよ(半)イヂヤ目にもの(皆々)見せてくれん「勇ましかりけるト皆々引張の見得ゝて道具廻る

本舞臺中足の二重正面上下共金張附の襖都て奥御殿櫻の間の体時斗の音ゝて道具止る

ト向ふにて(よび)おてる樣お入ト鳴物になりと手の襖を明け前幕の長尾出て能所へ出迎ふ是と一時ゝ向ふより愛妾おてるの方三寶へ護摩札を乘せ腰元五人菓子折雪洞を持出て來る(長)是は〳〵おてる樣ゝい斯る夜陰ゝ俄のお入主人ゝもお出迎ひを致す筈ゝはムり升れど今宵俄の病氣ゝて引籠り居り升れば老女長尾がお出迎ひ致すでムり升(てる)御臺樣の御名代にわざ〳〵御見舞ゝ參り升たはさよが俄の病氣故見舞てやれとの我君ゝの仰せ付け又是なるは我君の御病氣平愈を祈つたる瀧尾明王の御護摩札三七日の滿願ゝて今宵安々我君ゝ

は御病氣平愈を遊せばおさよ樣にも御腰胎の大事な御身にましませばよしなに取次頼み升(長)夫は〳〵勿体ない我君の思召何は格別まづ御通り被遊れ升ふト皆々舞臺へ來り(てる)シテ御病氣の御樣子は案事る程の事でもないか(長)心配を致す程の重体には厶升せ紛ど何を申も先刻より頭痛ゐなやみ枕も上らぬ樣子故介抱致して居り升(てる)其頭痛には護摩札を片時も早くおさよ樣の御枕元へさし上られ御飾りなされて下さり升せ(長)仰せの趣き取次升るで升り升ふト立ふとすゐ時奥より前幕の玉笹出て(玉)夫なる御札は其まゝに御持歸りを願ひ升(てる)スリヤ取次も待たずして最早御耳ゑ入升たか(玉)深夜におよび部屋〳〵も物靜なる奥御殿殊に主人は病氣にて痞が高ぶり居り升が私さへも御話しを承わらぬ其中に早くも聞取り失禮ながら御斷りを申上ろと申附られ升てム　升(てる)如何に御痞が高ぶるとて御臺樣の御仰せをば寢ながら聞ぬい(兩人)エゝ(てる)病氣と申ものは疎忽なものでムり升ナ(長)夫も主人が全快を致し升さ上御臺樣へ御詫致でムり升れば(玉)用捨なされて下さり升せ(てる)御守護札を嫌ふとはいよ〳〵以てまぎれもの(兩人)エゝ(てる)イエ事ゑ紛れて申する事も跡や先々頃東の旅路にて家の調寶紛失させ蟄居となりし半左衛門今宵計らず短刀の盜賊知れて蟄居を許し元の身分に立歸れば此趣をおさよ樣へ御傳へ被成て下さり升せ(長)私共もあの節か心痛めし紛失もの相知れ升れば此樣悦ばしい義はムり升せぬ(てる)夜も深更に及び升れば君の仰せの守護札も嫌ふとあれば是非もおしそんあら夫なる菓子折は心盡せし御見舞もの跡にて御披露願み升る(長)恐れ多ひ御見舞物主人へ披露仕り升(玉)主人の病氣に何事も失禮御免被下升ぜトおてるこし元附て向ふへは入る(長)玉笹どの事充分に仕負せしと思ひの外に空しくありもふ此御殿にうか〳〵と化負せてい居られ升せぬぞへ(玉)おさよの方と諸共に又巢を替へずはなり升まい(長)夫に付ても此菓子折好もしそふなこの此薫り(玉)幸ひ四邊に人いなし明て見よふじやムんせぬかト折の蓋を明る中よりさし金の鼠大分出る兩人是に心を奪われ本骸を顯わし鼠の狂ひよろしく爰へ鼠の四天の捕人四人出てかゝる此内長尾は後ろの襖へ消へ玉笹四人を相人お立廻りトゞ押付られる此摸樣ぞん〳〵にて道具廻る

本舞臺上段の間の道具前づら一面に御簾を下ろし爰に以前の長尾六人の捕人を相人に立廻りの見得にて道具止る

ト是より立廻り充分有て皆々手舁にして下手へは入ト跡正面の御簾を潛りおさよの方手負ゑて出て來り向ふへ行ふとする此時上手にて(九重)お家に仇なす妖魔の怪猫(てる)今こそ退散致させんト御臺九重先に以前のおてる薙刀を持其外こし元附て出來りおさよを取卷く(さよ)瀧尾明王の利驗にて我本体を顯わすとも恨みは殘る浪島一家へたゝりて惱ます我れこそは重藏寺又七郎どのに命を助かる手飼の猫主人の仇たる當家の大守只一ト噛と思ひし半左衛門にさまたげられ事ならざりし返報に小守の母の五体をかりまつた世繼を含した

るおさよの方の姿を借り十が九ッ當家の大守取殺さんと思ひしも降魔の利驗に寄り附かれず退散なすが口惜しいトきつとなる此時向ふにて(半)イヤ退散さす事暫くト聲をかけ半左衛門左右太三平りゝしき拵らへ跡より刑部金之丞半之丞付て出て來り(半)又七郎の敵なぞと君を恨むは心得違ひ彼が父たる又八郎よしなき謀反を企てし其罪忽ち我子に向ひ君の手に掛りしは自業自得と申もの(左)夫を却つて逆恨みに手飼の猫に言含め後家のお藤が相果しを守るは流石畜生道(三)お家へ仇なす已れこそ小守の老母を初めとして伊東の愛子我君の御愛妾を失ひしは(田)返ず〳〵も惜き奴(金)不動の利驗劔の威德(半之)本体すくむ上からは(半)伊東高木の手柄初め(左)イヤ我々が(三)退治てくれん(さよ)何をこしやくなトおさよ後の簾へ逃込む左右太三平追かけて這入るドロ〳〵になり御簾を切て落すと縫ぐるみの手負の大猫左右太三平と立まわりトヾ仕止る(半)是よてお家は(皆々)萬代不易(九重)ハヲ恐ろしき妖猫じやナアトこのもよふカケりにて引張りの見得にて幕

三世相縁本阿彌

序幕　向島信濃屋の場　三圍堤茶店の場

一牛ヶ瀬幸左衛門　一信濃屋半兵衛　一蝶右衛門女房お結
一桂川蝶右衛門　一虎石久馬　一信濃屋娘お半
一船岡幸之進　一白牛金太　一藝者小蝶
一針の宗兵衛　一牛ヶ瀬九郎藏　一同　小藤
一横山大之進　一中間可内　一茶屋女おしま
一若徒段助　一枝川砂利八　一同おせん
一船岡才次郎　一惡者　四人　一茶見世の娘おまつ

本舞臺四間通し中足の貳重本庇本椽附正面床の間違ひ棚襖の出這入上下建仁寺垣能所に櫻の木都て向島料理茶屋庭先の体貳重上手に大之進久馬着流しの侍にて住居下の方藝者貳人三味線を傍へ置き住居茶屋女貳人小皿へ肴を取分居る前に酒肴を並べあり平舞臺に金太九郎藏の角力肌ぬぎにて踊て居る此見得太鼓入り角力甚九の唄にて幕朋く

(大之進)兩人共に太義〳〵角力は弱いが座敷の執持は余程鍛練致したものじや(久馬)引分の水の代りに是へ參つて双方共酒を充分呑がよい(金太)水の代りに酒を呑とはこんな有難い事はない(九郎藏)大きなもので二三杯續け呑に致ませう(小蝶)角力甚九の踊り斗りは關

取り乘る限り升（小藤）ほんに甚九の家元丈けうまいもので厶り升（おしま）其評判の能所で澤山お上り被成いまし（おせん）お猪口がちいそうム𠮷升ならお茶碗に被成まし（金）イヤ茶碗よりも盃洗の丼がさんと這入（九郎藏）わしはそこにある大平の蓋を借りて頂かふ（大）其臆面のない所が却つて座敷の一興じや（久）爛の能いのを持て來て澤山呑せて遣つてくりや れ（茶女）ドレお酌を仕て上ませうト角力貳人大きな器にて酒を呑事宜しく（大）コレ〳〵亭主に是へ參る樣催促を仕て貰ひ度い（茶女）畏りましてム𠮷り升るト兩人與へ這入（久）扨藏前の花角力も晴天七日の興行に流石大關の牛ヶ瀬故六日の間勝通し明日が七日目にて兩大關の頽觸なるが相手の大關桂川も六日の間砂が付かねば是は見物でムらふわ（大）イヤ桂川でも隅田川でもあの牛ヶ瀬に掛つては所詮及ばぬ段違ひ取らぬ内から牛ヶ瀬に團扇が上つて居る樣じや（蝶）ア、もふしお客さまこちの内の娘さんが桂川關のおかみさんに成つてお出で、ムイ升から其樣な事を仰しやい升と御亭主が氣を揉み升（久）然らばあの桂川の女房といふは此内の娘か（金）ヘイお半ぼうの姉娘のお結といふが桂川の女房に成つて居り升から（九郎）爰の内でハ桂川を贔負にするに違ひない（大）然らばどちらも勝負なし分か預りに成るであらふト爰へ與より半兵衛羽織着流しにて出て來り（半兵衛）是は且那樣毎度御贔負に預りまして有難ふム𠮷り升（大）然らば貴公が此家の主じ半兵衛殿でムるよな（半）ヘイ信濃屋半兵衛めにム𠮷り升るどふか御見知り下さりませ（大）身共は稻葉の藩中にて横山大之進と申もの（久）身共は矢張同家中虎石久馬と申もの以後は見知つて貰ひ度（半）御叮嚀なる御挨拶恐入ましてム𠮷り升る（大）扨改めて此席へ貴公を呼んだは外でもないが當家の娘お半とやらはいまだいづれへ緣付るといふ緣邊迚も極りおらぬか夫から先へ承りたい（半）まだ是ぞといふ緣邊もムりませぬ（大）イヤ夫なれば丁度幸ひ何と物は相談じやが身共の屋敷の奥向へ御奉公に出す氣はないか（半）御屋敷の御奉公は願ふ所てム𠮷り升が我々風情の娘では及ばぬ事でム𠮷り升か（大）イヤ〳〵うこが相談じや貴公さへ承知なれば身共が娘の宿に成り支度萬端引受て稻葉候の奥向へ御奉公に上る時はきりやうと申身元と申言分の無き奉公盛り姫君の御意に叶ひ立身出世は瞬く内當入も仕合なれば緣ュ繋がる貴公迚身の幸ひを招ぐの道理何んと身共の詞に付き屋敷へ上る氣はないか（半）娘の出世に成る事を御心配下さり升るは有難い事でム𠮷り升が其御返事の成り兼升るは何を御隱し申しませうあれは不具でム𠮷り升る（大）何あの娘がかたわとな（半）如何なる報ひか存じませんが產れ落ると其儘に左りの拳を握りし儘最早十五に成升れど開らく事が出來ませぬ夫故是迚御醫者は勿論有るとあらゆる加持祈禱で氣を揉み升れど其甲斐なく產れながらのかたわもの十五といへどあの樣に形りが大きふム𠮷り升ので嫁の口もム𠮷り升れど緣付升る事もならぬ奥向きなどの御奉公は及ばぬ事でム𠮷り升る（大）承るは始めてじやが產れながらに左りの手を握りし儘に開らかぬとは不思議な事もあるものじや（久）實は片輪と申乃はあの美くしいきりやうでも夜分に成ると

首が伸油をなめに出るのかと思ひの外の其噺ぇ(金)夫は大方前の世にしわんぼうの報ひが來て握手に產れたのだらう(九郎)夫でなければ人をなぐつた祟りにて握りこぶしが開かぬのか(牛)親の慈悲にて内外の者にも口留を仕て世間へは知らぬ樣に致し升たが旦那樣の御詞を反き升るは其次第余義なく御咄し申升る(大)扨々夫は殘念な事じや然らば貴て是へ呼出し酌でも仕て貰ひ度が座敷へ出しては呉れまいう(牛)不具なる骸に御座敷へ兎に角いやがり升がどうか進めて只今の御禮に出すでムりませう(大)夫は千万忝ひまづ兎も角も持合せて貴公も一ぱい呑でくりやれ(牛)有難ふはムり升が不調法でムり升れば是にて御免蒙り升る(大)然らば娘をよこしてくりやれ(牛)承知致してムり升る左やうならいづれも樣御ゆるり御遊び下さりませト辭義をして奥へ這入(久)これぞ所謂玉に疵あの美くしい娘盛りで左りの拳が開かぬとい不思議な產れもあるものじや(金)左りの手位握つて居ても(九郎)女房に持て世帶の爲にいゝといふもの(藝者)其くせこちらのお半さんい御手い見事でムり升る(大)夫故亭主を説付て○イヤサ何んに致せ牛ヶ瀨が最ふ見へさうなものじやわへト是より鳴物お成り向より牛ヶ瀨幸左衞門羽織着流し一本ざし駒下駄にて出る跡より中間可内付て出て來り花道にて(可内)御且那が御待兼故御迎ひに出ましたがいと所で逢ました(牛ヶ瀨)其御待兼のない樣に野郎共を先へよこし客廻りを仕て居ましので大きに遲ふ成りました(可)ちつとも速く信半へ往つて上て下せへまし(牛)サア參りませうト舞臺へ來る此内奥より下女二人銚子を持出て來り下手を見て(茶女)御調取りが御出お成りました(金)且那さんの御持兼(九郎)早ふ座敷へムりませ(牛)是は且那樣大きに遲ふ成りました(大)ヲヽ牛ヶ瀨殿っておつた〳〵(久)サア〳〵こつち〳〵通つた〳〵ト牛ヶ瀨貳重へ住ふ(可)丁度吾妻橋でお目に掛り直ぐに御連申ました(大)太義であつと次ぎへ往つて一ぱい呑め(可)有難ムり升る(金)そんあらわしも次の間で(九郎)頂くと致しませう(久)イヤ其方達は爰に居やれ(金)イヤ調取が參りましては(九郎)わしらは御免を蒙り升(大)然らば隨意お致すがよい(可)ドレ体息を致しまやうト金太九郎藏可内貳重の下手へ這入る(牛)花の時分は向編も盛者衆が賑ぎしいのに能くこんな美くしいのが貳人り揃ておりました(蝶)イヤ賣れ殘りの私共故御氣の毒でムり升のに(藤)調取さんの御口前で却ッて痛入り升る(久)角力も强いが女にも程の能い幸左衞門是では最貧ゥ殖る筈じや(大)其評判の能所で身共が盃請てくりやれ(牛)早速の御盃頂き升でムりませうト酒を呑居る(大)肴の參る其間に牛ヶ瀨お内談あれば二人りの藝者もそち達も暫らく遠慮してくりやれ(藤)左やうなら私共は(牛)御遠慮を致しませうト女形四人奥へ這入(牛)女子達を遠ざけて御内談と仰しやり升はどんな御用でムり升る(大)イヤ其用は別義でおい身共の戀の縁ちじやヲ(牛)あなたの戀と申升るはト合方きつぱりと成り(大)驟てそちにも晰した通ア此大之進が其むかし言號をしたお花といへる同家中の娘ありしが乳母の粹と不義を致し密夫と共に情死を遂げ其後は定まる妻もなく十

五ヶ年がうの間獨身で居る身共じやゞ此家の娘お半といへるを此程ちらりと見請し所其音國元にて言號せし花といへる女に其身其儘なるが娘に仕ても能樣な年齢の相違なれば妻に呉れ共申難く親元に成り奥向へ御奉公に上て遣れば養女に呉れと掛合ば一人り娘の跡取り故他へ出る事は成らぬと申今も亭主が斷れどもそこはそちの働きあて身共の妻に致す樣媒ち仕ては呉れまいろ用と申は幸左衞門此一條が頼たいのじや(牛)何の御用と思ひましたら左樣な事でムり升か(久)唯今始て承つたゞ此家の娘のあのお半い産れ付ての片輪にて左のとぶしを握りし儘開ちく事ゞ出來ぬ故奉公抔は思ひも寄らずと親仁が斷り申せども左りの事の聞かぬ位はあの美くしいおさりやうはめんじて御不肖被成ると言われいばそこわこつちの働きふて横山氏へ表向き養女に上げて御家内ゑ被成るゝ樣に斗らひくりやれ(牛)折角の御頼ミながら外の事なら日頃から御贔負に成る且那の御頼決而否とは申ませんゞ此事斗りは御貳入さま御扱ひお出來ま世ぬから御諦め下さりませ(大)スリャ此頼は(兩人)聞れぬとか(牛)娘に仕てもよさそうな御年の違ふあのお半當人が不得心では無理にども言へませぬし又おまへ方も親仁から養女に貰つたその娘を御家内樣に被成れては世間の思はくお屋敷の御外聞にもかゝはりませう廣い世界に似た女い幾等も有るで厶りませうから外の女子に被成ませ(大)イヤ〳〵其世界廣しとい〳〵ど身共の妻に致す女い此家の娘お半の外い唯の一人りも無いといふ心に錠のおりさる上は年が違つておらふとも世間の手前があらふともそこに毛頭厭ひいなひ命を掛て執心せし娘の事故幸右衞門どふか情に執持くりやれ(牛)夫程に迄御頼なら成るか成らぬか亭主に逢ひわしゞ掛合ふて上げませう(久)イヤ流石は牛ヶ瀬幸右衞門能く承引を仕て呉れた然らば是へ亭主を呼び能く頼込んてあげるがよい(牛)イヤ〳〵無理を頼むに爰へ呼ぶのい不作法故わしの方から足を運び亭主に逢つて咄ませう(大)何さま夫も尤じや然らば身共い次の間で其掛合を聞くと致そう(牛)ろんなら向ふの口ぶりを襖の影で御聞下い(大)然らば牛ヶ瀬頼んだぞ(牛)ドリャ談判を仕て見ませうト唄ゐ成り三人連立奥へ這入る右の唄にて向より幸之進涙八やつし形り大小草履にて編笠を持出る跡より御絹角力の女房着流し駒下駄にて砂利八取出來着流ー尻はしより雪駄にて供をして出て來り花道にて(幸之進)花の頃とは申ながら日影ものなる我々の身には引かへ此賑ひどうか苦心を忘れた樣じや(おきぬ)御涙々のおつれ〳〵をなぐさめささの夫トの願ひ御迷惑でも今日は向ふに見ゆる信半まで御出被成て下さりませ(幸)怜や家來の段助い刀の詮義で他出なし徒然の所へ音信て透引呉れしは過分な事じや(きぬ)御客廻りを濟せまして夫トも跡から參る筈最今頃は角力の場所も打出ましたで厶りませう(幸)然らば案内致してくりやれ(さぬ)御先へ御出下さりませト三人舞臺へ來り奥よりおしゑ出て來りおきぬを見て(茶女)横網のおかみさん能く入らつしやりましゑ(きぬ)御客を御連申さからどこぞへ案内仕て下さい(茶女)大勢さまでムりませねば四疊半が明ており升からあれへ御連れ申ませう(きぬ)

夫でもどうか見膳つて御酒を先へ出して下さい(幸)イヤ〳〵酒は好ぬから無用に仕て貰ひ度い(砂利)イエ〳〵わしが名代お幾等でも呑升うらどうぞ呑せて下さりませ(きぬ)さうしてけふはとゝさんはお内にお出でムんすか(茶女)ハイお内でムイ升ゲ今方お客でお出にかつさ牛ケ瀬闘と差向ひで何かお内談でムり升(幸)其牛ケ瀬と申のは慣横山大之進が贔負に致す闘取じや(きぬ)誰れゲおつても四疊半の放れ座敷におり升ればお差合はムりませぬ(茶女)一寸片付て參り升れば暫らくお待下さりませト貳重の上手へ這入る是にて三人二重へ腰を掛ケ(幸)何所の座敷も客がいつぱい扨〳〵當家は繁昌じやト爰へ奥よりお半茶屋娘の拵らへにて出て來り(おはん)姉さんお出被成ましト辞義をなす(きぬ)どうやら濟まぬ顔付じやが氣合でも悪いのかいのふ(はん)どこも悪くはムんぜぬが氣に成る事が出來ました(幸)然らば是が噂に聞しお紺殿の妹きりしか(きぬ)不束者にムり升るコレ妹御挨拶のを仕たがよい(とん)且那樣お初にお目に掛り升るト幸之進おはんの顔を見て(幸)斯うも娘にきぬはん)ェヽ(幸)イヤサ此娘には始めてじやが身共は船岡幸之進と申桂川の厄介ものじや(はん)左樣ならあなさ樣が船岡樣でムり升か姉ェさんからお噂に承つてお り升ればお名は存じておりましたゲよふ入らつしやつて下さりました(きぬ)そうして氣に成る事ゲあるとは何を案事で居るのじや(はん)今とゝさんと牛ケ瀬さんの咄しを聞ており升ればわたしを養女におやしきへ遣つてくれとの御相談どうぞ姉ェさん私は何所へも行たふムんせねばとゝさんが遣るといつても斷りいふて下さりませ(きぬ)そりや頼まいでも知た事わさまゲ他家へ出て居れバそなたは爰の跡取り娘よもとゝさんが御承知を被成るゝ筈は有るまいからも必ず心配せぬがよい(幸)身共も世わある時分から悴の嫁に仕たい程我子に能く似たお半どの跡とり娘とあるからは養女に他家へ遣りはせまい(きぬ)左樣ならばお娘御に妹が能ふ似ており升るか(幸)是れには譯のある事じやゲ十五年前失のふさ娘にとんと生寫じやト爰へ上手より茶屋女おしま出て來り(茶女)あちらへお出下さりませ(きぬ)そんなら妹も御一所に(はん)れ附き申て參りませうト貳重より下る(幸)其物でしまで其身其儘ハテ能く似てゐるヒヘ(茶女)斯うお越し被成ませト流行唄きつぱりと成りおしま先に皆〳〵上手の建仁寺垣の影へ這入る右の唄にて向ふより才次郎段介兩人着流し大小草履浪人の拵へにて出て來り花道よて(才次郎)刀の詮議の心當りは大之進と久馬の兩人他出を待つておつたる所今日藏前の角力場より此向島へ花見に參りあれなる茶屋へ上りおるとそちが見届け歸りし故客と相成り別間に於て樣子を探る心なるが浪々中の困窮に拂ひの所が苦勞じやわへ(段助)ィエ拙者が夜なべの内職に揚枝を削つて賣りましさ塵も積れば山吹の金子にかへて南鐐二ッ爰に持ており升ればその御心配には及びませぬ(才)承れば桂川の家内の里が信半なれバ夫と知れては面目ない知れぬ樣に致したい(段)イエモウけふ日は信半も花の盛りで闘しく多くの客があがる茶屋名乗りさへ致さねば知れそわけはムりませぬ(才)然らば拂ひは

宜しいかな(段)大丈夫でムり升る○ト兩人舞臺へ來り奥へ向ひ(段)賴まふ〳〵ト呼ぶ奥よりおせん出て來り(せん)どなた樣でムり升る(殷)是まお出の若旦那が御膳を上るとゆしやれば座敷へ案内致してくりやれ(せん)おあいに〻樣でムり升が御覽の通りお座敷が皆ふさがつており升ればお斷りを申升る(段)イヤ〳〵座敷がふさがりおるなら床几の上でもよろしいからどうか御膳を出してくりやれト爰へいぜんの大之進久馬出て來り(大)珍らしやオ次郎どの絶へて久しき此面會(久)先づ〳〵是へお上り被成い(段)惡るい所へト言ふを冠せて(才)アコレト押へ(才)どなさかと存じましたら御同家中の御兩所樣其後はお目に掛りませぬ(せん)左樣なればれ二人さまはお連れさまでムり升るか(大)イヤ連ではないが以前の好しみ是で同席致そうから肴を出してやつてくりやれ(せん)畏りましさト奥へ這入る(才)イエ我れ〳〵は浮滄の身分御同席は御免を蒙り別間へ參りませう(大)ア、是れ〳〵夫はいらぬ遠慮じや世に時めきし我れ〳〵の遊山の茶屋へ來たられしは犬も歩行けば棒とやらいわばそちらのお仕合せ拂ひはこちらで致すから御心配なく是れへムれ(段)イエ〳〵夫れには及びませんサア若旦那參りませうト才次郎を連れて行くを久馬留めて(久)コリヤ〳〵段介どうしたものじや横山氏があの樣に打解て仰せあるを御遠慮申は却つて失禮そちも馳走に成るがよい(段)イエ〳〵若旦那も拙者めも左樣致してはおられませぬ(大)手間は取らせぬ才次郎どのサア〳〵こつちへお上り被成れい(才)イヤ〳〵どうか別席を(久)ハテ扨いらぬ遠慮じやと兩人を無理ゐ引上る(大)コリヤ〳〵みんないづれにおる是へ參つて相手をせぬかト呼ぶ是にて奥よりいぜんの小蝶小藤出る下手より金太九郎藏可内出て來り(蝶)顔を直して居りまして(藤)大きに失禮致しましさ(金)斯う充分に醉て仕まへば師匠が居樣ゥ誰れゲ居樣が恐れる所はちつともない(九郎)一番大陽氣にかつぽれでもやりまして天井拔に騒ぎ升べい(可)見れはどなたか今の間にお連れが殖てムり升ナ(大)是は以前國元で同落の悖じやが今は身共の罰が當り扶持放されに成られしお方丁度折能く我れ〳〵が遊山の場所へ見へし故昔の好しみ同席させ一献呑せて進ぜるのじや其方達も相手をしていくら呑んでも腹の痛まぬ酒を呑せてお上げ申せ(金)あなたの罰で浪人仕た御同家中の息子さんに御馳走をしてお上げ被成とは奥齒に物の狹まつた仰しやり方でムり升(久)イヤそち達は昔の事を存ぬ故に不審も尤も横山氏ゲ御幼少より言號をした娘があつて彌よ〳〵夫れが年頃に成り婚姻をする際に至り娘が不義を働いて緣組破談と相成つた不取締りの罰ゲ當り一家一門浪人して扶持放されと成られたのじや(九郎)夫では遺恨のあるものに仇を恩にて返すといふ被成方でムり升るがわし共おらそんなものに酢ひ酒いつぽいでも呑せて遣る氣はムません(大)イヤそこを遺恨に思はぬが罪を憎んで人を憎まぬ寛仁大度の身共の了簡理り成る蔵夫故に是なる御仁の御親父が殿より預る大切の寶を賊に奪はれしが紛失させた科に依り追放の身に成られたのじや(可)成程匹夫の了簡とれ身分のあるお方の氣とは斯うも違つて居

るものか意趣も遺恨も隅田川の川へ流してお酒盛りとい恐れ入りましてト此内才次郎段介悔しきこなしにて(段)若且那お歸り被成れ升せ(才)如何にも〻様な席まはおられぬ出直して參らふわへト立ふとするを(大)コレ〳〵何れへムるのじや馳走を致して進ぜるを挨拶もなく立ふとは扨〳〵失禮千万じや(才)貴殿の罰にて浪人せし我〳〵れ共故れ鬱憂しに預り升るも何とやら心苦しく存ずれば(段)以前の好しみに折角の思召ではムり升るゞ少〳〵心もせき升れば是にて御免を蒙り升る(久)然らば唯今申た事がお氣にさわて御立腹か最早何も申まいから遊山の場所で直の知れぬ酒でも呑んで歸らつしやい(才)イヤどうあつても此席に(段)おらざる方がこちの勝手(兩人)いづれも御免下さひト二重より下りる(大)ソレ兩人引留めろ(金、九郎)ハイ〳〵ト兩人をとらへて(金)エヽ去りとは野暮ナ(兩人)浪人ものだ(才)ヤア馳走に成らぬと申のを(段)手込めになさば許さぬぞ(可)エヽこんなわからぬ浪人なら酒より川へほふり込み水でも呑せて遣るがよからふ(久)何よさは是は三ッ子に逃瀬こちらで差圖は致さぬから何も一興勝手に致せ(金)其おゆるしの出るからもあすの勝負の前祝ひ(九郎)力試しよ投込んで川の水でも呑せて遣らう(段)モシ若且那拙者めが跡の所ゑ引受升ればあなたはお早くお逃げ被成い(才)イヤ〳〵何んでそち一人是へ置て參られんや手込なさば此方らとて用捨致して置かれんや(金)エヽしやらくせへ青二才め(九郎)河岸迄一所にあゆびやがれト金太九郎藏は才次郎を引立向ふへ這入る段介是をさゝへるを可内うしろより抱留る大之進久馬は是を見て酒を呑み居る藝者二人は氣を揉み居る能程に向ふ揚幕の内にて(金、九郎)エヽ痛へ〳〵免るして下せへ〳〵(桂川)取るにも足られへがちやばへめらおれと一所に失しやがれト藝者二人向ふを見て(蝶)ナモ能所へ桂川の關取さんが見へたわいなァ(大)何桂川が參つゝとナ(可)こいつは風が替わつて來たト恟りして手を放すを一寸立廻り(段)最ふ是からは〇ト可内を投退け(段)千人力だト是より賑やかな出の鳴物に成り向ふより桂川着流し壹本差駒下駄にて金太九郎藏を捻上げ出る跡より才次郎桂川の羽織を肩へ掛け出て來り花道にて留る段介此体を見て(段)關取どうぞ其二人は次手ゐ川へ投込で水を呑せて遣つて下さい(兩人)イヤ〳〵夫は御免〳〵(桂)何か様子は知らぬ共見受ぬ貳人りの野郎共犬猫同様川の中へ浚ひ込のは雑作もねへが酒ゐ呑れたやち馬い剣た奴でも牛ケ瀬を師匠と頼むぢくつぶし次第を聞た其上でひつばたくから覺悟しろ(大)まづ〳〵夫で兩人の水を呑のは退れたか(久)何に致せ邪魔な奴が惡い所へ來たものじや(才)桂川どのこなたの羽織はわしが拾て持て居升ぞ(桂)サア若且那ムりませト右の鳴物ゐて舞臺へ來る(蝶)どう成る事と案事ましたに(藤)是で安心致しました(桂)客は誰れだと思つたら牛ケ瀬關お贔負の稲葉の邸の侍ひ衆どういふ譯でこいつらにわしがお世話を仕て居升才次郎さんを手込にさせたか夫から聞かせて下せへまし(金)ちつとも早く桂川關(九郎)捻あげゝ手をゆるめて下さい(桂)エヽいくぢのない蚊情奴めゞト兩人を投退ける是にて兩人は手

のしびれるとなし大之進思入あつて(大)コリャ桂川麁相を致すあそちが世話を致し居るかそこの所は存ぜぬが浪人才次郎が今日身共の遊山の茶屋へ折能く參り合せし故以前同じ藩中のよしみを以て座敷へ呼び入れ馳走致してやろふと申も却つて不禮と立腹なし惡口致して歸るのを見るゐ見兼て兩人が手込になさんと致せしをそちが來合せ牛ケ瀬の弟子を打擲致してはちと筋道が違ふてあらふぞ(桂)イヤ筋違か知りませぬが惡口を仕て歸れば迎手ゐためにせぬ共い丶事を浪人しても待ひの祿を穢せし者且那を角力取の分際で手込のゐ仕ちやァ濟升めへ夫をだまつて見てムるは乱暴仕ろと言付て見物被成る御侍言分あるなら桂川が相手に成つて上升ゐら劔の舞でも十二座でも外道の面ラの面いらず爰でどたばた遣らつせへ(久)ヤァこいつが〳〵憎つくは奴言はせて置ば能いかと思ひ横山氏や某を外道なぞい奇怪千万今一言申て見よ其ぶんには致さぬぞ(桂)ヲ丶閑度くば言つて聞かそうして並だ所は十二座へ出る外道とひよつとこ面にある顏色故口から出たのが惡いから切るとも突く共勝手にしろ此桂川の兩腕にやァ骨があるから切らるめへ(大)やァ遊山の場所と心得て勘辯致せばつけあがり人も無げなる其雜言最早了簡相成らぬ切捨るから覺期致せ(桂)ヲ丶面白い切られ樣言ば野郎の刀掛け其でくのぼうに切られりやァ此の桂川も本望だ腕から成りと脚からなりと勝手に切るゐら切て見ろ(久)トヲ其義ゐら横山氏切捨て御仕舞被成い(大)畳入りで切のも惜しいもの然らば御身も御一所でムれば手前も强身イヤヲ積りの知れたば〳〵ねんじん切るのはいとより安き事(大)先雜言をぬかしたる其類術ゐら切り下げくれん(桂)サア〳〵早く切つて見ぬか(久)唯今切るから待ておれト下け緒を取つて襷にかけ(兩人)うぬ斯う致してト刀を抜き切つて掛る是より跳の鳴物になり桂川兩人を相手に宜しく立廻り刀を打落し兩人を引付る歇役三人此体を見て(三人)といつはけんのんト三人貳重の下手へ逃て這入る藝者貳人おせんも恠り仕て奥へ逃込む桂川は兩人を引付ながら(桂)サア早くおれを切らぬか(兩人)命ヲ引りは御助〳〵ト震へて居る桂川兩人の刀を取つて(桂)御尋ね被成る刀とは若しや是ではムりませぬかト才次郎に見せる(桂)イヤ〳〵尋ぬる刀といふはもつと短い短刀じや(桂)夫でい貳入りの差添を〇ト兩人の差添を抜取り(桂)是を改め御覽被成ませトオ次郎の前へ出て才次郎段介件んの差添を見て(才)父から聞し短刀とは(段)似ても似付かぬおまくらもの(桂)イヤ是が誠のなまくらぶし豆腐におとつた二本ざしめがト兩人を打すへて突放す兩人漸く起上り(大)エ丶此敗北を存じおろうに幸左衛門めどう致ーたか(久)皆逃るとは不實な奴じやドリヤ牛ケ瀬を呼んで參らうと腰を押へて立掛る此時襖を明け以前の牛ケ瀬出て來り(牛)イヤ御迎ひには及びません委細はうしろで聞て居ましゝ(大)聞ておつさらなせ爰へ早く出てくれぬのじや(牛)ハテ先ンから頼むと仰しやりやァ此お聟辱は取らせませんが見事に切ると仰しやるからどんな立派な御手並かとあれから拜見致しましたがあんまりいくぢかムりません(大)さう言れてい面目ないがどうか聟辱を(兩人)雪

いでくりやれト牛ヶ瀬思人あつて(牛)コリヤ桂川能くもおれが大事の客をわりやア手込めに仕おつたナ(桂)そりやァそんたが言わぬへでもれれの方から言ひ草身に引受て世話をする客を手込めにすれバ是れで出入は五分と五分此の上遺恨をふくむなら跡へは引かぬ桂川横に車の牛ヶ瀬どん翌日の土俵の立合より爰で勝負の腕倒しお行司なしの取組を命限りに遣らふから分けや預り物言の付かぬ覺期で向ひ被成へ(牛)成程安い角力なら爰で命の遣り取りに勝負を付て仕舞はふが七日の角力を六日迄砂を掴まぬ闘と闘あすの勝負の顔鯛れを世間で待て居樣から夫を仕舞はぬ其内は安く勝負も付けちめへ意趣も遺恨も土俵の上夫まで預て置ふから此の牛々瀬に投ゲ付けられみじんに成らぬ用心して神佛でも祈つて居ろ(桂)そんなら見事土俵の上でおしたい遺恨を返すか氣か(牛)夫りやァ言はぬへでも知れた事だ(桂)流石東の大關丈命を麁末に仕ねへのは角力冥利て慨心だ(大)桂川めが才次郎の腰押致すと知れて見れば縁に繋がる此茶屋お浮ゲ〳〵呑んでも居られまい(久)兎角君子は危きに近寄らぬといふ本文あれば(牛)こんな所に居樣より是からさつぱり氣をかへて外の茶畳にて呑直し笑ふてお歸り被成ませ(大)シテ失刻の挨拶はどうであつたか聞かせてくりやれ(久)此始末では充分に掛合とても届くまいナ(牛)お察し通り掛合もまだ届かずにおり升が翌日の勝負を付げるまでわしにお預け下せへまし(大)然らばそちゃ何事も任かせて今宵は立歸らふ(久)歸るにしても可内や貳人りの供は如何致したかト爰へ下手より金太九郎藏

可内出て(金)是ゑ扣へて(三人)おり升る(牛)且那方のお歸りだお腰の物や御膳中にせいうのない樣に見て上げろ(兩人)ァイ〳〵承知しまたト乱れ相にある羽織と懐中物ゑど持て來り大之進久馬に着せる事宜しく奥より以前の下女二人出て來り是れはお客樣最ふお立でム升るか(大)藝者の祝儀も今日の拂ひも借りて參るから亭主へ左樣申てくりやれ(牛)ィヤ〳〵夫では且那方や此の牛ヶ瀬の顔にかゝわる○ト懐中より金を出して(牛)今日の拂ひは幾等だか五兩あるから持て行き御主人へ渡して下せへトおせん金を請取(茶女)嘘今御掛定を承つて參り升れば暫らくゑ待ち下さり升せ(金)殘りの看を持て行くから次手に拆を十ヤ斗り(牛)ヤヽ下素ばつた事をいやァがるナ(茶女)ィエ〳〵どふかお持下さりませト女兩人奥へ這入る(大)客が歸ると申のに藝者共は如何せしが寄付かぬとは不禮ゑ奴じや(久)夫故拂を借りて參ると横山氏が言はれしゑ立替へ呉れしは氣の毒千万(牛)ェイ立替た金といふも客から花に貰ふた金御心配にやァ及びませんト爰へ奥より信平盆へ拂の書付と釣りを乗せて持ち出て(牛)最ふお立にムり升るか竟立込んで居りまして御麁末を申上ました(牛)御亭主さつきの一條は何分共に頼みました(牛)ィエ當人さへ承知なれば早速御返事致します(大)シテ今日の勘定は何程成るか聞かせてくりやれ(牛)藝者の玉を入れまして三兩三歩に相成升れば丁度御釣りが壹兩壹歩毎度有難ふムり升(牛)釣りはいゝから藝者の祝儀と殘りは内へ取つて下せへ(牛)ィァ藝者の祝儀は遣わしませうが除の祝儀は御無用に(牛)ハヲ

不足であらふが取つて下せへ(大)然らば牛ヶ瀬(久)サヽ参りませうト流行唄に成り大之進久馬金太丸郎藏可内牛ヶ瀬向ふへ這入る信半捨ぜりふにて目送り(半)ヤレ〳〵是で一ト安心どんな間違に成らふかとわしも大きな心配した(桂)どんだはめにて員殿こつちの内を騒がせて御氣の毒でムりましさ(半)何の〳〵あの樣な御客はこちらの厄病神祝儀も出さずよ藝者をあげ料理も喰ずにあバれ散らし其上内の跡取りを養女に貰れと無理な强談こあさの影で漸々と惡魔拂ひを仕ましさわへ(才)此座敷にて出合ふとも思わぬ故にあの貳人がこちらへ來さを突留て別の座敷へ入込で樣子を聞ふと思ひしも(段)却つて向ふに見付られ刀の詮義いそつちのけ耻辱を受る所をば桂川關の御影にて無難ト退れてムり升る(桂)わしも多分いそんな事と氣が付た故惡口して喧嘩仕かけて貳人りの刀シ扳て若且那に目利をおさせ申さが彼の短刀でもない御樣子(段)さうして見ると國元で爾一女字の紛失も(才)あいらの業ではないと見へ升ゝ爰へ以前のお指お半出て來り(きぬ)こちの人待て居ました(はん)兄さん能く來て下さりました(半)いつの間にやらお結にも内の座敷へ來ていたか(桂)シテ大且那幸之進樣を御誘引申て來てくれたか(才)何父上が此内へ(段)御出ま成つており升とかぬ)先刻御連れ申て離座敷の四疊半で一ト口あげておりましたが此場の樣子を御存じにて浪人の身でありながら茶屋小屋這入りを致すとい以ての外の悪じやと御立腹を被成れましたを御詫致して皆さんの御迎ひに參りました(はん)どうぞ兄イさんあたから且那樣へ御詫をして若且那樣や御家來の惡い心でない事を申あげて下さんせ(半)成程御堅ひ御氣質では驕奢ゐ更けり若且那が茶屋小屋這入り被成るゝかと御立腹でムりませうが(才)是も刀を詮義の爲(段)御目に掛つて申譯を致したならば分りませう(桂)大且那樣に御目に掛りわしが機嫌を直しませう(きぬ)そんなふみんあも(皆々)御一所ヨト流行唄さつぱりと成り皆々上手へ這入右の唄にて此道具廻る

本舞臺うしろ黑幕常足の貳重草土手の蹴込眞中菱簀張の出茶屋上手土手の後ろより石の鳥居の笠木を見せ下の方櫻の立木都而三圍堤茶見世の体爰に以前の大之進久馬牛ヶ瀬金太丸郎藏可内茶見世へ腰を掛茶見世の娘茶を出し居る此見得波の音流行唄にて此道具留る

(牛)晝と違つて夜に入ては花の詠めも又格別今が盛りと見へ升わ(大)花と申せば其方に立替させた茶屋の拂ひ是をそちらへ納めくりやれト金を出して渡ず(牛)イエどうでも宜しうムり升が御貰ひ申て置きませう(久)滿座乃中にて桂川めに耻辱を受けし返報に明日こそは土俵の上にて砂へ埋めて貰ひ度い(牛)勝負は時のはつみなれどこんたんを仕て掛り升れば負る氣遣ひはムりませんから御安心被成ませ(金)夫に付ても合点の行かぬは桂川めが且那方の御腰の物を扳放し(九郎)青二才めに改めさせ(可)且那方がいゝ刀でも差てゐ居ぬかと夫であんな眞似を仕たのか知らん(大)夫ゞ船岡幸之進が紛失させた短刀を若し差していも居らぬうと疑ひおりしと相見へる(久)身に覺へ無き身共を疑ひ居るとは憎つくい奴ッじ

や(牛)夫ゝ付て且那方に御聞申度事があれバ供の貳人りと可内殿は先へ歸して下さりませ
(大)然らば供の三人は吾妻橋の船宿へ先へ參つて待て居やれ(三人)ヘイ畏りましたト浪の
音に成り三人上手へ這入る(茶屋娘)御茶は如何でムり升ト是れにて牛ヶ瀬茶代を出して
(牛)茶は跡で勝手に呑むゞ茶代を一分先へ遣るから爰の見世を貸切におめへはどこぞへ遊
んで來被成へ(娘)夫は澤山に難有ムり升(大)百疋ならば此見世を貸切に仕ても能からムナ
(娘)能所ではムりませぬおさし合に成り升なら御稻荷さまへ今の内參つて來たふムり升
(牛)氣の利たやつたさうしてくれ(娘)おゆるり御咄し被成ませト上手へ這入(大)シテ供の
者を先へ歸し身共に聞たい事ゞあるとは(久)いか成る仔細か言ふが能い(牛)外の事じやア
ムりませんが菊一文字の短刀を十五年跡ゝ御國元で盗んだ御方は御貳人りに違ひはねへと
見拔ました(大)どうして夫を其方が(久)見拔ておると申のだト誂への合方ゝ成り(牛)題を
言はねば譯りませんがゝしも以前は牛方の嘉藏といつたならずもの夫から夫と行當りばつ
たと共に草枕寢て居る所へ侍ひの爭ふ聲も夢現うめへ仕事を菊一文字といつァ退せぬ代居
物と透きを見すまし引浚ひ江戸へ出て來て角力と成り惡い心も改めて是迄出世を仕ました
が聞ばものした短刀は稻葉の邸の紛失もの本の實の持腐れで内へ仕舞つて有り升が今日の
樣子を久馬樣があの時出合た侍だと漸く思ひ當りました(大)扨は先年國元の邸で密かに盗
せた刀は其夜横取され行衛知れずと尋ねしが(久)あの折り出合た曲ものは牛ヶ瀬そちでゞ

つたるか(牛)わしも夜目故あの時に出合ッたゞ人があなたとは心付ずにおりました(大)横
取りせしとは言ふものゝ此方迚も盗みもの只取上る譯にも行まい然は身共が其刀い五十兩
に買取るから互ひの惡事は此場切り決而他言はせぬがよい(牛)イヱさうしてさへ下されば
此牛ヶ瀬も大仕合惡事は他言致しませぬ(久)求めゝ上に我々が詮議仕出した積りにて夫と
主人へ差上なば立身出世は目のあたり(大)夫ゝ付ても幸之進親子の者を活け置ては枕を高
く寢られねば(久)迚もの事に幸左衛門今宵の歸りを待伏なしばらす工風はあるまいか(牛)
夫は今夜に限らぬ事其内こんたん致しませうト爰へ茶見世のうしろより針の宗兵衛どてら
三尺帶にて出て(宗兵衛)其仕事ならわつち共が御褒美次第で請込ませうト三人惚りなし
(大)いつの間にやら後にて(久)今の咄しを聞れしろ(宗)そこは惡事に拔目のねへわつち共
でごぜへ升から土手の茶見世で且那方が邪广を拂つた内證咄し仕事の種にも成らふかと後
の土手から這上り樣子を聞て居ま　たが歸りを待てバらすといふそんな仕事は闕取や御身
分のある且那方は後日を案事て出來升めへどうか仕事は宗兵衛に請込ませておくんなせへ
(牛)誰れかと思やァ針の宗兵衛口留金を遣らふから今夜の咄しは默つて居ろ(大)さうして
彼れは何ものだ(牛)コリャァ毎日角力場へ遊びに參る此の邊ゝの道樂者でムり升(久)口留金
を遣すなら彼れに仕事を請込ませ首尾よく參れば相當の褒美を遣つてはどうであらう(宗)
そりやァ褒美次第でわつちの仲間をかたらつて一人や二人ばらすのは何の雜作もムりま

せん(牛)併し今夜は桂川が一所に連立て歸るから手前達ではばらせぬへ(宗)それなら今夜桂川も此近所へ來ており升か(大)信半方へ桂川と浪人者の主從が參つて居るのをばらすのじや(宗)ろういふ譯なら日頃から知つた中故口車で手强い桂川は跡へ殘して泊り込ませ寢込をぐつさり遣り升せう(久)イヤさううまく參ればよいが(牛)宗兵衛一寸耳を借せ(宗)ハイ〳〵ト呟く事あつて(牛)斯ういふ手はづに仕ちやァどうだ(宗)成程そいつァいゝ工風だ(大)旨い工風が(兩人)付たか〳〵(牛)斯ういふ工風にト大之進久馬に呟く(兩人)イヤ適れ妙計ト大きくいふを(牛)アコレ○ト押へるを道具替りの知らせ(牛)靜かに被成ト皆な〳〵邊りへこなし波の音よて道具廻る

本舞臺以前の道具爰に燭臺を照らし桂川おきぬおはん住ひ酒肴を取散らしおしな酌を仕て居る端唄の合方にて道具留る

(桂)コレ〳〵女中わしの方はどうでもいゝから離れ座敷の御客の方へ御酒を澤山上げて下さい(しま)イエ〳〵あちらの御客さまは御酒は澤山じやと仰しやいまして御飯を召上つて御出故へおせんどんがお給仕に御附申しており升る(きぬ)ほんに内端のわたし達まで厄介に成りましてはおまへ方へ御氣の毒で(はん)イエ〳〵姉エさん其樣な他人行儀を仰しやらずと御ゆるりと去て下さんせ兄イさん内端同士でゆつくりと遊ぶが能をとゝさんが悅んで居升わいなァ(桂)書の内い客が立込みどこの座敷もいつぱいだが夜るお成つさらひつそり

と大風の吹た跡の樣だ(きぬ)夫ではこちらも更けぬ内早く歸ると仕ませうか(はん)アレ姉エさん遲く成つたら泊つて往つて下さんせわたしや斯うして兄イさんや姉エさんと一所に居るのが何より嬉しうムり升(桂)イヤ幾等遲く成てもわしが一所に歸るのに案事る事があるものかト酒を呑居る爰へ奥より半兵衛出て來り(半)コレ〳〵桂川關案事る事が出來ました(桂)案事る事とは舅殿どんな事が出來ました(半)こなたも不斷近付の針の宗兵衛が帳場へ來てわしに知らせて呉れたには今三圍の土手を通ると二人り連の侍ひが今夜こつちの内へ忍び娘のおはんを浚つて行ふと密談を仕て居たとの事唯さへ此頃物騷にて押込などが諸方へ這入り盜みをすると聞て居れば案事られて成りません(桂)夫ではさつきの侍ひが耻辱を取つたを遺恨に思ひ妹を無理に連行ふと乱暴を仕にうせるとか(きぬ)そういふ咄しを聞ましては猶更由斷が成りませぬ(はん)どうぞ姉さん兄さんも今宵い泊つて下さりませ(半)ならふ事なら夫婦して今夜泊つて下されば夫こそこちらは安心じや(桂)うんならお緒もおれと一所に今夜は爰へ泊るがいゝ(きぬ)夫では内で案じませうから御はへ泊て上げなさんせわたしや壹人で戻りませう(はん)イエ〳〵夫では御歸りの途中がやつぱり案事られ升ト爰へ上手より幸之進才次郎段介出て來り(幸)思ひ寄らざる馳走に成り大めいていを致し申た(桂)是は旦那樣御搆ひ申も致しませず大きに失禮致しました(才)父上斗りか拙者まで浪々中薮氣を晴らす(段)何んと御禮を申ませうか難有事でムり升る(きぬ)丁度幸ひ皆さんと

御一所に歸りませう(桂)成程是は能お連れだ(幸)然らば夫婦と同道にて直ぐに歸宅と致うふか(半)イヱ〳〵少々用事がムりまして桂川關は私方へ今夜泊つて貰ひ丹をば御厄介でも女房而已を御連れ被成れて下さりませ(幸)夫は最より安い事是は御亭主今日はいかい馳走になりました(きぬ)憚りながらおしまどんわさしの供を呼んで下さいゝ此時下手より以前の砂利八貨提灯と折りを提出て來り(砂利)最う御歸りでムり升り御待申ておりました(はん)そんなら姉さん途中をば氣を付て下さりませ(才)然らば是にて桂川殿(段)御別申でムり升る(半)夫では皆さん御機嫌よふ(幸)手厚い饗應過分でムつたト唄に成り砂利八先に幸之進才次郎おきぬ段介向ふへ這入(はん)はんにァゝいふ御侍樣が姉さんと御一所では安心でムんすわいなァ(半)どうか是から桂川關ゆつくり呑で下さいまし(桂)イヤ〳〵酒はもふ充分勝手でムるが舅殿休ませて下さりませ(半)成程場所の有る内は御勞れでムらふから心任せに被成るがよい是々おしまや仕舞つてある客夜具を出してくれ(しま)ハイ〳〵畏りましたト兩人は入る(はん)さふして宵は兄イさんにはどこへ御休みでムり升る(半)わしが帳場に寢て居ればやつぱり爰へ寢て貰わふ(はん)どうぞわたしも其傍へ○イヱ何傍へ寢ましたら姉エさんに呵られませう(半)何の色ではあるまいし(桂)イヤ〳〵わしはどこへも寢ません(はん)そんなら今宵は(半)わの夜通し(桂)ハテ角力は寢るのは嫌ひでごんす(半)成程是い氣が付かなんだト爰へ奥よりおしまおせんの下女紺布の夜具と枕を持出て來り(しま)夫では爰へ御關取を(せん)御寢かし申のでムり升か(はん)アン寢るのじやない御休じやわいのふ(しま)どちらも同じ事で(兩人)ムり升る(半)ハテ氣の付ぬやつではある(桂)イヤかつぐこつちが○ト立上るを道具替りの知らせ(桂)野暮でごんしたトよろしく笑ふ下女貳人は床を敷く此摸樣端唄の合方にて道具廻る

本舞臺元の土手道具うしろ茶見世を仕舞つた心にて鼓簧あて圍つてある此前に三尺帶尻端折の惡者四人縫くるみの捧を持立掛り居る汲の音にて道具留る

(○)向ふに見へる提灯がいつけんのに遲へねへ(△)爰へ來たなら文句なしで片ばしからやつ付ろ(□)荒ごなしせへ仕て濕せば跡は二人りの侍ひが(▽)引受ばらすと言ふからは喧嘩仕掛ゞこつちの仕事だ(○)みんなぬかるナ(三人)合点だと上手へ這入る跡跳への端唄に成り向ふより砂利八先ゞ幸之進おきぬ段介出て來り花道にて(幸)花見りとはいゝあゞら大分空が惡く成りそうか今ゐも降りさう故道を急で歸ると致そう(才)小梅へさへ參りれば人家も澤山ムり升が(段)堤で雨に合いましては舍る所に困り升(きぬ)斯ういふ事あら信半で傘を借りて來樣もの(砂利)ぬかる位ゐは恐れないが追はぎなどい面倒だ(幸)大丈夫だから參れト皆々舞臺へ來る上手より以前の四人出て砂利八の持し提灯を打落す(砂利)そら出たどろぼう〳〵ト上手へ逃て這入る幸之進才次郎段介きつと成つて(幸)ャァ狼藉致さば(三人)許るさぬぞ(○)許すも何も(四人)いるものかトやにわに打つて掛る三人是を相手に立廻り

才次郎段介上下へ二人ヅヽ追かけて這入る跡に幸之進おきぬ殘り（幸）是お新どのどこに居る（きぬ）ハイ〳〵爰におり升るト前へ出る（幸）こなたに怪我のないのが重疊（きぬ）成程噂よ違ひなく土手へ物騒でムり升るト爰へうしろの出茶屋の影より以前の大之進久馬伺ひ出て切て掛るおきぬ悶りして（きぬ）アレエヽト幸之進に組る幸之進おきぬをかばいながら探り合ひながら手の利たる立廻りわつてトヾ大之進久馬を投退ける是にて兩人は向ふへ逃て這入る上手より才次郎段介出て來り双方行當りすかして見（才）親人り（段）おきぬ殿かの（幸）ヲヽ怜（きぬ）段介どの（才）悪るい奴ッらでムり升る（幸）是も先刻の（きぬ）エヽ（幸）イヤサ又出樣から氣を付て參れト皆々身構へをして上手へ這入る跡時の鐘に成り鼓響の影より牛ケ瀬侍ひ二人の羽織を手拭にて結びしを提げ出て跡を見送り（牛）土俵で面ラを晒す身にめつさな所へは出られぬと小影で樣子を見て居たがどうして〳〵老ぼれでもまだての内の狂はぬやつぞ○ト此時兩車に成り牛ケ瀬思入有て（牛）宵から空が曇つさが遠ふ〳〵ばれて來やァがつた此樣子じやァ宗兵衛の仕事もどうか○ト羽織を肩へ掛る道具替りの知らせ（牛）それにやァいゝぐト此摸樣兩車波の音にて道具廻る

本舞臺元の座敷の道具眞中よ屏風を建廻さ是よ桂川と御半の帶掛てある事上手に丸行燈を灯しあり時の鐘にて道具留る

ト跳の合方に成り下手の襖を明け宗兵衛頭冠りにて顔を隠し出て屏風の内を伺ひ懐ろより合口を出さ屏風に掛つて居る二ッの帶を引おろし合口にて帶の端を切り取る事よろしく徒程に屏風の内にて（桂）アヽコレ妹待つた（はん）どうぞ放して下さりませト是にて宗兵衛二重の下手へ隠れる屏風を内より開く此屏風前幕の桂川と見たる流に柳ぬ書おはん脇差にて死ふとするを桂川留て居て（桂）書の勞れと酒の酔眠る共なく一ト休竟どろ〳〵をやる内に夢か現か其昔し別れた女お巡り逢ひ一ッ蒲團でぐつすりと寢たと思へば妹おはん姉の御新へ濟ぬと思ひおれの刃物で死ぬ氣であらふが是は船岡幸之進樣が異見の爲に若年の短氣を諭した竹のへら所詮是では死れぬから短氣を出さずと是妹おれの亀相はゆるしてくりやれ（はん）イエ〳〵わさしが戀しさお一ッ蒲團へ這入りし故此身の願ひは叶ふたれど姉エさんへ濟ぬ故所詮生ては居られませぬ刃物でなければ此小柄どうぞ死して下さりませ（桂）イヤ死なず共是切りよ互ひに口を拭ひて居れば誰れにも知れる譯もなし短氣な事はせぬものだ（はん）イエ是切で諦らめが付く位ゐなら死ハせぬ斯うならないでさへ戀敷ふて焦がれ〳〵ておりましたに嬉しい思ひを仕ましては死んでも思ひ切れぬわいなァ（桂）エヽ如何に年端が行ぬとて聞譯のないうの覺期放せといつたら放さぬか（はん）イエ〳〵わたしや嗚られても死ぬより外はムんせぬト兩人宜しく爭ふ此時どろ〳〵お成り桂川い脇差をもぎ取るおはん左りの拳開らいて目貫の片しを落す取上見て（はん）わさしの拳が開らきし上此樣なものが出さわいなァト桂川能く見て（桂）ヤヽコリヤ覺へある目貫の片しやんなら是がそなた

の手に(はん)産れしより開らかぬ手が不思議に開いて此樣な目貫とやらが出ましさのむや
ト是にて桂川ぞつとせしてなしあつて(桂)そんならそらの前生は死別れたるお花であつた
か(はん)何お花さんと仰しやるのはどちらの御人でムり升る(桂)今日まで懸す身の素性言
はねバ譯が分からぬからマア一ト通り聞てくれ○ト謡へ横笛の入りし合方成り(桂)已の親
父は淀川といふ稻葉の邸の抱への力士其力量があやかつさか子供の時から力業暗嘩を好む
性分故死んだ親父に成り代り御最負下さる船岡樣が日頃異見下すつたも若い時お御袋が乳
母に上つさその縁で在所へ預る娘はと不義を働らき言ひかわし連れて立退き桂川で情死を
して死んだのを船岡樣に助られ産れ替つさ積りにて此身の素性は名乘るなと御諭し受て江
戸へ下り立派な力士に成つされど情死する時鴛鴦の日貫を貳人りゞ片し宛握つて死んで後
の世は夫婦に成らふと約束した證據の目貫を産れし儘握つて居たとは十五年跡に別れさ船
岡の娘のそなたは産れがはり何より證據は今もつて殘る片しは此通り大事にかけて持て居
るト懷中の肌守りより出して見せるおはん能く見て(はん)本にわたしの手から出さ此鴛鴦
の目貫とやらと少しも違はぬ女夫の一對(桂)世に鴛鴦の女夫程互ひに慕ひ慕われて愛情深
いと聞て居たゞ(はん)盡ぬ縁にしと産れ替つて出ましても死ぬ程戀しふ思ふた筈(桂)夫も
互ひの惡縁か親の免るさぬいたづらをなした報ひで又候や(はん)産れ替りし甲斐もなふ戀
しいお方は姉ユさんに(桂)連れ添ふ亭主の桂川(はん)道ならぬ共末長ふ可愛がつて下さり
せト此時二重の下手より以前の宗兵衛帶の切れはしを持し儘花道の方へ逃て行く桂川是を
透かし見て(桂)誰やら人影ト是にて宗兵衛石を拾つて礫に打ッ上手の行燈へ當りし心にて
灯し消る(はん)アレユヽト桂川へ縋る(桂)今の樣子を○ト向ふを見込むを木の頭(桂)聞か
ねばいゝがト案事るこなし宗兵衛は逸散に向ふへ這入る此摸樣稽古笛の入りし謡への合方
にてよろしくひやうし幕

二幕目　本所桂川内の場　同牛ヶ瀨内の場

一牛ヶ瀨幸左衛門　一船岡才次郎　一桂川蝶右衛門　一信濃屋半兵衛　一針の宗兵衛　一虎石久馬　一船岡幸之進　一白牛金太　一横山大之進　一牛ヶ淵九郎藏　一若徒段助　一中間段助　一枝川砂利八　一籠石丸藏　一船頭長太　一下女おなべ　一桂川女房お絹　一信濃屋お半

竹本　連中

本舞臺一面の平舞臺正面暖簾口腰張の茶かべいつもの所門ド口此外一間稽古場の入口桂川
蝶右衛門といふ掛札都て本所横綱桂川内の体爰に技川籠石の取出來三世相の本を持て立か
ゝり居るを信濃屋半兵衛是を止めて居る体角兵衛の鳴物にて幕明く

（半）コレ〳〵樣子は何か知らぬけれど私しが扱ふ故謂にもなせへ（技）ヨしの事を此野郎め土鼠の生れ替りだといふから勘辨がなり升せぬ（籠）それでも此三世相の本に戊子の生れのものは土鼠の生れ代りとしてあるわへ（半）三世相の本なぞが當てあつてたまるものかッア〳〵下に居さつしやれトなだめて居る奥より蝶右衛門女房おきぬ出て來り（きぬ）とゝさんがお出じやのに立騒ひで騒々敷イ御茶でも御上げ申さぬか（技）ヲイ〳〵ト奥へは入る（きぬ）コレ籠石まだ稽古場の掃除もせず盛砂がしてないではないか何をそこで見て居るのじや（籠）わしの性は何の性だか見て居るのじや（きぬ）そんな事ハあとにして早く掃除をして仕舞わぬかいのふ（籠）ヲイ〳〵下手の稽古場の口へは入る（半）イヤ人を使へば使わるゝと中々骨の折れたものじや（きぬ）とゝさん御察し下さり升せ牛馬の樣な弟子達を女子の身にて仕ふのもへこちの人でも居ぬ時は氣骨が折てなり升せぬ（半）夫ハそうと桂川關はまだ内へ戻り升せぬか（きぬ）今朝早く戻り升て夕部一ト晩眠らぬ故幸ひ今日も場所もあく骨休めじやと申升て奥で休で居り升（半）大方そんな事で有ふと思つて河岸へ行た戻りがけこつちの内へ寄り升たが夜が明たか明けぬ内桂川關が戻つたので私もさつぱり知らぬ故女共に言附て今朝い一杯上るはづを御せんも上ずに戻し升た（きぬ）夫では夕ァ何事もなくまづ御目出度ふムり升た（半）イヤ目出度とも〳〵どうしたはづみの幸ひかお半の不具が治つたのでこんな目度事はない（きぬ）なんとおつしやるお半の片輪が治り升たとはアノ左りの握つた手が開き升てムり升るゝ（半）夕ァの内に拳々開き今朝は人並に茶碗を持て飯がくわるる樣ゐなつた（きぬ）ほんに夫は幸せな嘸當人も喜び升うが十五年が其間御醫者にかけさり術禮をして印しの見へぬ左りの手がどふしさはづみに開き升さか不思議な事でムり升（半）といふのも日頃から信心をした淺草の觀音樣の御利益だらふと今朝も出掛ゐ參つさが夫に付て今夜は内で祝ないからこなた衆夫婦も來てくれる樣に夫で一寸寄り升さト爰へ奥方枝川茶を汲で出て（枝）アイ御茶ト立たまゝ出す（きぬ）是はしたりなぜ立て居て御茶を出すのじや（枝）あぐらをかいてい溢れ升（きぬ）あぐらをかいて御客樣へ御茶を出すのがあるものか（枝）夫ではぼんで出し升ふと奥へは入る（半）イヤすはる事が出來ぬとは不自由なからだも有たものだ（きぬ）こんな目出度御斷しをこちの人ハ知らぬ樣子一寸起して參ると仕樣（半）イヤ折角休んで居るを起すのは氣の毒だわしの禮ゐ寄た事を起きたら跡ではなして下さい（きぬ）夫ではいづれ後ほど御悦びゐ參り升ふ（半）そんなら娘頼み升たト半兵衛向ふへは入るおきぬはのれん口へは入る跡床の浮琉璃になる「よき事の悦びあればかなしみの種を持込む惡仲間牛ヶ瀬先に打連立チト向より前幕の牛ヶ瀬大之進久馬宗兵衛跡より白牛牛ヶ淵中間付て出て來り（牛）夕べの雨で肝心の顔ふれの日は延びたれど宗兵衛どんが聞出した素性で遺恨の仕かへしが充分出來るといふものじや（大）ヲヽ左樣共〳〵申さば不義の女歟討全く夫と極りゐば切さいなんでもよい奴じや（久）併し圖太ひ桂川一筋繩では白狀して身の

雷惡は詫入まい(宗)其言拔の出來ぬ樣に夕ァ切取證據もの此宗兵衛ど一所なら針といふ名に拔きさしのならぬあいつが弱ひ尻押へてありやァ大丈夫(白)そこへ付に込みわし共も陣日の遺恨の鐵拳(淵)いやといふ程くらわして差引勘定するつもり(中)どふか下郎も其仲間へ加へて御貰ひ申したい(牛)ヤァ兎も角も此人數であいつの内へ押かけ升ふ「いひ合せてぞ門ドの口ト牛ケ瀬始め皆々門口へ來て(牛)桂川どんは内でごんすり一寸爰へ出て下んせ「音のふ聲に女房が何心なく奥より出てトおきぬ奥より出て來り(きぬ)是い〳〵牛ケ瀬關でムり升かよくまァ御出なさい升ちた(牛)あんまり能くも出て來ぬが通れといふならまァは入らふ且那御通りなさい「如才内義の挨拶も憎まれ口に打消されづか〳〵通る大勢連扨は夕ァの紛れかと悟れどわざと逆わずト此内皆々内へは入り宜敷住ふ(きぬ)何の御用か存じ升せんが只今夫お申升れば暫く御待下さり升せ(牛)是非とも逢て桂川に談判をする事があればどふぞ爰へまんで下せへ(きぬ)暫く待て下さり升せ「知らせに立をのれん内ト奥に て(蝶)イヤ今そこへ行所だ「煙草盆提蝶右衛門常着のまゝに出來りト前幕の蝶右衛門煙草盆を提出て來り(蝶)今日乃大事お顔觸れもどふやう雨で延したが場所の休みに氣もゆるみ足手を延して居た所思ひ掛なく牛ケ瀬關何用有て出てごんした(牛)おらァ昨日もいふ通り土俵の勝負の濟まぬ中は文句はいわぬへ氣で居たが是にお出の旦那方が桂川に逢してくれろと仰せ有るから案内をして連て來たのさ「いふにじろりと桂川並居る二人打見やり(蝶)ヲヽどなたかと思つたらきのふ信半でお目や掛つた侍衆ろんならわしに手込に逢ひ耻をかいたを遺恨に思ひ意趣を返しにムつたのか(大)イヤ何の節の一條は牛ケ瀬が預つて土俵の上で勝負なし耻辱を雪ぎくれるといへば夫は夫にて預け置がまた其上お武士道を立ねばならぬ義ダ有て取調べに參つたのじや包み隱さず申して仕まへ(蝶)まだァノ外に武士道が立たぬ事とはなんでムり升か(大)そちの生れはいづれなるか夫から先へ申して仕まへ(蝶)生れは都の片在所下醍醐といふ所で百性の子でムり升(大)イヤ〳〵夫はいつわりならん以前屋敷の抱へ角力淀川鬼市と申ものゝうちは悴で有ふがナ(蝶)エヽト惚りして氣をかへ其淀川といふ角力は子供の時お袋から名前を聞て居り升たが同じ在所の百性から角力にあつたお人とやら此桂川は其人の悴なぞではムり升せぬ(大)コリャ宗兵衛夫へ出て斷しを聞せろ(宗)モシお關取昨ばんは信半で御馳走になり升た(蝶)宗兵衛どんも一所で有つたかこんたも夕部は御苦勞たつたが合点の行ぬは信半へ妹をを浚ひに來るといふ譯さを聞てわざ〳〵と知らせてくれた其禮に酒を呑して歸したと聞たこんたがなんで又牛ケ瀬關や侍衆と一所に爰へ出て來たのだ(宗)合点が行かぬと仰せ有れば爰でぶちまけ言升がおかみさんの居ねへ所で言た方がよからふとわつちやァ思ふがどふだらふ(きぬ)何だか可笑なもの〻言樣ねたしか居た迚宗兵衛さん遠慮をするには及びません(宗)そんなら爰で言升が早へはおしがとふ言ふ譯だてつちの内の關取がァノ信濃屋のお半坊ととふから譯のある事をわつち

ァ知つて居やすからわざと夕部は信半へ娘を浚ひに來るといふ噂を土手で聞て來たと跡方もねへ拵へ事でおかみさんを先へ歸し關取斗り信濃屋へ泊れるにしやしたもみんな内の關取から頼まれて居る種まわしだ(蝶)コレ〳〵宗兵衛何をいふそんなたわけた事なんぞをあんで已れが頼むものか又女房の妹とをふから譯が有るなぞたァ夫こそそつちの拵へ事馬鹿な事をいつてくれるナ(宗)女房の前じやァそふ言わざァ困るだらふと斷わつたのだ「よもやと思ふ女房も愚痴は常なる廻り氣に(きぬ)もしこちゐ人身に覺へのあい言掛を宗兵衛さんにされ升てはおまへ斗りか私しまで耻をかゝねばなり升せぬ外の事とは違ふ故こんな噂をされぬ樣すつぱり爰で埒を明け男を立て下さんせ夫でなければァノ子までわるい浮名ダ立升わいァ(蝶)まァいゝから默て居ろ子供の樣なァノお半に能年をした桂川がなんで手出しが出來るものか夫ァ積りよも知れた事誠と思ふものァねへから言ふ奴あい言せて置け(久)コリャ〳〵宗兵衛か樣な奴は以謂蛙の頬冠り水掛論を致そうより確な證據の二タ品を出して女房よ見せてやれ「證據と聞て桂川夫と氣のつく身の當惑知らぬお結は聞咎め(きぬ)證據があると仰有からは聞捨ならぬ御一言あるあら爰へ出しなさんせわたしも見ねばなり升せぬ(宗)相人の出樣で此證據もめつたに出されへ氣で居たがさう剛情を張りなさりやァ出さずおも居られめへナイおかみさん此帶よこなたも覺がムり升ふヲ「さし出す帶の切れはじを手に取上てよく〳〵見てト宗兵衛は前幕の帶の切れはじを出す(きぬ)ほんに是は覺へのある妹の帶の切れはじよこちの人がゞて居た博多の帶の切はじじやがどうして是をこなさんが(宗)博奕ゝすれど盗人ゝまだした事のねへ已れもあんまり小癪にさわるから醉た紛れに信濃屋の座敷へ忍んで桂川がどんな手を出しァノお半と四ッに渡つて取組かと屏風の外で聞とも知らず布團の上の腹檜であうんの息も取乱しうんすうといふ最中に分る行事の役廻りも水を入れては邪魔だと思ひ廻しのかわりゐゞ込んだ二人の帶の切ッはしを後日の證據よ切取るとも知らぬへ位ひに夢中になり互ひに汗をかいたのゝいわゝと知れた屏風の中あとは宜敷察しなせへ「聞く女房ゝ胸の火の燃る思ひに夫トの顔見れば耻入る其樣子呆れてへッと泣伏ぜば仕濟したりと牛ケ瀬ゝ(牛)サァ其證據で桂川とお半の中ゝ知れてある是から先が女敵の旦那のばんだ御調べなせへ(大)ヲヽ白狀をさしてくれんャイ桂川已れ何程陳じても淀川鬼市の悴ゐて我言號のお花といへる女と不義を働いて情死を仕損ひ幸之進が情けにて命助り此江戸へ出て參つたに相違ない確な證據ゝ其節ゐお半の拳しが聞きし上握りし片しの目貫ゐてお半とお花の再生なりと諭せし詞を宗兵衛が殘らず聞て身共へ告たり左すれば已れは我女敵命を渡すか左もなくバお半を身共の妻に渡し過し不埒を詫入るか二ッに一ッの返答せよも早言拔叶わぬ所じゃ「刀をとつて詰寄れバ桂川と打笑ひ(蝶)かふして大勢連立てしかつべらしくごんしたうらは何の用かと思たら寝言の樣な其言かけ此桂川ゝ一ッとしてそんな覺へハムへ升せん(牛)ナニ一ッとして覺へないとは(蝶)あ

る程夕ァ信濃屋へ泊つて妹がこわがる故傍へ寝かしてやりもしたし信心をした御影やら是迄開かぬ左りの拳しゞ不思議ゐ開ひて家中が悦んだに違へはねへゞ己が女房の妹を抱寝をしたり前の世に心中をした其女の生れ替りで有ふ抔と囈言の様な言ひ掛り芝居なぞでい能狂言にするさうだが夫は目先のかわるのを働きにする作り物取るにも足らねへ宗兵衛が二人りの帶を刀取て夢に等しい拵へ事を口から出任せ饒舌たを真に請なすつて女敵の素性をいへのといわつしやるは四民の上に御立なさる侍ひ衆にも似合ぬ〈鹿想ゐ事だと思ひ升又牛ゞ瀬も牛ゞ瀬だ貴様も東の大關で男を磨く身を以てこんな御方を案内してゐざ〳〵來るとは大人氣ねへよくまァ物を積つて見ろ(宗)夫じやタァ言つた事を舌を二枚に言けして一寸退れをする氣だナ(蝶)己れも男の桂川一寸退れをする様ゐそんゐ未れんをいやァしねへ知らぬといつたらどこがどこまで知らぬといつて通すから余慶な事をいやァがるナ手めへの熱の囈言がなんで證據になるものか(宗)イヤ囈言だと言抜ても詞い證據になるめへが切たゐめへやゐ半の帶のはしコリヤ寝言とは言われめへ(蝶)酒の機嫌でぐつすりと寝たを附込み切取りやァいわば手めへば盗人だ妹の所へ忍び込傍へ寝かしてやつたのを抱寝をしたと言掛りやァ出る所へ出て盗人の簾を言立て闘い所へ入てやるから待て居ろ(大)イヤどふいへばこういふと扨々圖太ひ奴ではある所詮ゲ様な性根ではよふいに白狀しまいから昨夜素性を聞いたとあるゐ半を問詰め白狀を致さするのがよくムらム(牛)イヤ子供抔の言事を取上さとて又こいつゞ大人氣ねへと笑ひ升ム生れと素性の闘へ方もゐ半とわけの有事も此牛ゞ瀬に御任せなさりやァあすの勝負の濟だ上きつと調べて桂川を白狀さして見升うト是にて宗兵衛思入有て(宗)成程是ャァ關取に御任せゐさるが一番能イ(大)然ば其方に任せるから屹度白狀さしてくりやれ(白)今日は一番且那方の助鱗抱でこちとらも昨日の遺恨を返そうと樂んで居さかひもなく(淵)固めゐ拳しも無駄となり此まゝすこ〳〵歸るのはなんだか力が抜さ様だ(中)よつてかゝつて打据へるnいつも極りの筋だからたゐにはぶたずに置もよからふ(久)併し此まゝ歸つては余り風情がない様じやが牛ゞ瀬趣向はあるまいか(牛)ハテ別に趣向も有り升せぬがわしが脇から買來めた弱一文字の短刀を見せたらこいつがはしがり升ふ(蝶)ナニ菊一文字の短刀を持て居るとか「出してちらすを桂川遠目ゐ夫ト打見やれば(牛)なんと是れゞほしからふおぬしが世話をするといふ浪人ものゝ侍が紛失させたと聞て居る菊一文字の短刀をそれが脇から買來めとふからこふして持て居れば最負を請る且那方へゐ上申せば其手蔓で屋敷へさし上出世のつるそふなる時は浪人の船渕とやらいふ人い一生歸參は叶ふめへ讓つてやらふとやるめへと此の牛ゞ瀬が心一ッ是ャァ素性も有りてへに言て置ざァなるめへが「思ひも掛ぬ短刀の出所知れて打悦ぶ(蝶)ヲヽ其短刀をわしの方へ讓てさへくれたなら(牛)おぬしは本昔を吹といふのか(蝶)賦の品か偽物か一寸改め見た上でト立寄るを隔てゝ(牛)エヽ寄りやァがるナト持たる烟勞で桂川の領をうつ(きぬ)

コリヤこちの人の眉間をば(牛)ヲ、割たゞどふしたなんとした見すゝ知れて居る事をと
ぼけていわぬ返報にこつちも刀の買先をいわねば夫れで五分と五分已れに手向ひしやァが
りやァ直ぐにこいつを且那方へお讓り申て出世の臺夫れゞかなしく思ふなら已れも手を下
げ何もかも明して言やァ男づく手めへゞ世話をすると聞く涙人ものにそつくりと讓つてや
るまいものでもねへ「のさばり返る悪口を堪ゆる夫女房も其口惜しさにたまり兼ね(きぬ)
コレこちの人其の樣にれまへい疵を付けられてあすは土俵へ出られ升まい夫れでも口惜
うムんせぬかへ(蝶)ェ、氣を揉にやァ及ばねへ何に是式の額の疵出がけの稽古に野郎共が
ひつかいたのだと思へば濟むそんなら牛ケ瀬後方にわしが出向ひて行ふから夫までどふか
短刀は外へやらぢに置てくだされ(牛)我の方から手を下げて頼みァ已れも男づく讓つてや
るめへものでもねへ「長居は恐れと兩人は疵持足の氣味わるく(大)其樣な短刀をそちが所
持して居らふとは今の今まで知らざる我々併し早速買先の調べをせねば相成らねば(久)片
時も早く歸ると致さう「一同外へ立出れば牛ケ瀬跡を見返りて(牛)コレ桂川後方までに來
るなればどこへも行かずに居てやるから用が有るなら内へ來ひ(桂)きつと後方内へ行けば
必ず待て居て下せ〳〵(宗)そんなら闕取(白淵)且那方(牛)わしの内までも出なさり升せト皆
々向へ這入る「歸るを待て女房は夫の膝へ取すがり(きぬ)モシこちの人おまへい夕ァ妹を
抱て寢さのでムんすかへ「改め聞かれ飽迄も言退ぐれんと胸を据へ(蝶)ェ、おぬしまで同

じ樣に今わいつ箒のいつた事を誠と思つて已れに聞くかなんのつけに妹を已れが抱て寢ら
れるものかおぬしも可笑く邪推を廻すがなんで子供のアノお半を已れゞ抱寢が出來るもの
か(きぬ)そんなら乾度おまへさんい、そんお覺へはムんせぬか(蝶)覺へがねへうらあの通り
ぎつばり知らぬといつたのだ又宗兵衛も盗人の科に落ちやァならねへと二ッの帶の切はじ
を置て行たが何より證據だ(きぬ)夫なればよふムんすゞ妹と違へ不器量あたらわぬ私でム
んす故もしや是ゞ誠にて見かへられたらなんとせふ夫も是非ない事ながら世の人の口の端
に惡ひ浮名を立られたらどふしたものとりなしくなり實は案じ　居り升た(蝶)其心配はせ
ぬがよい捨置れぬは牛ケ瀬が今持て居たアノ短刀あれをあつちへ讓られては大恩受た幸之
進樣へ盡す心も水の泡どんな苦い算段をしてもこつちへ讓　貰わねば已れの男が廢るとい
ふもの(きぬ)ほんに常々おまへさんが命の親じやとおつしやつて御世話をなさる幸之進樣
過し昔ゝ御國元で紛失させし短刀が御手に入られば御歸參が叶わぬ御身と知つて居升がさ
うして命を其昔ゝ助らしやんした其譯はどふいふ次第でムんすか夫を聞せて下さり升せ
「譯を問へどもあらわには夫といわぬ身の素性(蝶)其助かつた次第といふは若氣の至り
に人をあやめ仕置に逢ふのを幸之進樣の御影にて命を拾つたのだ(きぬ)そんなら全く淀川
といふ力士の子ではムんせぬか「うそを誠と女氣に案心するぞ不愍なり(蝶)なんおしても
迂濶々々しては居られぬ場合だ(きぬ)そうしてどこへ行かしやんす(蝶)幸之進樣の御宅へ

行きァノ牛ヶ瀬が短刀を持て居るのを御知せ申し手に入る工風をせねバならぬ(きぬ)ほんに夫がりんじん故少しも早くいつてムんせ(蝶)どふか御宅にムればよいがおきぬ着物を出しやれ(きぬ)ァイ〳〵ト稽古唄ュなり向ふより前幕のお半先に船頭付に出て來て(半)モシ船頭さん爰まで來れど知れ升からもふ宜ゝムんす(船)おまへさんはよくつても先迄送つて行升せんとわつちの役が濟升せんから向ふまで一所に行升(半)夫では却つて御氣の毒なれど一所に行て下さんせト兩人舞臺へ來て格子を明け○兄さんも姉ェさんも夫ィ御出でムんしたゥへ(きぬ)そなたは妹どふして一人で(半)兩國へ戻る御客樣のお船が河岸にムんした故頼んで乘て參り升た(きぬ)そんなら船で來やつたかそうして一人りでは知れ憎ひ道で有ふに(船)ナニわつちが御一所に御送り申して參り升た(蝶)ァ、柳橋の長吉どんこなたか送つてくれたか(船)どふせ歸る船でムへ升ゥら御乘ェ申して參り升た(蝶)客の船の歸りといへば船賃も取るめへからおきぬ渡りをやるがいひ(きぬ)船頭さん少し待ゥさんせト金を包み○是は少しだが煙草でも買て下さい(船)大方こふで有ふと思ひィェこんな御心配では御氣の毒樣でムり升ェ左樣なら姉さんは確に御屆申し升たト引返して向ふへは入る「娘心の戀しさにお半は傍ュ居たがるを悟られまじと余所〳〵しく(蝶)なんでそなたハ珍しく一人でけふは出て來たのだ(半)これはァノ夕ァの御禮にトいふを冠せて(蝶)ムゝタァの禮參りか聞ばそなたは手が開ェ今日は祝ひをするとの事(きぬ)ほんにさつきもとゝさんが知らせに來ての御悦びよふァァそなたは人並の骸になつてくりやつたのふ(半)姉ェさんこんなお問き升た悦んで下さり升せ(きぬ)テモァァ不思議な事じやわいのふ「悦び合ふぞ道理なれ(蝶)コレ妹夕ァそなたが強がつて已れの傍へ寢ュ時に帶を切られはせんだか(半)なるほど切られて有升た(蝶)其盗人が今日知れておれの内へ取戻したから安心するがいひ(きぬ)腔といふのが知れュので私も安心仕升たわいナァ(蝶)夫では妹ゆつくり跡ではなして居るが宜ひ直きュ已れは歸つて來る(半)兄さんどこへ御出なさる(きぬ)今急用が出來たので割下水まで御出掛になるのじやわいナァ(半)夫でハ御待申升から直きに戻つて下さり升せ(きぬ)枝川か籠石を連て御出なさり升せ(蝶)ィヤ内談に行のだから供は却つて邪魔になる(半)そんおゝ兄さん(蝶)どふか留守に何事も(きぬ)ェゝ(蝶)イヤサどふかお留守でなけりゃァ能いが「跡を案じて桂川心もいそぎ出て行くト桂川向ふへは入る「本意なき思ひ門ド口に見送る妹の素振を見てト此内お半は桂川の後ろ影を見送りて余念なき思入れ(きぬ)どふも樣子が可笑いわいナァ(はん)姉ェさん何ゲ可笑ふムんす(きぬ)サァ可笑いと思ふのハ二人の弟子が最前から奥に何をして居るか(半)用なら呼んで來升ふか(きぬ)是れ二人ともどこに居やる「呼立られて二人の弟子稽古場から出來りト以前の弟子二人出て(枝)何ぞ用でもごんすのかへ(きぬ)二人共今の内湯〳〵でもは入てくるがよい(枝)ァイ〳〵そんなら行て來升ふ(きぬ)湯錢がなければ持ておじや(枝)今日は有升から又お願ひ申升(籠)そんなら

枝川立かへてくれ(枝)又立かへか困つた奴だト兩人手拭を持て橋懸りへは入る此内お半は有合ふ三世相の本を開き見て(半)コリヤ水姓と水姓でも性がわるいとして有わいナア「氣を揉二世の縁定め惡ひと知らす三世相(きぬ)コレ妹水姓ど水姓とは誰れの事を見て居るのじや(半)アノ是れはヲヽ夫れ〳〵わたしや水性でムり升故水性の男とは性が合わぬと仕てあるぞへ(きぬ)其水姓の男といふは調度こちの桂川どの(半)ほんに兄さんも三十五の水性でムり升「余所に見なせど合性の惡ひを案じ泪ぐむ心の底を探らんと(きぬ)イヤ〳〵仮令此世では性の合わない生れでも夫婦は二世の縁糸にて前の世の時性が合ひ夫婦中よふしたものは此の世で性が合わいでも矢張中よふ添われるわいのふ(半)夫りやまア誠でムんすかろナア(きぬ)夫に付てわたしやそなたに頼みたい事ゞある(半)姉さん私にお頼みとは何の事でムんすへ(きぬ)外の事でハないけれどわしの夫トの桂川殿とどふか夫婦になつてたもらぬか(半)ア姉さんさへよろしくばトうつかり言て氣が付アレ姉さんとした事が其様な事は出來升せぬわいナア(きぬ)イヤ〳〵姉ゞ妹に夫を讓るはまゝある事年が二十も違ふのをそなたが不肖しやるならそなたの夫に持せて遣り升ふ(半)夫ではアノ眞實でムり升か(きぬ)サア今朝とゝさんがお寄にて夕アそなたと桂川と一ッ寢をさせた故讓つてやつてくれまいかと實はお頼みなさんした(半)エヽそんならアノとゝさんがモウ御存じでムり升か「驚く妹の胸よりも姉は恟り呆れ顔(きぬ)そんならいよ〳〵こちの人とそなたは枕をかわしたか(半)姉さん酌して下さり升せ(きぬ)よもやと思ふた妹とやつぱり徒らなさんしたゥ(半)夫れではアノとゝさんから聞たのではムんせぬか(きぬ)そなたの口から聞が初めて(半)エヽ(きぬ)テモ情ない事じやナアト此摸様合方にて道具廻る

本舞臺三間の常足○貳重上の方障子家体いつもの所門ド口都て角力住居の体能き所へ燭臺を照らし上手に以前の大之進久馬與中に牛ケ瀬下手に宗兵衛前に酒肴を取散らして居る見得米山甚句の合方にて道具止る

(大)いわゆる酌はたぼと申てケ様な下女でも女子の酌にて酒の馳走は添ひ(久)流石は力士の内程有て鬼と組打する心で這附る者も有でムらう(下)アレ口のわるいお客様なんぼわしがこんな顔でも鬼娘じやアムへましねへ(宗)鬼も十七山茶も出端とこれでも豆は人間並にはぢける時分ゑはぢけるだらふ(下)おめへさんまで同じ様にわしをいぢめて嬲らつしやると酌をしては居られましねへ(大)イヤ〳〵是はほんの笑談そちが居ぬと花がおいから此廓に居てくりやれ(牛)イヤ花はおく共且那方に御内談が有のだからおなべ次ぎへ立つが能イ(下)夫では用の有る時はどふかがなづて與さつてへト下女は奥へは入る(大)アノ桂川に菊一文を見せたのは詮議の手蔓をこつちから敎へてやるも同じ事だ(久)もし又是へ幸之進めが詮讓に參る其時は如何致したものであらふ(牛)ハテそこがこつちの魂担もの此短刀の中刀を入かへ偽物にして置た上こいつをかせに桂川を本音を吹かせて淀川の枠と白狀すゞ時

は女敵討と名乗出て且那があいつを切捨てもお半を女房になすつても道理お叶つて居り升から向ふに否應言せぬ積り(大)何樣是はよき魂担偽物ゝれば幸之進へ渡した所が此方のさわりに相成る氣遣ひなし(久)又桂川ゞ素性さへ白狀すれば女敵故お半を御手お入れるよも都合がよいと申もの(宗)イヤ大關は大關だけ大きな智惠が湧出るものだ(牛)何おしろ今の内中刀を摺かへ置ねばならぬ(久)然らば手前の小劍と摺かへ置升ん(宗)素性を白狀させるには二人の且那が居ない方が都合ゞよくはムへ升せんか(牛)桂川めが來ならばこなたや且那は隱れて居て素性をぬかした具時に出て來て存分いぢめあせへト此内久馬は小刀をさしかへ居る事有て(久)イヤ誂へ向きに此銷へしつくりはまるは奇妙〳〵ト爰へ向ふより以前の桂川出て來り(桂)刀の詮議に晝夜となく諸方を歩行御三人今日もどこへか出向ひたと隣で聞てがつかりしたが約束故に兎も角もアノ牛ヶ瀬の内へ行き下た手に組んで賴んだら讓つてくれぬ事もあるめへ併　船岡親子の衆か段助殿か立合ねば菊一文字といふ刀ゝ眞偽の程が見わかるめへ何にしても悪ひ都合だト舞臺へ來る此内宗兵衛は門ト口へ出て來て内へ知らせる大之進久馬は短刀を牛ヶ瀬に渡し上手の障子家体へは入る此内蝶右衛門は門ト口の所へ來て(桂)ヲヽ宗兵衛どんろこに居たか牛ヶ瀬關も内だらふヶ(宗)おめへさんの御出になるのをさつきから待て居升ト桂川内へは入り(桂)關取さつきは不禮を仕升た腹も立ふが免して下んせ(牛)ヲヽ桂川どん待て居たヶア〳〵こつちへ通らつせへ(桂)見れば大分張込んで馳走が有た樣子でごんすの○併し早速ながら牛ヶ瀬關こなたに賴まよやならぬのはさつき一寸噺した通りアノ短刀は私しの方でなければならぬ大事の品夫を外へ賣られてはこなたが買わしつたか利附をするから男づくでどふか讓つて下さるまいか(牛)夫アさつきも言通り男と見かけ賴まれたから跡へは引ぬ已れだから讓つてやるめへものでもねへが何を隱そふアノ刀は宗兵衛どんから五十兩で然も昨日買つたのだ(桂)宗兵衛どんはあの刀をどこでこなたは買あすつた(宗)關取聞ておくんなせェ三年跡ょ金比羅へ參つた歸りお天道千の道具屋ゥらたつた一分で買升たが金日なる物とも知らねへで道中ざしょ仕樣と思ひ江戸までさして歸つたを内へ仕舞て置升たがき乃ふ思わず向嶋で此關取に逢た時見せるとそいつが大金儲五十兩なら買わふといふ客のついたはさつきの侍所をこつちの關取ゞ先口なればと即金で右から左へ五十兩まだしも速の御侍が買わなかつたがおまへさんの御仕合でムへ升(牛)其短刀も男づくで金がなけれど貸つもりでそつちへ讓つてやる氣だゞ已が運立宗兵衛が夕ァ闇出すこんたの素性調べょ行たを隱し立男の面を潰されたが讓る譯にもおりにくい(桂)尤な其言分何にも賴みの短刀をわしに讓つてくれるなら素性もいわふし身の耻も明してこんたに噺さふうらどふか余人に聞かれぬ樣に(牛)夫は已れが呑込んゞ宗兵衛どん氣の毒なゞらこんたは次へ立て下せへ(宗)調度わつちも兩國の友達の所に用もあれば是でお暇致し升ふト宗兵衛は挨拶して向へは入る

（牛）邪魔い拂つた桂川どん素性を晰して聞かせなせへ（桂）實と夕ァ宗兵衛お聞かれた通り此わしは淀川鬼市の悴でごんす（牛）そうして何んで此の年月素性をかくしていわれへのだ（桂）何を彰そふ其の昔横山殿と言ふのれ花といふ女に馴染不義を働き桂川で心中をして死ぬ所をお花の親の幸之進様に異見をされて命延わり江戸へ出て來て角力となり桂川とは名乘て居さが其の恩人の船岡様が菊一文字の短刀を紛失させて今の浪人爰に不思議なはなしといふは女房の妹のアノお半タァ思わず信濃屋へ泊づて枕をかわした時產れたまゝで握つて居た拳しを開いて其の昔し取かわしたる鴛鴦の目貫の片しが出た故に扨はお半の前世は桂川で水死をしさお花で有ふと知つたのだが芝居で仕ろふな因緣を人に斷すも馬鹿〳〵しく此身の恥と舊惡に飽までかくした桂川此次第故牛ヶ瀨關離にも言わずにこんゑの胸に治めて置て下せへ升（牛）ヲヽ能くいつた夫で能イ金が出來ずば五十兩の刀の代は貸して置くから早く持て歸へんなせへ（桂）どんな工面をしてなりと翌日は必ならず五十兩こんたに返すでムらふから何は兎もあれ目利を頼み正物と極らぬ内は安心ならぬト刀を見て居る此時以前の大之進久馬出て（大）其目利なら頼まずと拙者がいたして遣わそふ（桂）そんならそこに聞て居たか（大）紛失させし本人故幸之進へ渡すはよいが素性を夫と明す上は申さずとても女敵討不義の成敗せねばならぬ（久）併し命が惜しいならお花の再生なせしと聞くお半を是なる横山氏へ兄の威光で得心させ妻に送らば知らぬ事左なくば命は助からぬぞ（桂）扨は二人の侍を一間へ忍ばせ身の素性聞かせておれをはめたのだナ（牛）ヲヽ情は情仇は仇日頃ひわきの且那方の武士を立るも男づくそつちの望みの刀を讓り男を立るも仲間づく言分あるなら其刀讓られねへから置て行やれ（桂）其達引感心したお半を送るか桂川命を渡すか二ツ一ツ返事はきつと後方まで再び出直し來様から此短刀を持て行き船岡様に目利をさせ渡してくるまで牛ヶ瀨關暫時の猶豫をして下せへ（牛）わしにめんじて且那方待てやつて下せへ升せんか（大）いかにも待てやるかわり昨日われに信半よて手込ゐ逢し其返報（久）存分打れて歸るなら暫時猶豫いたしてくれん（桂）打れる位ひは易ひ事決而手出しは仕升んから存分わして下せへト茲へ奥より以前の白牛牛ケ淵出て（白）さう又相鳥が極たつち（淵）きのふの仕返しわしらゐも（白）ちつと打して下さいまし（牛）手出しをすれば已れが相人だサァ〳〵皆なで打たり〳〵（大）どれ其義なら打すへくれんヤイ桂川よくも昨日向嶋にて身共に恥辱を與へたナ其返扱はかふ〳〵〳〵ト打つ是にて扇の骨パラ〳〵になるこれは扇に御苦勞千萬（久）ドレ身共が二番手だ扇で打てば已れの骨より扇の骨が先へ碎け却つて身共が損耗だいつそ拳でこふ〳〵〳〵ト打て拳のいたむこなしよて是は拳の御相伴た（白）一人〳〵で打うより（淵）今度は手早く二人して（淵）昨日の仕返しこふ〳〵〳〵ト打据てよろしく納る（桂）そんなら後方に出直して來る其間（牛）待てやるから早く歸れ（桂）船岡様に逢たいものだト逸散には入る（牛）イヤ馬鹿な野郎もあるものだ（大）然らば是より向ふ嶋へ（久）

今宵は參つて飲明し(白)味ひ料理に有附とは(淵)どんな果報な事はない(牛)もふ附込んで
ト煙管を灰吹にてたゝくを木の頭ら居アやがるト此もよふよろしく道具廻る
本舞臺以前の桂川内の場へ戻り上手の程お半猿轡をはめ縛り附られ居るおきぬ行燈の傍
に書置を書て居る此摸樣よろしく道具止る
「操守る姉が情に妹の結ぶ縁にしも長かれと跡へ一ト筆書殘す短き文を卷納めトお結よろ
しくあつて(きぬ)コレ妹此書置ゐも記しあれどわしは不義せし科あつて桂川殿へ言譯に身
を投死ぬる覺悟あればそなさい跡にながらへて桂川殿と添ふてたも姉をいとをて思ふなら
あの世の苦艱を助る樣追善供養を頼み升る兎斯うする内こちの人が戻つて來ては事面倒邪
魔の無き内そうじや〳〵「氣は張り結て居ながらも是が夫婦の別れかと思へば胸にせぐり
來る涙見せしと行燈の灯しを消て消る身を留る事さへなら坂や此手がしまるじゆつおやと
身もだへなせど甲斐ぞなき折りに此家へ來る人の灯影見ゆれば手拭に顔を覆ふて退れ行く
ト此内おきぬおはんよろしくこなしあつておきぬ行燈を消し門ト口へ出る合方に成り向ふ
より段助提灯を持先に立幸之進才次郎出て來る是にてお紺手拭を冠り花道にてすれ違ひ向
ふへ這入三人は是を見返り思入あつて(幸)今すれ違ひしあの女は桂川の妻ではないか(才)
イエ夫なればあちらから詞を掛るでムりませうか(段)顔を隠くして參りましたは余人に相
違ムりませぬ(幸)何に致せ桂川ゞ留守へ尋ねて參りしは何か仔細のある事成らん「不審な
がらに門ト口を明れば内へ異シの闇ゝ三人門ト口を明内を見て(段)コリヤ日の暮るに灯を
も付けず誰れも居らぬと見へ升る(幸)夫ぞ猶々いぶかしゝ(才)内へ這入て改め見やれ(段)
ハッ「主從親子内へ入り見廻すあなさゝ娘の影(段)ヤ、何ものか往へくゝされ骸をもゞき
あり升る(幸)ヲ、是ぞ昨日信濃屋にて面會なせし娘のお半(才)何故爰にくゝられおりしか
(幸)ソレいましめを解いて遣いせ(段)ハッ「しごきと共に猿轡解く間遲しと泣出しトよろ
しくあつて(はん)若し且那樣姉エさんをどうぞお助け下さりませ(幸)何姉を助よとは(は
ん)只今身を投死ゐ升るとて其書置を殘しましてどこへか參つてムり升から跡を追ゥけ姉
さんをお助被成て下さりませ(段)扨は道にてすれ違ひし(才)女ハ矢張りお紺殿か(幸)猶豫
はならぬ兩人共手分を致して取りおさへよ(才)ハッ然らば段介(段)サァムりませ「兩人跡
を追ふて行くト兩人徘徊に向ふへ這入る(幸)何ハ扨置き書置を跡へ殘して家出の次第早く
身共に申聞せよ(はん)サァ其譯を申升るハ皆んなわさしがいさづらから大事の〳〵姉さん
を殺し升のでムり升る(幸)何身のいさづちに姉を殺すと申は一圓合点が行かぬ(はん)いつ
そわさしも姉さんと一所ゐ死んで身の言譯「立んとなすを(幸)又しても麁忽千万何がどう
やら譯が分らぬ名宛無ければ書置を開封なして讀んで見ん○「封押開らく書置も夫ト(殺
す妻の文(幸)何々一筆書殘しまする〳〵私事ゐまゝ樣と二世の縁ゐしを結びし身にて不義を働
きし事唯今と相成ていヤ譯なく淵川へ身を沈め今宵相果ゆまゝ妹不便と思召分られ私同樣

ほいつくしみ下されいいと草葉の影より御嬉く万々年の御壽命を祈り居りまする〜〇ムヽ扨は此家の女房は不義を働らき居りしよな(はん)イエ〜〜さうじやムりませぬ兄イさんと私がいさつら事を致しさを添わせて遣ると姉ェさんが身ょ覺もなき書置を殘して死ぬのでムり升る「聞て恟り幸之進呆れはてさる興さめ顔(幸)然ばきちと桂川ら不義いさつらを致せしとな(はん)夫故此身も死にませねば姉ェさん へ濟ませぬどうぞ殺して下さりまし「又身をもがくを押止め(幸)イヤ〜〜不義を致そうとも年端の行かぬそちなれば死ぬ程の科とないまア〜〜身共お任かせて置きやれ〇ト下に居させ(幸)去ルあても不埒なるは色におぼるゝ桂川我か昔への教訓を忘却致して現在の妻の妹と不義いさつら夫に引替へ感心なは夫トの耻を押隱くし跡へ難義の掛らぬ樣書殘して死ふとは妻の心底見あげしものじやどうか助り歸れば能いが「斯る騷ぎの有るぞとも知らで息せき桂川我が家を差して立歸りト向ふより桂川出て來り内へ入り(桂)ヲヽ且那樣唯今わなさの御浪宅へ寄て參つてムり升るが御悅び被成ませ御尋被成短刀が手に入りまして ムり升「差出す短刀こなさにも余事は扨置取敢ずトよろしくあつて(幸)何短刀が手に入りしとな〇「鞘拔き拂ひ能く〜〜見て(幸)コリヤ桂川何んと思ふて此樣な生ッくら刄金を菊一文字とそちは見極め付けたるぞ(桂)ムヽそんならやつぱり牛ヶ瀬に深い所へはめられたか(幸)似ても似付かぬ生ッくら刀何所からそちは持つて參つた(桂)何をお隱し申ませう先刻内へ牛ヶ瀬と横山虎石貳人りの侍ひ供を引連れ參りまして此短刀を買求め持て居る故男づくで讓て遣るとの詞に付き無理に頼んで讓り受且那樣よお目利を願ひませうとお跡を尋ね持て參つてムり升るが似付かなくらとは面目次第もムりませぬ「始終を聞て幸之進襟髮取つてて〜〜〜〜ト宜しく有て(幸)コリヤ桂川如何にうちは色におぼれ魂が腐りしとて小兒に等しき戯を誠に請て欺れ能ものめ〜〜此樣ななくら物を能い氣に成り身共に見せお歸りしよお夫に引かへ不便なは夫トが妹の色香に迷ひ浮かれ居るのを押隱し身に覺へなき不義せしと書置殘し身を投んとりんきに替へし女房が操其心よも耻人りおらぬわ言わふ樣なきうつけ者めが「突道りはつたとぬめ付れば邊への書置讀下だしト宜しくあつて(桂)ウんなら女房が夕ァの始末早くも知つて身を投んと此書置を殘せしか(はん)ッイ姉ェさんに問結られ夕ァの事を咄したればそうした深い緣なれば添わして遣るから少しの内辛抱せよと言はしやんして私をあれ成る桂へ縛り其書置書やんしで死ぬ覺期にて今の先壹人りて何所かへ行きました(桂)夫を殺して成るものか且那樣御免下さりませ「きつそうかへて立上るを(幸)ヤァうろたへたその眼で見付からふり唯今悴と段介が跡を追かけ參つたれば多分お緒は助からんケ樣な所に長居は無益跡にて勝手に狂ひおれ「言捨出るを縋り止め(桂)是れには段〜〜譯ある事申開きもムり升れは暫くお待下さりませ(幸)ヤァ色におぼれて母親を失のふ昔を忘却せし人非人めに詞はかわさぬ(桂)そこを何卒(幸)ェヽ放せと申に「振切袂は一徹心跡をも見ずに立歸るト幸之進提灯

を持向ふへは入る(桂)モシ且那様暫らくお待下さりませ若シ且那様〳〵最ふ往つてお仕舞被成たかト本釣鐘を打ち込むこなしあつて(はん)兄ィさんどうそ私も所詮活きてはおられませぬから身を投げ死んで下さいまし(桂)なまじ未練な言譯やそおたの事を咄そうとも無陀な事迚も死ぬなら牛ケ瀬始め惡侍や宗兵衛を殺した上でいさぎよく腹でも切つて死なふからうなたは命を全ふしてタァの事は夢と思ひ跡の回向を仕てくりやを(はん)イエ〳〵夫が成る程ならちいさい時から戀焦かれお慕ひ申は致しませぬわたしやお花といふお方の産れ代りであるかして死んでも戀しふムんす故一所に殺して下さんせ(桂)親の冤るさぬいたづらはせまじきものと知りながら不義をなしたる報ひにて再び此世へ產ても一所に情死して死ぬといふのは是も因緣そんなら妹支度しや(はん)一所に死んで下さい升か夫で思ひは殘りませぬ(桂)思へばおれも其昔桂川で死んだなら此憂耻は晒らすまいに(はん)私しャ十五で大それたいたづらものと言れても是非ない事でムんすが(桂)角力四十に近付けば最ふ追込と言れる身で(はん)並ぶ錦の秋あらで惡るい浮名の立田川(桂)からくれないと散るも影(はん)顏に紅葉の耻かしく(桂)色と水とにおぼるゝとは(はん)ほんに果敢ない(兩人)命じやなァ「戀路の闇に迷ひ出る我ゞ家の門へ立歸る二人の弟子は夫と見てト此内兩人手拭にて顏を隱し身支度をして門ド口へ出る橋掛りより砂利八丸藏湯歸りの心あて出て來り此体を見て(砂利)コリャ關取には(丸)おかみさんと(樹)二人は留守を〇ト二人りを内へ突入れ外より戸をゞるを木の頭(桂)氣を付て呉れト送り三重本釣鐘の送りにて桂川お半の手を引き向ふへ這入る砂利八丸藏はうろ〳〵して居る此摸様よろしく拍子幕

大切　綾瀨川道行の場

一牛ヶ瀨幸左衛門　一若徒段助
一桂川蝶右衛門　一船岡才次郎
一針の宗兵衛　一虎石久馬
一船岡幸之進　一白牛金太
一横山大之進　一牛ヶ淵九郎藏
一迷子の仕出し　四人
一番太　大勢
一桂川女房お粉
一同　妹　お半
清元連中

本舞臺一面の平舞臺うしろ向嶋木母寺邊を見たる田甫の書割下の方淨瑠璃臺の所植込の張物所々に櫻の立木波の音稽古囃子よて幕明く

ト橋掛りより弓張提灯鉦太鼓を持し仕出し四人迷子を呼ながら出て迷子を尋るせりふ渡つて淨るり觸を出して(〇)所でわしが桂川とお半を當時の役者に見立淨瑠璃觸を拵へさ(△)扨々こなさは氣樂な人だ(□)どんな役者に見立さか(▽)讀で聞かせて貰ひさひト是あて〇觸を開らき(〇)淨るり名題(三人)東西〳〵(〇)關取の手力帶小娘の岩田帶仇結綾瀨の櫛々淨瑠璃太夫(三人)東西〳〵(〇)清元延壽太夫ト連中を讀(〇)相勤升る役人ト役者の顏觸を讀み清元の家元ゞ木母寺の植半へ來て居るといふ筋を言つて迷子を呼びあがら上手へ這入

る跡波の音木魚入りの合方に成り上手より宗兵衛酒に酔しこなしにて茶屋の貸提灯を持出る跡より大之進久馬出て來り(大之進)是々宗兵衛浮雲から足元を氣を附ろ(宗兵衛)幾篇酔ても大丈夫轉ぶ氣遣へいム(ません(久馬)今牛ケ瀬や供の者ゞ跡から來るからマア待やれ(宗)おめ(さん達ア白髭から船で歸るといふ事だがわつちやア是から橋場を越し吉原へ行積りだから一所に往ても道が違ふ是で御別れ申やす(大)イヤ別れるなら懐中の褒美の金子い置て行やれ(宗)イエ追はぎに合つて取られるまだもうろくは仕ませんから其心配ふやア及びません(久)追はぎは取るまいが我々共が取らねも成らぬ(宗)何だと(大)下郎は口のさがなきもの手前を活て置時は出世の邪魔ふ成る奴故不便ながらも命と共に金子を是にて取らねば成らぬ(宗)大方そんな事だらうとおれも覺期を仕て居るから酔ても由斷い仕ヤアせねへふざけさ眞似を仕被成るとそつちゞさつきすりけへた菊一文字を卷あげて十手から川へ浚ひ込み此世の別れに泥水の喰ひ納めをさせるから其氣で手出しを仕やアがれ(久)酒の力で憊我慢ふ弱身を見せぬ積りでもどうせ退れぬ我れが命獣つて性生仕て仕舞へ(宗)誰れが往生するものか掛師の仲間で名の高いおれと勝負を仕様とは目先の見へぬ獣ものだ(久)イデ其義なら覺期しろト波の音に成り久馬宗兵衛え切つて掛る其手を取らへ(宗)エヽそんな事で切れるものかト兩人よろしく爭ひトヤ刀をもぎ取り久馬を切下る大之進恟りして宗兵衛を後ろより切り下る(宗)うぬおれを切りやアがつたナ(大)細言ぬかさずくたばり

おらうト是より狸囃子誂への合方に成り三人よろしく立廻りトヤ久馬は深手を負ひ(久)人殺し〳〵ト橋掛りへ逃て這入る跡宗兵衛大之進同じく手負ひに成り兩人合打にてうしろの田甫中へ落し心にて掛稻の影へ這入跡知らせに付此道具打返し居所よて替る

本舞臺正面打返し眞崎河岸を見たる銀張綾瀨川の遠見下手の植込の張物打返し爰に清元連中居並び道具納る

ト淨瑠璃に成り「けふと過ぎ昨日ふと暮て行く春の花を見捨て歸る鴈夫は女夫の諸翼是は泪の玉章を殘して立しやもめ鳥果かなくたどる川柳の糸の乱れやむすぼるゝ心も空に聲ひそめト此内向ふよりお綿出て來り花道にて宜しく振あつて(きぬ)思ひ過せば此身程果ない者が世に有ふか人に男と立られる夫トを持し甲斐もなく前の世からの因縁にて妹とかわす伽枕是が世間へ知れさあら夫トの耻よ成る事故いつそ此身が不義せしと筆に殘して言譯に死んで妹へ二世の縁讓る心で出は出ても人足繁き川端に死る所さへ定め兼來るともなしに木母寺の此堤まで來りしい產れし土地で死ねとある產神さまの御導引今は人足とだへし故邪魔ハ無き内そうじや〳〵「繰の鐘照る月も曇りてわかぬ曉夜に產れ出たる我土地の是が名殘と身の果を案事て拾ふ川岸や重しの石の袖袂堤傳ひを後ろより伺ふ人の有るぞとも知ちず覺期を死出の旅ト舞臺へ來り小石を拾ひ袂トへ入れて居る此以前向ふより才次郎段助跡を付け出て舞臺へ來り伺ひ居る(きぬ)親に先立不孝の罪とゝさん免るして下さりませ南

無阿彌陀佛〳〵「既に斯うよと見へなるを段介あわて抱とゞめゝ此内おきぬ川へ飛込ふとするを才次郎それと差圖する段介抱留め(段)コレお緒殿待つしやい(きぬ)エ、さういふ御聲は覺へある(段)ヤ、こなたの知つた下郎の段介(才)才次郎も是におる先々短慮は止り召されト段介無理に下に居させる(きぬ)お止め被成れて下さり升は御情なれど私は死なで叶はぬ事あつて科の次第を書殘し今宵身を投げ死に升ればどうぞ御慈悲と思召御見退し下さりませ(才)ヤ、死ふと覺期極めしには定めし樣子もムらふが親人よりの言付にて止めに參りしとからは一旦連れて戻らねば此儘見退し殺されぬ(段)幸ひ爰から程近いこなたの里へムつた上譯を御咄し被成いまし給へ如何なる科あるとも死ふなどゝは無分別こんな短氣はムりませぬ(きぬ)イエ〳〵譯は私が殘して參つた書置に認めあれば申さいでも跡で次第ダわかり升る(才)イヤさうでもあらふが里方へ(段)一ト先歸つてそのわけを(きぬ)イエ〳〵どうぞ此儘に(才)まア〳〵一所に(兩人)ムれといふに「捨る命を取り留る折り柄爰へいつさんに逃げ來る武士の手負猪トばと〳〵に成り上手より久馬走り出て來り段介に行き當る段助きつととらへて顏を見て(段)ヤ、おのれは虎石久馬だナ(才)そやつを捕へて詮議なさば刀の有所も知れるであらう(段)イヤいゝ所で出合たわへトきつとなる(久)そちらで尋る短刀を命の禮に遣わすから身共の危急を助けて呉れ(才)何短刀を遣わすとは(段)扨はあのれが盜取り遣から所持しておつたのか(久)大之進から頼まれて十五年跡國元にて盜出した

は身共だが物したのを又物されあの牛ケ瀬に取られたのだ(きぬ)夫れで分りしけふの樣子あの牛ケ瀬が短刀を持て居さのも夫故成りしか(才)十五年前國元にて短刀奪ひし久馬とあれば(段)信濃屋方へ連れ參り介抱致して遣しませう(きぬ)どうぞわたしを此儘に(才)ハテ身共と一所にムれと申に「主從寄つて兩人を無理に引連れ行く道も心關屋の里方へたどりてこそはト浪の音をあしらひ才次郎はおきぬを連れ段助は久馬を引立橋掛りへ這入る「行くはづの西の方へや入月は桂の里の秋ならで露とこたへし淺草の鐘の音霞む暗らき夜にお半を背なにあふせさへ返らぬ道をそこはかと何の嬉しの森越へて人目堤に三圍の裏手を廻る畑道や花にも狂ふ蝶右衞門脊なをろせば流石にもしよてい繕ふ振袖はまだ娘氣の跡や先ト本釣鐘を打込向ふより桂川お半を背負ひ出て花道に振りあつて舞臺へ來りお半を下ろし(桂)コレ妹どう老へてもそなたとは一所に死なれぬ桂川殊に女房が操を立身を投死んだと聞からはそなたは命全ふして親に孝行盡されパ猶々濟ぬ骸ゆへ爰から近ひ信濃屋へ歸つて其身を大切に跡の回向をしてくりやれ夫でなけりやア桂川が大恩のある幸之進樣へ死んでも御詫の出來ぬしぎ爰ゝ道理を聞分けてどうぞながらへ居ちくりやれ(はん)イエ〳〵何と仰つしやつてもわたしや戀しい兄イさんに別れて跡ふながらへる心はさら〳〵ムんせぬ一所に死んで惡いなら一ツ流の此川へ別々に身を投げて未來とやらで一所に成りあの姉エさんにも御詫をして三人中よふ致しませう(桂)そんなら是程頼んでも聞分けては呉れぬのお

(はん)夫れが聞れる位ゐなら大事の〳〵姉ェさんに無理な頼みは致しませぬ(桂)先の世からの因縁と知れては居れど夫程に此桂川が戀しいか(はん)死んでも離れはせぬわいなァ「はんに女夫といふものは二世の縁迚後の世も變らぬものと手習の御師匠さんの仰しやつたを聞くも嬉しき敎へ草ちいさい時から子心にあの兄ィさんが最貧じやといへばぢらして惡ふ言ふそんな御方にや物言はぬ笑れる程いとしさの念が屆いて鴛鴦の目貫の證據名乘り合ふ深い中ならいつ迄も離れ難なや戀しやとわけも泪ゐかき口説く娘心ぞけなげなれトくどきの振りあつて(桂)夫れ程迄ゐ慕ふのを無理ゐ殘して死ぬとても所詮生ては居やるまひなまじ未練に別ッ〳〵に死んだ所が身の耻は同じ浮名の綾瀬川(はん)是れも定まる約束と思ふてどうぞ貳人りして一所に死んで下さりませ(桂)親の許るさぬいさづらの昔の罰が今爰へ報つて來るも曾因縁(はん)產れ替つた甲斐もなふ戀しい御方は姉ェさんと女夫に成つたお關取(桂)斯うした縁の有るはしか可愛く思つた妹も(はん)いとしふ思ふた兄ィさんも二世の女夫でありながら(桂)添ふに添れぬ義理はめゐ(はん)又も死なねば成らぬとは(桂)不義はせまじき(兩人)ものじやなァ「歎きに沈じむろの樣子伺ふ二人がぬつと出ト芦原の影より金太九郎藏出て(金)見付た〳〵桂川(九郎)お半をこつち〳〵(兩人)渡して仕まへトきつと成るお半是を見て(はん)コリヤまァどうせう〳〵ぞいなァ(桂)イヤ案事るよやァ及ばぬ〳〵能所へ貳人りの奴ッ等冥土の旅の行掛に其うつ首を拔て遣らうか(金)大きな事をぬかしても骸にけちの付たやつ(九郎)最ふ恐ろしくも怖くもね〳〵さつきの搭で(兩人)こうしてやるわへト打て掛るを桂川身をかわしきつととら〳〵(桂)今度ハその手で行くものか(兩人)何をト一寸立廻つて双方きつと成る「四十八手も手管の秘術解て疊んで投げ掛てさわるともなく手捌きの四ッに渡つて引廻し嬉し屏風の内無双心盡くしに胸盡し取る手を拂ひ右左り〳〵て嬉しき常陸帶結ぶも戀じやないかいなト此内取組の所作立摸樣よろしくあはて兩人を投げ付る「叶はぬゆるせと兩人は天窓抱へて逃げ散たりト兩人向ふへ逃て這入(はん)又も障りの無い内に早ふ死して下りさませ(桂)又物はあれど竹光に水でなけりやァ死あれぬ貳人うしろの川へ妹來れ「身を投死なんと覺悟なすうしろ〳〵又も幸左衛門ト上手芦原の影より牛ケ瀬一本ざし尻はし折にて出て(牛)又物が無けりやァ牛ケ瀬が此脇差で殺して遣らう(桂)折能く出合ふ幸左衛門菊一文字の僞物を能くもさつきい渡したな其返報で今爰で投殺すから覺期仕ろ(幸)冥土へ急ぐ手めへをも相手にするも不足だが死とありやァ牛ケ瀬が投殺すから覺期仕ろ(桂)見事おぬしが(牛)おんてもね〳〵事(桂)所を斯うして(牛)何ちよこぜへな「西と東の大關が勝負い花の梅と松日覺しかりける次第成りト清元連中を消し兩人の見得より櫓太鼓の鳴物に成り兩人肌ぬぎの繻伴にて取組の立廻りよろしくトゞ左右へ別れきつとこなし此止りばだ〳〵に成り橋掛りより幸之進菊一文字の短刀を持先に才次郎段助提灯を持出て來り(幸)コリヤ桂川安心致せ菊一文字が手に入りしぞ(桂)何刀がお手に入

りしとな(牛)そんなら久馬が預つた刀はそつちへ取られたか(才)いかにも久馬が白狀なし
舊惡露顯の幸左衛門(段)又桂川のお内義も御助申て信濃屋に御無事で御出でムり升(はん)
スリヤ姉エさんにも御無事にて(幸)素性を聞し上からは惡るい樣にいせぬ程に必ず命は捨
まいぞ(桂)イヤ此上は牛ヶ瀬を手捕りになして引くゝらん(才)逃ても逃さぬ八方は(段)お
上の手當に預る捕方(幸)退かれぬ所(皆々)勝負〳〵(牛)最ふ此上は破れかぶれ片ッ端から
覺期仕ろト脇差を拔てきつと成る此時又ばた〳〵に成り上手より番太大勢十手ゑ持出て牛
ヶ瀬を取卷(番太)狼藉もの(大勢)動くなト十手を振り上げる此もやう引ばりよろしく頭取
出てはつ今日は是ぎりト目出度打出し

明治二十七年十一月廿八日印刷
同　年十二月一日發行　（定價八錢）
版權與行權所有
著作者　東京市淺草區馬道町貳丁目十二番地　竹柴金作
兼發行人　東京市京橋區新肴町八番番　酒依昌知
印刷人　同　酒依活版所
印行所